

【別紙1】

論文内容の要旨

学 籍 番 号 : 2314916

氏名 (ふりがな) : 船越 理恵 (ふなこし りえ)

論 文 等 題 目 : 音楽経験の意味づけと職業行動への影響

— 演奏を続ける MBA コース参加者による経験的語りを対象とした分析と
解釈 —

～本文～

本研究は、演奏を続ける MBA コース参加者による経験的な語りを通して、音楽経験の意味づけと、音楽経験の意味づけに見る職業行動への影響を明らかにすることを目的とするものである。

本研究における「音楽経験の意味づけ」は、具体的には「音楽経験の自己における意味づけ」である。「音楽経験の自己における意味づけ」とは、音楽経験の語り手である個人が、自分自身にとっての音楽経験の意味や価値、たとえば音楽経験を通じて学びや気づきを得たこと、考え方や生き方に変化が及ぼされたことなどについて、語りを通して見出していく思考を意味する。すなわち、本研究においては、語り手当事者の意味づける行為に寄り添い、語り手を主体とする自己にとっての音楽経験の意味を重視した。

第1章では、語りを通じて、語り手における経験の意味づけを、どのように捉えていけばよいかという問いを基軸とし、分析に際する理論的な枠組みを以下のように導いた。

経験的な語りの語り手は、インタビューの場を介することで、その自己は多元化され、二重の自己となる。二重の自己とは、語る私と語られる私の存在である。

語り手における経験の意味づけは、トランスクリプト上の語る私、すなわち<ストーリー領域>における<いま・ここ>の自己の視点から、語られる私、すなわち<物語世界>における<あのとき・あそこ>の自己に対する評価によって、現在の自己と過去の経験との間に意味が見出され、文脈としてつながりが発生している発話箇所に確認される。よって、語り手における経験の意味づけを分析するにあたっては、<いま・ここ>の自己と<あのとき・

あそこへの自己が経験した出来事とがつけられた発話箇所が分析対象となる。

具体的に意味づけの内容を分析していく際には、意味づけが語り手の個別性に基づく文脈として表れることを考慮する必要がある。よって意味づけが語られた文脈が失われる切片化やコード化を分析手順に組み込まない事例中心の分析方法をとる。

第2章では、第3章および第4章の研究に共通する調査方法と、インタビュー協力者である、演奏を続ける MBA コース参加者 10 人の語り手のプロフィールについて記述した。語り手のプロフィールは、インタビューによって語られた内容を通じて、音楽経験のストーリーラインを尊重し作成した。特に語り手の固有性が感じられると判断されたくだりについては、トランスクリプトから具体的なエピソードにまつわる発話を引用参照し、語り手がどのように演奏経験を積み重ねてきたのかについての解釈がずれないように工夫した。

第3章では、演奏を続ける MBA コース参加者における音楽経験の意味づけについて、第2章でプロフィールを記述した 10 人による語りを手がかりに、考察した。結論には以下 4 点、①音楽経験の意味づけられる自己の側面は、4 通りに集約される、②音楽経験の意味づけには、演奏者としての自己規定を促す機能がある、③音楽経験の影響は、音楽に直接関わりのない人生の側面においても見出される、④夢や目標の達成に重要な内面性の形成に、音楽経験が意味づけられている、を指摘した。その上で「演奏を続ける MBA コース参加者における音楽経験の意味づけ」について「演奏者としての自己規定をすすめ、人生における様々な領域の営みに対する音楽経験の影響を見出し、人生の原動力につながる内面性が音楽経験を通じて育まれてきたことを捉える、肯定的な思考行為である」とまとめた。

第4章では、第3章での考察結果を掘り下げる展開で、演奏を続ける MBA コース参加者による音楽経験の意味づけにおいて、職業行動への影響がどう解釈されているのかについて、考察した。結論としては、音楽経験による職業行動への影響は、以下 5 つの内容①音楽経験を通じてリーダーシップを学ぶ、②音楽経験で培ったスキルや考え方を応用する、③音楽経験によって成功イメージが描ける、④音楽経験によって、職業が決定づけられる、⑤音楽経験を通じて働き方が変わる、に集約されることを指摘し、それぞれにおいて、影響の見出され方と影響を及ぼした音楽経験に見られる共通性や特徴について明示した。

本章の結果からは、音楽経験が意味づけられた発話箇所に着目し、職業行動に関連した語りの流れを丁寧に読み込んでいくことで、音楽経験による職業行動への影響について、理論

的且つ具体的な理解を深めていけることが確認された。すなわち本研究を通じては「音楽経験が仕事に役立つ」といった感覚的な意味合いではなく、具体的にどのような音楽経験が、どういった職業行動への影響へと繋がっているのかについて、導出できた。

以上を経て、本研究の結論は以下とした。

演奏を続ける MBA コース参加者における音楽経験の意味づけに着目したことで、音楽経験が及ぼす職業行動への影響について、論理的且つ具体的な理解を導くことができた。

この結果は、語りの場づくりに留意し、音楽経験の意味づけに着目することで、音楽とは直接関係のない人生の側面や生活の領域に対する音楽経験の影響を捉えることが可能であることを提示するものである。

音楽経験の意味づけと職業行動への影響

—— 演奏を続ける MBA コース参加者による経験的語りを対象とした分析と解釈 ——

入学年度 2014 年度

学籍番号 2314916

執筆者指名 船越 理恵

目次

図表一覧	v
凡例	vi

序論	1
(1)本研究の目的と背景	1
(2)先行研究の検討と本研究の位置づけ	3
①演奏技術の熟達に対する関心	3
②音楽活動が継続される背景や要因に対する関心	4
③音楽的趣味嗜好の形成や醸成に対する関心	5
④音楽活動を通して獲得される能力が芸術以外の生活領域に「移行」することへの関心	6
(3)本研究の内容と方法	7
(4)本研究の視点	8
(5)本研究の意義	11
(6)用語の説明	12
①経験的語り	12
②意味づけ	13
③職業行動	13
第1章 経験の意味づけを分析する理論的な枠組み	14
第1節 語り研究における理論的立場の検討	15
(1)ライフストーリー論	15
(2)ライフヒストリー論	18
(3)ナラティブ論	19
(4)自伝的記憶論	20
(5)本研究における、語り研究の理論的立場	22
第2節 語りをめぐる「自己」と「自己における経験の意味づけ」	23
(1)ライフストーリーの構造と自己	23
(2)語りにおける自己の特質	25
(3)自己における経験の意味づけ	27

(4)本研究における「自己」および「自己における経験の意味づけ」に対する解釈の観点	29
第3節 語りの分析方法の検討.....	30
(1)分析方法に関する多様な選択肢.....	30
(2)事例的な分析手法と帰納的な分析手法.....	31
(3)本研究における分析方法.....	33
第4節 本研究における分析の枠組み.....	35
第2章 調査方法とインタビュー協力者	36
第1節 調査協力者と方法.....	36
(1)対象者の検討.....	36
(2)調査協力者の決定とエントリーの手順.....	36
(3)インタビューの準備と実施形態.....	37
(4)インタビュー調査の視点.....	38
第2節 インタビュー協力者.....	39
(1)インタビュー協力者の概要.....	39
(2)インタビュー協力者のプロフィール.....	41
(3)インタビュー協力者と筆者の関わり.....	52
第3章 演奏を続ける MBA コース参加者における音楽経験の意味づけ	54
第1節 分析の手順.....	54
第2節 分析結果と考察.....	55
(1)A の事例.....	55
(2)B の事例.....	59
(3)C の事例.....	64
(4)D の事例.....	70
(5)E の事例.....	73
(6)F の事例.....	77
(7)G の事例.....	81
(8)H の事例.....	86
(9)I の事例.....	88
(10)J の事例.....	90
第3節 総合考察.....	93

第4章 音楽経験の意味づけに見る音楽経験による職業行動への影響	105
第1節 分析の手順	105
第2節 分析の結果と考察.....	107
(1)A の事例.....	107
(2)B の事例.....	109
(3)C の事例.....	110
(4)D の事例.....	114
(5)E の事例.....	115
(6)F の事例.....	117
(7)G の事例.....	118
(8)H の事例.....	120
(9)I の事例.....	121
(10)J の事例.....	123
第3節 総合考察	124
結論	133
(1)各章の結論.....	133
(2)本研究の結論.....	136
(3)今後の課題.....	136
引用・参考文献一覧	138
初出一覧	149
謝辞	150

図一覧

図 1. 内的基盤を生成する側面とその他の側面の位置関係	96
------------------------------	----

表一覧

表 2-1. 質問項目	38
表 2-2. インタビュー協力者一覧	39
表 3-1. 発話における現在の自己と経験とのつながりに対する解釈	55
表 3-2. 各事例において見出された自己の側面の構成と数	93
表 3-3. 【演奏する側面】における音楽経験の意味づけ	98
表 3-4. 意味のまとまりで整理した【演奏する側面】における音楽経験の意味づけ	87
表 3-5. 事例別にみる【演奏する側面】における音楽経験の意味づけ	99
表 3-6. 各事例の【内的基盤を生成する側面】における音楽経験の意味づけの内容	101
表 3-7. 意味のまとまりで整理した【内的基盤を生成する側面】における音楽経験の意味づけ	102
表 4-1. 分析手順において参考とした先行研究	106
表 4-2. 24 通りの音楽経験による職業行動への影響	124

凡例

1. 本文中に引用した文献について、邦訳書から引用した場合は著者名をカタカナ表記とし、括弧内の出版年は邦訳書の出版年とする。原著の情報は引用・参考文献一覧に記す。
2. 引用・参考文献については、事典項目、単行本、論文および雑誌記事に分類し、著者・編著者名を50音順に、洋書の場合はアルファベット順に記した。同一著者による文献は、出版年が若い順とした。
3. インタビューを実施した語り手10名はそれぞれ、AからJのアルファベットで示す。
4. ライフストーリー論を説明する用語は、桜井厚による一連の著書に倣い、〈いま・ここ〉、〈あのととき・あそこ〉、〈ストーリー領域〉、〈物語世界〉、〈会話〉、〈指示的機能〉など、〈 〉で括った。

序論

(1)本研究の目的と背景

本研究の目的は、演奏を続ける MBA¹コース参加者による経験的な語りを通して、音楽経験の意味づけと、音楽経験の意味づけに見る職業行動への影響を明らかにすることである。

本研究における「音楽経験の意味づけ」は、具体的には「音楽経験の自己における意味づけ」である。「音楽経験の自己における意味づけ」とは、音楽経験の語り手である個人が、自分自身にとっての音楽経験の意味や価値、たとえば音楽経験を通じて学びや気づきを得たこと、考え方や生き方に変化が及ぼされたことなどについて、語りを通して見出ししていく思考を意味する。すなわち、本研究においては、語り手当事者の意味づける行為に寄り添い、語り手の自己、主体にとっての音楽経験の意味を重視していく。

音楽経験に限らず、教育を考える上で経験の意味に着目する意義については、学術的系譜において既に明白である。経験とは何か、経験に見出される教育的な意味の如何については、長い歴史の中で、多くの研究者によって問われ続けてきた。とりわけ人の学びや発達、成長に対する経験の影響や重要性については、哲学的に、あるいは心理学的に、積極的に論じられてきた文脈があり、現在もまたその議論は発展の過程にあるといえよう²。

そのような教育的観点に基づき、過去に経験された音楽活動がその後の人生にどう影響を及ぼすのかについて着目された研究もまた、音楽教育の研究領域および隣接する複数の研究領域において数多く蓄積されてきた。これらの先行研究においては、演奏家や指導者など音楽の専門家や熟達者を調査対象とし、演奏技術の熟達や発達に対して、あるいは演奏者としての成長や成熟に対して、過去の音楽経験が、どのような影響を及ぼしているのかについて洞察されているものが主流である。つまり、現時点における演奏活動の種類および形態や、音楽的な技術や能力が習得された状態、すなわち音楽的能力や音楽活動の発達に対する、過去の音楽経験の影響について捉えようとされているのである。中には、過去に経験された

¹ Master of Business Administration の略称。日本語では経営学修士。

² 著名な経験論者には、ヘーゲル、チャールズ・パース・サンダース、ウィリアムズ・ジェームズなどが挙げられる中、教育学における経験論の完成は、ジョン・デューイ (John Dewey 1859-1952) の手によってなされたといえるのが一般的である。現在は、ジョン・デューイによって完成されたと言われる経験論を基盤に、その再解釈を通じての発展研究が多様な領域において展開されている状況にある。一例として、岩崎(2016)による経験資本論、高橋(2015)による経験のメタモルフォーゼ論など。

特定の音楽活動に着目し、その活動から受けた音楽的な学びや成長を分析した試みも確認される。

筆者は、ここに一点の素朴な疑問を感じてきた。個人にとって音楽を経験したことの意味は、後の人生における音楽に関わる側面においてのみ、着目されるべきことなのであろうか。音楽経験を、そのほかの人生を構成する経験と同様に位置づけて捉えれば、個人は音楽の経験を様々に活かして、その後の人生を歩んでいくと考えるのが自然であろう。経験という言葉の本質的な意味にアプローチしたボルノーによれば「経験の作用は、経験されたものを客観化しながら、はるかに多くの事態に関係」³し、経験の影響には一切の限定性が含まれないことが明らかである。すなわち、音楽経験によって引き起こされる自己の変化や変容は、音楽に直接関わりのない人生の側面、多種多様な生活領域において担われる役割や立場の活動に対し、影響していくものと考えられる。

しかしながらそういった視点、音楽に関わる人生の側面に対してのみならず、音楽に直接的な関わりのない活動や役割に対する、音楽経験の影響に着目した研究はほとんど見当たらない。多少の関連性が見出される研究領域としては、芸術体験の転移効果研究が挙げられるが、転移効果研究は基本的に、音楽活動を通して獲得される能力が芸術以外の生活領域へと『移行』⁴することに着目した研究である。よって、音楽経験に見出された意味が、音楽活動以外の人生の側面や生活領域に影響していくことについては目が向けられていない⁵。たとえば情報処理能力や人間関係能力といった、音楽に関わる生活領域のみならず、社会生活全般において求められる能力が音楽経験を通じて獲得されたり向上したりすることを、知能検査をはじめとする認知研究の領域に立脚したアプローチによって証明することに、芸術体験の転移効果研究の目的がおかれているのである。

人は音楽に何を学び、人生においてどのように活かしていくのか。ひいては、音楽の経験は、どのように人生へと影響を及ぼすのであろうか。その際、人生の側面を音楽活動に関わる領域に限定せず、様々な時期、多様な側面が有されることを前提とした人生において見出される音楽経験の影響を捉えることに、本研究を手掛ける根源的な動機がある。もともと、ひと言に、音楽活動に直接関わりのない人生の側面といっても、それは抽象的且つ幅の広い概念である。実生活を想定して考えてみても、音楽活動と直接関わりのない立場や役割において展開される活動は実に多様であり、その全体像を捉えにくい。

ここで、本研究を支える根源的な動機に立ち戻って考えると、最も重要なことは、音楽活

³ 吾田(1998)p.240

⁴ リッテルマイヤー(2015)pp.4-5

⁵ 船越(2016)p.2

動に直接関わりのない人生の側面に対する音楽経験の影響を明らかにすることにある。よって、本研究においては、音楽活動と直接関わりのない人生の側面、つまりは実生活下で担っている立場や役割における活動の領域を特定して分析することで、音楽経験の影響について明瞭に捉えていくこととした。具体的には、音楽活動と直接関わりのない立場や役割における活動として「働くこと」、すなわち職業行動に焦点化していく。

本研究において、職業行動に焦点化する理由を端的に述べると、現代社会では特に、自己定義において職業が重要な役割を果たすというC・リンド(1993)の指摘に依拠する⁶。自己定義に重要な役割を果たすということは、働くことを通じて特定の立場や役割を担うことが、多くの個人の人生における主要な側面であり、実生活においても多くの時間が投じられる活動であることを意味している。つまりは、現代社会においてはとりわけ、職業行動のあり方が個人の生き方を規定する主要因に成りうるのである。この点に、職業行動に焦点化する意義が見出せると考えた。そこで本研究においては、演奏経験の豊富な社会人MBAコース参加者の方々を調査協力者として設定する。調査協力者の妥当性についての詳細は第2章にて記述する。

以上が、本研究における目的と背景である。よって本研究では、演奏を続けるMBAコース参加者による、経験的な語りを通して、音楽経験の自己における意味づけと、音楽経験の自己における意味づけに見る職業行動への影響を明らかにすることを眼目とする。語りという意味づけの行為を通して見出される、音楽経験による職業行動への影響について、筆者なりの見解を導いていきたい。

(2) 先行研究の検討と本研究の位置づけ

過去の音楽経験がその後の人生に与える影響について目をむけた研究は、大きく四つの関心に分けられ、その展開を捉えることができると考えられる。第一に演奏技術の熟達に対する関心、第二に音楽活動が継続される背景や要因に対する関心、第三に音楽的趣味嗜好の形成や醸成に対する関心、第四に音楽活動を通して獲得される能力が芸術以外の生活領域に「移行」することに対する関心である。

① 演奏技術の熟達に対する関心

第一に、過去の音楽経験と演奏技術の熟達との関係に関心がよせられた研究は、主に音楽教育学の分野にて知見が積み重ねられてきたといえる。これらは基本的に、現時点で行われ

⁶ 桜井(2002)p.215

ている音楽活動の具体的な内容や状況を支える演奏技術がその熟達レベルに到達するまでの過程において、どのような音楽経験が積み重ねられてきたのかについて、インタビューや質問紙を用いた調査を通じた丁寧な洞察がなされている。また調査対象は、演奏家や指導者といった音楽の専門家、音楽大学で学んだ熟達者であることが多い。たとえばマンチュエルゼウスカ(Manturzewska 1993)は、プロフェッショナルな音楽家のライフスタイルに関して、インタビューを介して経験的データを収集し、彼らのそれまでの生活構造についての検討をすすめた。またスロボダ(John Sloboda)は、このテーマに関して多くの知見を提示しており、たとえば、音楽家のレベルに値する高水準な演奏技術の獲得にいたらしめる学習経験や家族環境のあり方についての洞察(Sloboda and Howe, 1991)や、専門的な音楽技術の習得に影響する環境要因の探究を進めている(Sloboda, Davidson, Howe and Moore, 1996)。その他にも、熟達レベルの技術習得にむけた計画的な練習の有効性に関する研究(Ericsson, Krampe and Tesch-Romer, 1991 and 1993)や、音楽学習の開始年齢と後に到達する演奏水準との関係についてまとめられた調査研究(Jorgensen 2001)も、演奏行為の熟達と過去の音楽経験との関係について着目した先行事例としてあげられよう⁷。

②音楽活動が継続される背景や要因に対する関心

第二には、音楽活動が継続された背景や要因について、過去の音楽経験を通じて洞察を試みた一連の研究があげられる。現時点における演奏技術の水準は問わず、長期にわたって音楽活動を継続してきた人たちの過去の音楽経験に着目し、音楽経験の中に捉えられる楽器との関わり方や、指導者や仲間との出会いや関係、練習の積み重ねられ方を明らかにすべく、インタビューや質問紙を用いた調査を介してアプローチされている内容が主である。この種の先行研究は決して多くないが、中でも、ピッツ(Stephanie Pitts)は、生涯を通して音楽と関わり続ける人生に着目した研究を重ねており、自身の著書 “*Chances and Choices: Exploring the Impact of Music Education*” (2012) では、生涯を通して音楽と関わり続ける人々の音楽経験の分析を通じて、音楽教育が及ぼす長期的な影響について洞察している。Pitts(2012)は、半構造化インタビューを行ない、音楽学習をはじめとする過去の音楽経験を細やか且つ網羅的にとらえた。インタビューの質問項目を参照すると、いわゆる意図的な学習活動のみならず、あらゆる生活の場において結果的に発生する偶発的な音楽学習行動にも焦点化していることが明らかである。具体的には、学校の授業をはじめ、プライベートレッスン、クラブ活動、趣味、あるいは家庭での習慣、親との関わりなど、多様な角度から音

⁷ Fieker Wermer(2005)pp.17-23

楽学習を捉えようとしたピッツからは多くの示唆を得ることができる。

③音楽的趣味嗜好の形成や醸成に対する関心

第三の関心には、音楽的趣味嗜好の形成や醸成がなされる条件や特徴に関して、過去の音楽経験を通じて洞察を試みた一連の研究が挙げられる。たとえば杉江淑子は長年、生涯を通じた音楽との関わりの変遷や、成人の音楽関与についての研究を先導的にすすめてきた。特に音楽的趣味・嗜好性(musical taste)の形成に関する一連の論考(杉江 1995, 2001, 2004, 2006 他)は「どのような社会的・文化的文脈のもとで、どのように自らの音楽的趣味・嗜好(musical taste)を形成し、音楽的アイデンティティを確立しているのだろうか」⁸という杉江独自のリサーチ視点を基軸に蓄積されている。“社会的・文化的文脈のもとで”というくだりからは、学校教育をはじめとした、いわゆる音楽学習体験のみを音楽的趣味・嗜好性の形成要因として仮説立てするのではなく、音楽に関わる体験全般をより幅広く、形成要因の選択肢として捉えていることがうかがえる。また社会学や教育社会学の領域では、階層文化の一つの指標として音楽的趣味思考への関心が向けられ、主にはクラシックジャンルの音楽に対する構えと過去の音楽経験との相関に着目される傾向が見てとれる⁹。加えてブルデュー(Pierre Bourdieu)らによって提唱された文化の階層性や文化的再生産の問題を実証的に研究する立場をとるものが少なくない。日本では片岡栄美が中心となり、ブルデューの文化資本論を日本の実状にあてはめた調査・研究が展開されてきており、中には芸術分野を音楽に限定した研究報告もなされている(片岡 1998)。たとえば、クラシック音楽会に行くという具体的な行為を「芸術文化への嗜好」がどのように獲得伝達されていくのかを調べる指標として用い、一方で文化活動への興味・関心、活動開始のきっかけ、あるいは影響を与えた人を明らかにするために過去の音楽経験に関する調査研究が行なわれている(片岡 1997)。なお片岡の研究においては、音楽の専門性や技術の熟達度に関する程度は問われていない。ブルデューによれば音楽行為は「身体化された文化資本」¹⁰に包括されるが、片岡はこの身体化された文化資本についてさらに「好み」や「趣味」という用語に言い替えている¹¹。すなわち「好み」や「趣味」は、音楽についての専門性や熟達度の程度に関わらない軸から音楽行為を捉える用語として取り扱われていることがうかがえる。

⁸ 杉江(2004)p.1

⁹ たとえば西島(2003)は、クラシックコンサートの会場参集者を調査対象とし、音楽学習歴を含む過去の経験や生活環境との相関に着目した研究報告をしている。

¹⁰ ブルデュー(1990)pp.18-28

¹¹ 特に顕著なのは、片岡(1997)であり、論文冒頭部分に明示されている。

④音楽活動を通して獲得される能力が芸術以外の生活領域に「移行」することへの関心

第四は、音楽に直接関わらない生活領域における活動や人生の役割に対し、過去の音楽経験が及ぼす影響への関心である。この潮流は主に、芸術体験の転移効果研究の領域を中心として議論がなされてきた。芸術体験の転移効果研究は基本的に「芸術活動を通して獲得される能力が芸術以外の生活領域へと『移行』¹²することに着目した研究である。分析手法には、知能検査をはじめとする認知研究の領域に立脚したアプローチが用いられ、社会生活全般において求められる能力が音楽経験を通じていかに獲得されたり向上したりするかについての洞察が行われている。たとえば、グレボス(2006)は、音楽教育や芸術教育を重視した小学校の児童とそうでない一般的な小学校の児童とを比較し、前者において創造力、記憶力、集中力の向上が確認されたことを報告している¹³。またグレン・シェレンバーグ(1997)によれば、6歳～11歳までの147人の子供について、音楽(音楽教育)の経験の長さが知能水準及び学業成績と相関関係にあることを明らかにしている¹⁴。一方で、芸術体験の転移効果研究の動向を概観したリッテルマイヤー(Christian Rittlemeyer)が「個々人の人間形成プロセスに置いて芸術体験が果たす現実的役割に関心を払う必要がある」¹⁵ことを指摘しているとおり、芸術体験の転移効果研究の領域においては、音楽経験を通じた、経験の主体にとっての学びや気づき、成長が、音楽活動以外の領域でどのように効果を発揮するのかという問いには、目が向けられていない。

以上のように、過去の音楽経験がその後の人生に与える影響を捉えた先行研究は、複数の研究分野をまたいで確認することができる。しかし、音楽に直接関わりのない生活領域の活動や役割に対し、音楽経験を通じた学びや成長がどのように関係しているのかに注目した研究は未だ皆無に等しい状況である。本研究は、演奏を続けてきたMBAコース参加者を調査対象とし、音楽と直接関わりのない生活領域として職業行動に関わる領域に着目し、音楽経験の意味づけがどのように自己へと関わり、影響をもたらしているのかを明らかにする取り組みである。音楽経験を通じて見出される学びや気づきが、音楽に直接関わりのない生活の領域や人生の側面における影響に焦点化した点において、本研究の独自性が捉えられよう。

¹² リッテルマイヤー(2015)pp.4-5

¹³ 同上 pp.28-34

¹⁴ 同上 p.22

¹⁵ 同上 p.55

(3)本研究の内容と方法

本研究における目的の本質は、人生における音楽経験の意味を捉えるところにある。したがって、研究全体のデザインとしては、人々の意味世界を探究する最も有力な方法としてのインタビューを選択し、インタビュー調査によって収集した経験的な語りを用い、質的研究の諸理論を援用した、記述的研究方法を採用した。以下は、各章それぞれにおける具体的な内容と研究方法である。

本研究は、4章構成の本文と、序論、結論から成る。

序論においては、研究の目的と背景、先行研究の検討、研究の内容と方法、研究の意義、研究の視点、用語の説明をまとめている。

第1章では、文献や論文など先行研究の調査を通じて、語りを通じて経験の意味づけを分析するための理論的な枠組みを構築した。具体的には、語り研究の諸理論を概観した上で、本研究における語り研究の理論的な立場を明示し、研究目的に沿った語りの分析方法を確定した。さらに、分析の視点を決定づける、語りにおける自己をどのように解釈するかについて整理した。

第2章では、調査方法とインタビューについてまとめた。調査の進め方および質問項目については、第1章で構築した理論的枠組みに則しながら、先行研究および自身の予備的研究(2012)を参考に確定した。インタビューについては、第3章および第4章にて研究対象とした、演奏を続けるMBAコース参加者10名のプロフィールの内容を記述した。各個人のプロフィールは、音楽にまつわる内容から成り、これまでの人生における演奏を中心とした音楽活動の歩みについてまとめた内容とした。パーソナリティが強く感じられると判断した経験の箇所については、経験的語りからエピソードを抜粋し参照できるようにすることで、プロフィールを通じて、各個人の音楽的な歩みを深く理解できるよう工夫した。

第3章では、演奏を続けるMBAコース参加者における音楽経験の意味づけを明らかにすることを目的に、語りの分析をすすめた。具体的には、インタビューを通じて収集した音楽経験についての語りをトランスクリプト化し、10人の事例それぞれから、語り手が自己に対し音楽経験をどう意味づけているのかについて分析した。また、多数派の事例に基づく理論の一般化を目指すのではなく、少数派の事例、個別的な事例を尊重した結論を目指した。

第4章では、第3章の考察結果を深掘りする形で展開し、演奏を続けるMBAコース参加者に見る、音楽経験による職業行動への影響について、考察した。具体的には、第3章で抽出した、音楽経験が意味づけられた発話箇所のうち職業行動に関連する話題が展開されて

いるものを分析の対象とし、音楽経験の意味づけの内容を参照しながら、どのような音楽経験による職業行動への影響が見出されているのかを明らかにしていくことを眼目とした。

結論では、本研究のまとめとして、総括と今後の課題について記述した。

(4)本研究の視点

本研究において、筆者は、音楽に関わる活動や出来事を通じて個人にもたらされる影響について、その個人が経験として捉えた、音楽に関わる過去の活動や出来事によって見出される影響、すなわち主観によって捉えられた内容に着目していきたいと考えている。影響を捉える際に重要なことは、データや数値の検出によって影響の発生に関する有無や程度を客観的に立証することよりも、その個人にとってどのような意味や価値が含まれ、見出されるのかを知ることにあるという想いを有しているからである。そして、それゆえに、経験的語りに着目した研究デザインなのである。

本研究におけるこのような視点は『音楽教育研究ジャーナル』第45号における投稿論文「音楽体験の転移効果研究におけるライフストーリー活用の有効性—C・リッテルマイヤー『芸術体験の転移効果』の批判的検討を通して—」を経ていた。よって以下より、本拙論文内容を参照する形式で、本研究の視点について記述する。なお、本拙論文においては、ライフストーリーの意味について、個人の一生、あるいは個人の生活の過去から現在に関する、経験的語りと説明している。本研究においては、読み手の解釈の混乱をさけるため、ライフストーリーを経験的語りという用語に統一して記述する。

リッテルマイヤーの著書において動向がまとめられているのは、音楽をはじめとする芸術体験の転移効果研究の領域である。リッテルマイヤーによれば、芸術体験の転移効果研究とは、芸術活動が青少年の認知的・社会的・情緒的発達に及ぼす作用を明らかにしようとする研究である¹⁶。なおここで示されている「芸術」について、リッテルマイヤーは、世界各地に共通する芸術教育の領域である「絵画、音楽、工芸、造形、彫刻、ダンス、演劇」¹⁷を想定している。さらに「転移」とはすなわち「能力の転移」の意味であり、音楽教育や演劇といった芸術体験を通して獲得される能力が芸術以外の生活領域へと「移行」することを意味する¹⁸。さらに「能力」については、聴覚に関する認知能力、一定の課題を解決する手際の良さ、多様な観点を考慮して判断を行う能力、情報処理能力、人間関係能力、創造性、柔軟な思考、空間認知能力、学問的遂行能力、情緒に関わる能力を、その一例として挙げてお

¹⁶ 同上 p.12

¹⁷ 同上 pp.4-5

¹⁸ 同上 p.9

り¹⁹、よって、音楽体験の転移効果を捉えるアプローチには、基本的に、知能検査の実施など、認知研究の領域に立脚した手法が使用される²⁰。

すなわち、芸術体験の転移効果研究も、音楽活動を通じて養われた「能力」が、他領域におよぼす作用に着目した点で、音楽に関わる活動や出来事を通じて個人にもたらされる変容や変化について着目した研究といえるが、それは認知的な測定を前提とした「能力」の転移にみる影響であり、個人やその人生にとっての意味や価値に対しては関心のまなざしが向けられていない。

どのようにすれば、個人にとっての意味や価値を尊重した音楽に関わる活動や出来事による影響にアプローチすることができるのだろうか。この問いについて示唆を得る視点として、リッテルマイヤーは、その著書において、音楽をはじめとする芸術体験の転移効果研究が主に認知研究の領域において進められてきたことを批判的に指摘したうえで、今後は、社会的・道徳的領域の研究として、芸術体験が人間の一生に果たす役割、個々人の人生経路における役割に拡大して捉えていくべきと述べている。リッテルマイヤーが意味する、社会的・道徳的領域の研究から捉えられる芸術体験の転移効果とは「人生の選択そのものに関わるものであり、何かのテストで測定できるような認知能力をはるかに凌駕したもの」であり、「古代以来、芸術教育の理論的基礎づけへの関心を喚起」させてきたものである²¹。そして、音楽体験が果たす現実的な役割、すなわち音楽体験によって引き起こされる人生への影響を解明する手立てとして、経験的語りを提示している。リッテルマイヤーは、音楽体験の転移効果研究に経験的語りを活用するメリットについて、以下のようにまとめている。

音楽活動や音楽を聴く体験が、一人ひとりにとってどれほど深い意味を有しているかを教えてくれる。(中略)しかしながらこうした側面には、従来の転移効果研究は全く注意を払うことはなかった²²。

音楽が個々人の学習動機を誘発し、人間形成プロセスを方向づけることもできることが明らかとなる。このような体験は、何かのテストで想定できるような認知能力をはるかに凌駕したものであり、根本的な人生選択そのものに関わるものである²³。

¹⁹ 同上 p.9, p.13

²⁰ 船越(2016)pp.3-4

²¹ リッテルマイヤー(2015)p.54

²² 同上 pp.54-55

²³ 同上 p.54

リッテルマイヤーは、経験的語りの活用例として、女性歌手のインタビューを耳にした経験を紹介している。その歌手は《魔王》のドイツ語による演奏を聴く経験から、歌手になることを決意しただけでなく、ドイツ語を習得することも決意した経緯を有しているという。リッテルマイヤーはこのことから「音楽が個々人の学習動機を誘発し、人間形成プロセスを方向づけることもできることが明らか」だと導いた²⁴。

こうした、リッテルマイヤーの一連の議論は、主観によって見出される、過去に体験された音楽に関わる活動や出来事の影響が、経験的語りを通じて捉えられることを示唆している。

加えて、リッテルマイヤーは、過去、音楽活動が認知能力やそのほかの能力に及ぼす作用について調査されてきた際に、しばしば、音楽活動の受け止め方が個々人によって異なるという事実について、十分な考慮がなされてこなかった点について主張している。そして経験的語りからは、同じ芸術体験が人によって異なる作用を及ぼすという個別性に焦点を当てる際に、有用な知見が導出できることを指摘している²⁵。これらの見解を通じては、複数の個人が共通の音楽活動を体験したとしても、その出来事が個人の人生に及ぼす意味合い、ひいては経験としての音楽体験から捉えられる影響というのは、それに対する個人の向き合い方によって異なるという気づきが導かれた²⁶。よって、過去の音楽に関わる出来事や活動への主観的な影響に着目する場合には、体験としてではなく、経験としてのそれに着目する必要がある²⁷。そして、どのような体験も、語られた時点で経験になることから、本研究においては、経験的語りへの着目が必然であると解釈した。

最後に一点、リッテルマイヤー自身の主張にはないが、芸術体験の転移効果研究を概観する立場にあるリッテルマイヤーが、経験的語りの有効性に着目したこと自体から得られた、本研究の視点を定める重要な示唆について述べておきたい。筆者は、音楽経験の影響が作用する対象として、音楽活動とは直接関わりのない人生の側面や生活の領域に着目したいという考えを持ってきた。そして、芸術体験の転移効果研究は、音楽活動による個人の能力の伸

²⁴ 同上 p.54

²⁵ 実際に、芸術体験が人によって異なる作用を及ぼすことの知見が既に伝記的報告から得られているとリッテルマイヤーは明示している。参照は、R. Oerter/Th. H.Stpffer (Hrsg.): *Spezielle Musikpsychologie. Enzyklopadie Psychologie Band D.VII. 2. Gottingen 2005, 343ff.*

²⁶ この原理については、スポーツ経験の経験的価値に着目した石垣(2008)、高橋(2011)の議論においても、同様の指摘がなされている。

²⁷ 経験と体験の概念の際に関する理解については、吾田(1998)「経験の体験化—森有正とボルノーの経験概念—」の解釈に基づく。

長が、他領域におよぼす作用に着目している点において、筆者の関心との共通性が見出された。もっとも、転移効果とは客観性が担保された、音楽体験によって育まれた能力が他領域へ移行する意味であるため、筆者が捉えたい音楽経験の影響とは異なるものである。しかしながら、他領域に及ぼす作用に着目する転移効果研究の動向を概観したリッテルマイヤーが経験的語りに着目したことによって、領域の異なる活動や体験同士でも、語りを介することで、両者の関わりやつながりを見出していけることに気づかされたのである。すなわち、概念としては脈絡を持たない音楽経験と職業行動も、語りという自己への意味づけを介することで、音楽経験によって自己にもたらされた変化や変容が、職業行動へと、時に因果関係をもって結びつけられていく。そこに見出されるものが主観的に捉えられた影響であると解釈した。

以上に述べた経緯により、本研究においては、経験的な語りを手掛かりに、音楽経験の影響を捉えていくこととする。もっとも、リッテルマイヤーの著書においては、経験的語りを具体的にどのように読み取っていくかについての言及は一切なされていない。よって個々人が、音楽体験をどう経験として語り、自己に意味づけていくのかを細やかに捉えていくに際しては、語りの研究に関する諸理論から語りの構造を整理していくことから手掛ける必要があることも認識された。

(5)本研究の意義

本研究の意義は、以下の三点に集約される。

第一に、音楽と直接関わりのない人生の側面としての職業行動に対する音楽経験の影響に着目した点である。昨今、音楽教育に期待される役割は、世界各国の教育実践においても、国家機関が制定する教育指針においても、もはや芸術の領域に限定されなくなってきており²⁸、それは日本においても同様である。そして、産業構造の複雑化と経済競争の激化が進む現代の日本社会においては、人々の経済的、そして社会的な自立を促す教育的な取り組みの重要性が謳われて久しい。このような状況を鑑みると、本研究において、音楽と直接関わりのない人生の側面の中でも、特に職業行動に焦点化し音楽経験の影響を明らかにすることを試みた意義は少なからず見出されると考えられる。

第二に、音楽と直接の関わりを持たない活動領域における、音楽活動の意味や価値を捉えるための研究方法を追求している点である。一般的に、行動や活動として具体的な関連性を

²⁸ たとえば、フィンランドやイギリス、アメリカなどで、学校教育における起業家教育の一環として、音楽をはじめとする芸術教育を取り入れた実践の報告がなされている(菅野2012, 弓野2005 他)。

持たない出来事の間柄において、因果関係や相互関係を見出し、発生する意味や価値、影響について言及することは難しい。そこで本研究においては、経験的語りを介して、自己に対して経験を意味づける語りの営みと、語られた内容の展開から因果関係を読み取ることで、音楽と直接の関わりを持たない活動領域における音楽活動の意味や価値を捉えることを試みた。音楽教育の研究領域においては、音楽と直接関わりを持たない活動領域や人生の側面に対する音楽活動の意味や価値を捉えることを試みた先行研究自体が皆無に等しく、当然ながら研究方法も確立されていない。本研究は、音楽教育学の研究領域における有意義な取り組みとして位置づけられよう。

第三に、研究協力者である個人に対し、音楽経験を語るという機会を提示できた点である。本研究を通して、語り手にとって音楽経験を語ることは、これまでの人生における少なからずの時間とエネルギー、そして想いを注いできた音楽に関わる活動が自身にもたらす意味を見出していくことのできる行為であることがわかった。実際、語りを通じては、過去の挫折や失敗を意味する経験も肯定的な経験として意味づけられ、また、意味づけられた経験から、将来への展望が広げられていく場合も確認された。すなわち、語りを通じて、研究協力者個人において、発達し変化する主体としての自己が捉えられた点に関して、特に生涯発達心理学の研究観点からの意義が見出されると考える。

(6)用語の説明

①経験的語り

経験的語りは多義的である。経験的語りは一般的に、インタビューを通じて、語り手が自らの過去の経験について振り返った語りである。経験的語りには、ライフストーリーやライフヒストリー、オーラルヒストリー、ナラティブ、自伝的記憶等、多くの類似概念があり、類似概念に対する経験的語りの位置づけは、研究者の立場や解釈によって異なる。たとえば隣接用語を包括する用語として用いられる場合や、隣接用語の定義が充てられる場合がある。また、研究資料として加工が施されていない状態の語りを指す用語として用いられる場合もある。本研究における経験的語りの定義は、桜井(2012)に倣い「出来事の〈体験〉について、反省的に振り返った〈経験〉をもとにした語り」²⁹とし、経験的語りは以降「語り」と記述する。

²⁹ 桜井(2012)p.20

②意味づけ

語りにおける意味づけの定義は多義的であり、研究者や研究目的によって様々である。また、明確な定義づけがなく使用されることも多い。やまだ(2008)によれば、意味づけには大きく3つの方向性があるという。一つ目は「個人の主体性や自己、主観的意味や当事者の意味づけを重視する方向」³⁰、二つ目は「人間が経験を組織立てる方法、つまり編集行為として『意味づける行為』を中心テーマとする方向」³¹、三つ目は「社会的構成や社会表象としてナラティブを扱い『社会的意味』を大きくみる方向」³²である。ライフストーリー研究の視点にたった語りの研究では、二つ目の方向性が主として考えられる。たとえば、安田(2012)は、意味づけについて「語られた内容とそれに対する語り手による評価の産物」³³と定義しているが、語り手による語られた内容に対する評価の視点が強調されている点は、「編集行為として『意味づける行為』に通じる内容と解釈できる。本研究における意味づけもまた、やまだ(2008)が示す二つ目の方向性の解釈に則る。その理由は、本研究で明示する音楽経験の自己における意味づけも、職業行動への影響も、語り手の今の視点から、現在の自己につながる経験として、組織され、筋立てられた音楽経験についての語りから導出されるからである。

③職業行動

心理学研究の立場から職業行動に関する議論を展開してきた森下(1983)によれば、職業行動とは「人間が営む職業・労働に関わる行動」³⁴である。加えて「個人が職業の選択を行い、また職業への適応をはかる人間の全ての反応を意味する」³⁵のものであるともされているように、職業行動は二つの側面を有し、一方は職業選択行動、他方は職業適応行動である。また職業行動における行動とは「顕在化した行動(ふるまい)だけでなく、認知的・情緒的側面をも加味したもの」³⁶であり、「内面的な認知、意識の世界をも含めた行動の概念」³⁷が適用される。本研究における職業行動の定義は、森下(1983)の解釈に倣う。

³⁰ やまだ(2008)p.7

³¹ 同上 p.7

³² 同上 p.8

³³ 安田(2012)p.41

³⁴ 森下(1983)p.5

³⁵ 同上 p.5

³⁶ 同上 p.6

³⁷ 同上 p.6

第1章 経験の意味づけを分析する理論的な枠組み

経験的語り(以下、語り)の研究については、様々な質的研究法としての理論と、多様な分析方法が存在する。加えて、語りの研究については、標準的な方法というものは基本的に存在しないため、研究者の判断に任されている。よって本研究においても語りを採用するにあたっては、語りへの適切なアプローチについて検討する必要があるだろう。

筆者は、予備的研究として、語りの主要な研究法の理論を概観し、また実際に M-GTA³⁸や佐藤の質的コーディング法³⁹、SCAT⁴⁰など、語りの分析方法に関する諸理論を援用する形でデータ分析を繰り返してきた。その過程を経ての気づきは、依拠する研究理論や、援用する分析方法によっては、研究の目的が果たされなくなってしまうということである。また依拠する研究理論によって、援用する分析方法にも一定の限定がなされることもわかった。さらに、研究の質を保つためには、分析の観点を理論的に明確化することの必要性も認識された。

本研究の目的は、演奏を続ける MBA コース参加者による語りを手掛かりに、音楽経験の意味づけと、音楽経験の意味づけに見る職業行動への影響を明らかにすることである。よって、研究目的の達成においては、語りを通じた語り手における経験の意味づけが明確に解釈されることが不可欠といえるだろう。そこで本章では、語りを通じて、語り手における音楽経験の意味づけを、どのように捉えていけばよいのかという問いを基軸とし、分析に際する理論的な枠組みについて検討していく。

具体的には、インタビューにおいて語られた語りをどのような質的研究法の立場から捉えるのか、そして、語り手における経験の意味づけをトランスクリプトからどのように読み解いていくのか、さらに経験の意味づけについての内容分析をどのように進めるのかという三点から、分析の枠組みを論述していきたい。

³⁸ グレイザー(Barney. G. Glaser)とシュトラウス(Anselm L. Strauss)によって提唱された GTA(Grounded Theory Approach/グラウンデッドセオリーアプローチ)を、木下康仁が修正を施した分析手法で、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチとよばれる。詳細については木下(2007)参照。

³⁹ 佐藤(2008)『質的データ分析法』にまとめられた、質的データの分析方法である。グラウンデッド・セオリー・アプローチとの親和性が高いが、事例の分析に重きがおかれる点やテキストの文脈を重視する点、コーディングのアプローチが機能的且つ演繹的である点においての違いが指摘される。詳細は佐藤(2008)pp.191-192参照。

⁴⁰ SCAT(Steps for Coding and Theorization)は、大谷尚(2008)が提唱した分析手法。GTA と比較し、小規模なデータへの採用が適している。分析の手順が明確に示されているため、分析初学者においても導入しやすいとされる。

第1節 語り研究における理論的立場の検討

本節では、インタビューにおいて語られた語りをどのような質的研究法の立場から捉えるのか、という点について着目する。

語りの研究には、様々な解釈を根拠づける理論的な立場が多様に展開されている。本節では、語りの研究を説明する主要理論として、ライフストーリー、ライフヒストリー、ナラティブ、自伝的記憶について概観し、本研究における語りの研究の立場について検討する。

(1) ライフストーリー論

ライフストーリーという用語は、研究資料としての語りの意味で使用される場合と、研究方法の意味で使用される場合とがある。先行研究においては、一つの文脈の中で、ライフストーリーが異なる意味を担う場合もあり、用語としての概念に曖昧さや不安定性をはらむ部分が指摘されよう。本節においては基本的に、研究資料としての語りの意味でライフストーリーを使用する。研究方法として意味を持たせる場合は「ライフストーリー研究」、理論研究の意味で使用する場合は「ライフストーリー論」とするなど、必要な語を補足する。また研究資料としての「語り」の意味をさらに限定する場合は「トランスクリプトとしてのライフストーリー」「行為としてのライフストーリー」など、その都度、その意味を明記することとする。

まずはライフストーリー研究における主要な研究者の知見を概観する。国内におけるライフストーリー研究の第一人者である桜井は、ライフストーリーの本質として「ライフストーリーは、私たちの自己概念を表現している」⁴¹と述べ、自己に着目した語りとしてライフストーリーを位置づけている。社会学の立場にある桜井(2002, 2005, 2012, 2015 他)は、長年にわたり、人が語るということ、とりわけライフストーリーがインタビューという対話の場における相互作用を経て語られる側面に着目した研究を多く行なってきた。これまでの著書や論文において、ライフストーリーについては何度も定義づけられており、たとえば「ライフストーリーとは、一般的に個人が歩んできた自分の人生について個人の語るストーリー」⁴²、「人生で意味があると思っていることについて選択的に」⁴³語られたもの、「個人のライフ(人生、生涯、生活、生き方)についての口述の物語である。また、個人のライフに焦点をあわせてその人自身の経験をもとにした語りから、自己の生活世界そして社会や文化

⁴¹ 桜井(2002)p.210

⁴² 同上 p.60

⁴³ 桜井(2005)p.10

の諸相や変動を読み解こうとする質的調査法の一つ」⁴⁴などがある。時に研究資料として、時に研究方法として、ライフストーリーの定義づけがなされているが、その意味が根底から覆されるような変遷は辿られていない。

桜井の立場を引継ぎ、生涯発達心理学の観点からの知見を重ねたのがやまだ(2000, 2007a, 2007b 他)である。やまだは、特に、ライフストーリーの生成性および変革性に注目した。やまだはライフストーリーについて「その人が生きている経験を有機的に組織し、意味づける行為」⁴⁵、「語り手と聞き手によって、共同生成されるダイナミックなプロセス」⁴⁶と述べている。よって、ライフストーリーとは、絶えずつくりられ、組み替えられる生きた生成プロセスであり、ライフを生成的に変化させるという意味で「生成的物語」とも言い替えられる⁴⁷。さらに、人は、過去の出来事を変えることはできないが、ライフストーリーによって、過去の出来事を再構成することが可能であることを指摘し、その行為が、人生に新しい意味を生成する上で重要であると述べた⁴⁸。

桜井とやまだ、両氏によるライフストーリー議論には、共通の見解が多く見出される。たとえば、二つ以上の経験と経験をつなぎ合わせ、意味づけしていることや、過去を自分の人生へと結びつけていくこと、そして語り手と聞き手の相互作用を通じて生成されることについての指摘は、基本的に一致している。

さらに大久保(2008)は、ライフストーリーの特徴について、ライフヒストリーとの比較を通じ、要約すると以下5点①ライフストーリーにおける聞き手は、共同制作者として考えられる。聞き手が違えばライフストーリーの内容は変化する、②ライフストーリーは、人生のある時期の一つのエピソードが単独で語られている場合も含まれる、③ライフストーリーには未来を展望して語られたものも含む。時間の構造において、現在は(回想された)過去と(展望された)未来の両方を包括するものである、④ライフストーリーは自己論と密接に関連している。語ることで「私」は自分という人間がどういう人間であるかを認識する、⑤ライフストーリーは、個人の語りを規定している文化としての語りをも含む概念である、の特徴を指摘した⁴⁹。桜井ややまだの議論と比較した際の違いは、特に⑤の観点を、ライフヒストリーにはない、ライフストーリーならではの特徴として強調している点にある。もともと昨

⁴⁴ 桜井(2012)p.6

⁴⁵ やまだ(2000)p.1

⁴⁶ 同上 p.1

⁴⁷ 同上 p.3

⁴⁸ 同上 pp.1-3

⁴⁹ 大久保(2008)pp.1-3

今のライフストーリー論の動向においては大久保の見解は珍しいものではない⁵⁰。なお大久保はライフストーリーについて「人々が人生を生きる仕方の分析であり、それを通じて、その社会的状況への人びとの適応について考察しようとするもの」⁵¹がライフストーリーであると述べている。

また高松(2014)は、ライフストーリーをレビューするという観点からライフストーリーを「これまで余り語ってこなかった過去の経験について、他者の協力を得ながら光をあて、言語化を行ない、その経験の意味を考えること」⁵²と定義づけした。余り語られてこなかった、言葉にならない経験を「異文化(こころの中の異文化)」⁵³と定義し、聴き手との対話によってこそ、異文化に言葉がもたらされることを指摘している⁵⁴。高松の見解からは、インタビューの場における、言語による相互作用によって経験に意味が与えられるという、ライフストーリーを語るという行為それ自体の意義や機能を重視する視点が感じられよう。

このように、ライフストーリーは、研究者によって様々な概念定義がなされており、一義化するの難しい。しかしながら、全体に共通して言えることとしては、ライフストーリーが、語り手としての自己が何者であるのか、どのようにして今にいたったのかを知る術として重要と認識されており、よってライフストーリー論に基づく研究としては、人生の意味づけや生き方を知ることの重きを置かれた展開がなされていく傾向が窺える。

次に、ライフストーリー論の議題として頻繁に取り上げられる、事実の捉え方について、理論的整理を行う。

亀崎(2010)は、ライフストーリー研究⁵⁵における事実の捉え方を整理した際、「客観的事実よりも『主観的なリアリティ』を語り手の真実として捉え、語り手自身の中で一貫し矛盾のない『内的一貫性』を重要な指標」⁵⁶とするのが、ライフストーリー研究であると明示した。亀崎の見解は、ライフストーリー研究において広く一般的であると考えられよう。また上述の桜井(2002)は、ライフストーリーの基本概念として、ライフストーリーが「事実であるのか想像上の事柄なのかは問題ではな」⁵⁷く、自分の人生(生活)経験を表現するのにもっとも

⁵⁰ たとえば高松(2014)なども同様の指摘をしている。

⁵¹ 大久保(2008)p.48

⁵² 高松(2014)p.2

⁵³ 同上 p.2、p.18

⁵⁴ 高松(2014)p.18

⁵⁵ 亀崎(2010)を取り上げる際は、亀崎の原著に倣い「ライフストーリー研究」という用語を使用する。ライフストーリー研究とは、ライフストーリー論に基づく語りの研究の意味と解釈される。

⁵⁶ 亀崎(2010)p.20

⁵⁷ 桜井(2002)p.58

適したコミュニケーション形態であること、そして調査インタビューにおける言語的相互行為によって、ライフストーリーが語られ、そのストーリーを通して自己や現実が構築されることを指摘した⁵⁸。つまり、対話のもとに構築される語り手の現実が重要なのであり、客観的な事実性を言及することに本質はないのである。

さらに、ライフストーリーにおける事実の捉え方は、主に自伝的記憶の研究領域で展開されてきた、語られた出来事の実実性の解釈に関する議論によって説明できよう。自伝的記憶研究の領域においては、語られた出来事、すなわち記憶の実実性について、大きく二通りの立場がある。一方はその記憶の正確性についてはとくに問題にする必要はないとする考え方で、心理的現実(psychological reality) という概念によって説明される。心理的現実では、記憶の主観性や変化しうる特性に価値を捉える考えであるのに対し、もう一方は、その困難さに関わらず、語られた出来事の実実性を確認することを忘れてはならないという考え方である。後者の立場にある研究者は、語られた語りに対し、両親や兄弟、ルームメイトなどの記憶と本人の自伝的記憶とを照合するという方法、日記などあらかじめ記録・されている自伝的記憶体験について想起させて照合するという方法をとる。

ライフストーリー研究における語られた出来事の実実性に関する解釈は、基本的に前者であり、後者は、ライフヒストリー研究における解釈として一般的に認識されている。ライフストーリーが経験の事実性をどのように評価するかについては、ライフストーリー論と次の項で取り上げるライフヒストリー論を分かち重要な視点と言えよう。

(2) ライフヒストリー論

ライフヒストリーは、ライフストーリーの類似概念として知られており、時に同義語として扱われる場合もあるほど、両者における意味の親近性は高い⁵⁹。

桜井(2012)は、両者の関係について「個人に焦点を合わせた語り(ナラティブ)を重要な資料のひとつと見なしている点で、同じように見える」⁶⁰としたうえで、ライフヒストリーは「その描かれる人生が主に時系列的に編成されて」⁶¹おり、「資料としても、インタビューによるオーラル資料のほかに自伝、日記、手紙などの個人的記録を主要な資料源として利用」される⁶²特徴を有することを指摘している。すなわち「ライフヒストリーには『事実』を伝

⁵⁸ 同上 pp.58-62

⁵⁹ 桜井(2012)pp.9-11

⁶⁰ 同上 p.9

⁶¹ 同上 p.9

⁶² 同上 p.10

えるという考え方がともなって」⁶³おり、この点が上述したライフストーリーにおける事実性に対する解釈の異なりである。

やまだ(2000)もまた「ライフヒストリーが人生の歴史的眞実を表そうとしているのに対して、ライフストーリーは、生きられた人生の経験的眞実を表そうとしている」⁶⁴というマン(Mann.S.J)の主張に賛同しており、桜井に共通する見解を提示していると言える。もっとも個人的な語りを客観的なものとし、事実としての確認をとり、語られた出来事を客観的事実として社会や歴史にいかに位置づけていくかは、ライフヒストリー研究が抱える長年の課題と言える。

亀崎(2010)は、桜井の議論を手がかりに、ライフストーリーおよびライフヒストリーの理論的整理を試みた際に、両者における研究目的および研究視点の相違を明確に指摘した。ライフヒストリーの場合、社会的歴史に個人を位置づける視点から時系列的な生活史が再構築され、ライフストーリーの場合、個人の主観的正解の把握を通じて語りの生成プロセスとその行為がそれぞれ着目されると指摘する⁶⁵。さらには、ライフヒストリーとライフストーリーの関係について、ライフヒストリーはライフストーリーをふくむ上位概念とした桜井(2002)の視点にも着目し、ライフストーリーについては「人生物語や生活物語などと訳され、個人の人生、生活、生などについて語った口承の語り」⁶⁶とした上で、ライフヒストリーについては「生活史と訳され、個人の語ったライフストーリーや、日記や手紙などの文書資料を用いて個人の歴史を再構築したもの」⁶⁷と述べている。

(3)ナラティブ⁶⁸論

ナラティブは、「語り」あるいは「物語」という訳語が比較的よくあてがわれる用語である。桜井(2012)によれば、ナラティブは一般的に、ライフストーリーと比べて日常的な語り、日常語としての語りの要素が強い。

ナラティブとしての語りに見られる特徴には、語りを行為として捉える傾向が挙げられよう。桜井は「ナラティブは『語る』という言語行為と、『語られたもの』という産物(物語)

⁶³ 同上 p.11

⁶⁴ やまだ(2000)p.152

⁶⁵ 亀崎(2010)pp.12-15

⁶⁶ 同上 p.12

⁶⁷ 同上 p.12

⁶⁸ 研究者によってはナラティブとも表記される。本稿においては、読みやすさを考慮し、ナラティブに、統一表記する。

を含意している」⁶⁹と指摘する。この点に関しては、コーラー(2014)の議論を参照するとわかりやすい。「ナラティブ分析は、意図と言語を突き詰める。つまり、単に言葉が表している内容ではなく、ある出来事がなぜ、どのように語られるのかを問うのである」⁷⁰。すなわちナラティブ分析は、語りが行為として捉えられ、どのような話題をチョイスし、どのような話題に比重を置き、どのようなストーリー展開をもって、過去、今、未来をつなげ、そこに生きる自分をどのように描きたいのかを探る視点に基づいて展開されていく。

ナラティブは、ナラティブ研究として、確立された領域を有するが、一方でライフストーリー研究やオーラルヒストリー研究に欠かせない重要な概念としても位置づけられる⁷¹。ライフストーリーの項で記述したとおり、ライフストーリーは、語り手とインタビュアーの対話を通じて相互行為を通して構成されるが、この相互行為への着目は、ナラティブとしてのライフストーリーへの着目を表すものである。インタビュアーの問いかけや応答によって及ぼされる語りの産出への影響が大きいとし、語る内容、語り方や力の入れ方、強調される語彙、語るタイミングについてなどが分析される。なお、こうしたナラティブの構造を明らかにする研究も積極的に進められてきているが、中でも W.ラボフ(1972)によって開発されたナラティブ構造にアプローチするモデル⁷²は、ナラティブ研究の先駆的研究であるうえに、今もなお多くの研究者に引用され、応用されている。

(4)自伝的記憶論

自伝的記憶(*autographical memory*)とは一般的に、これまでの生活で自分が経験した出来事に関する記憶であり、たとえば「人が生活の中で経験した、さまざまな出来事に関する記憶の総体」⁷³「過去の自己に関わる情報の記憶」⁷⁴「自己に関連する情報についての記憶であり、個人の過去の中から思い出される特定のエピソードについての記憶」⁷⁵といった定義づけがなされている。自伝的記憶の定義に関する立場は3つに区分される。それぞれは、エピソードを強調する定義、個人史を強調する定義、自己を強調する定義である⁷⁶。エピソードを強調する立場の場合、人生で経験された出来事それ自体への関心が寄せられる。「人生の

⁶⁹ 桜井(2012)p.13

⁷⁰ コーラー(2014)pp.21-22

⁷¹ 桜井(2012)pp.65-66

⁷² W. Labov(1972)

⁷³ 佐藤(2005)p.2

⁷⁴ 佐藤(2006)p.1

⁷⁵ 田上(2009)p.151

⁷⁶ 佐藤(2006)pp.3-4

中で体験したさまざまな出来事に関する記憶の総体」⁷⁷「個人の過去に起こった出来事や経験にかかわる記憶」⁷⁸といった定義は、その例である。個人史を強調する定義は、「出来事がつながり『個人史』を形成している」⁷⁹点を、自伝的記憶の特徴として捉える。高橋(2000)は、個人史を強調する定義として、榎本(1998)の「過去の経験を時間軸に沿って整理し、わかりやすい自己物語として構成された自分史としての記憶」⁸⁰に着目している。自己を強調する定義では、記憶における自己との関わりの部分に、自伝的記憶の特徴が捉えられる。多くの研究者が自己を強調する立場から自伝的記憶を定義づけしており、事例には「他者の経験に関する記憶は、いかに近い他者であっても、自伝的記憶ではない」⁸¹や、「その人の人生で経験された出来事の記憶。自己、感情、目標、個人的な意味が交わる交差点である」⁸²が挙げられる⁸³。記憶された経験における自己にとっての意味を尊重する点は、経験の意味を考えるライフストーリー研究の立場との親近性が見出せよう。

特に近年においては、この自伝的記憶が学術的にどのような側面において役立てられるのかという問題、すなわち自伝的記憶の機能を明らかにすべく議論が積極的になされている。自伝的記憶の機能については、以下三種類、自己機能、社会機能、方向づけ機能が、共通の認識として定着している(佐藤;2006, 田上;2009, Bluck;2003)。佐藤(2006)によれば、「自己機能は、自伝的記憶が自己の連続性や一貫性を支えたり、望ましい自己像を維持するのに役立つ面」⁸⁴を指し、「社会機能は、自伝的記憶が対人関係やコミュニケーションにプラスの影響を及ぼすことを指し」⁸⁵、「方向づけ機能とは、自伝的記憶が様々な判断や行動を方向づけるのに役立つという面を指す」⁸⁶。

また、自伝的記憶の機能のほか、自伝的記憶の構造に着目した議論も数多くなされてきている。自伝的記憶の構造への関心は、自伝的記憶を人がどのように貯蔵し、いかに検索しているのかという問題意識に基づく。事例としては、Conway & Bekerian(1987)による「自伝的記憶は“lifetime period(人生の時期)”によって大きく体制化されており、その中がさらに様々

⁷⁷ 相良(2000)p.161

⁷⁸ 高橋(2000)p.230

⁷⁹ 佐藤(2006)p.4

⁸⁰ 榎本(1998)p.26

⁸¹ Haberlandt(1999)p.220

⁸² Conway & Rubin(1993)p.103

⁸³ 佐藤(2006)p.4

⁸⁴ 同上 p.76

⁸⁵ 同上 p.79

⁸⁶ 同上 p.82

な出来事によって分かれているという階層構造」⁸⁷についての提唱や、Brown & Schopflocher(1998a, 1998b)による、自伝的記憶の構造の規定要因として、本人によって認められた過去の出来事の間における因果関係についての指摘が挙げられる⁸⁸。

(5)本研究における、語り研究の理論的立場

本節ではここまで、ライフストーリー、ライフヒストリー、ナラティブ、自伝的記憶と、語り研究を説明する主要理論について概観してきた。各理論は、その意味において重複や相互関与の側面がある一方で、独自の個性を有している。

ライフストーリー論は、経験にどのような意味が見出されるのか、すなわち経験の意味づけに、研究の目的が焦点化されるところに特徴を持った理論である。そして、意味づけの解釈においては、意味づけの主体となる自己の捉えや、語りにおける時制の整理が重要であり、一方、ライフヒストリー論は、語りを単独のデータとして扱うのではなく、研究テーマに関わる写真や書籍などそのほかの研究資料を使い合わせながら、語られたことの客観的事実に着目し、それを明らかにしていくことを目的とする理論である。語られた経験のリアリティに対する捉え方について、ライフストーリー論とライフヒストリー論は、対極的な立場を取る。

一方、ナラティブは、特に語りにおける、語るという行為の側面に着目する。インタビューの場において、語り手と聞き手との間に成り立つ対話的相互作用関係のもとに、意味が生成されていくことに、語りの意義を見出す理論である。ナラティブが特に、医療看護に関わる研究領域において着目されているのは、ナラティブによって患者の内面にもたらされるポジティブな作用が期待されているからである。また、近年は特に、ライフストーリー論におけるナラティブ視点の関与が目立つようになってきた。ライフストーリーとしての語り分析においても、語りがナラティブによって生成されているという前提が尊重されている。そのような意味で、ナラティブはライフストーリーとも近似的な関係にあると解釈できるだろう。

最後に、自伝的記憶論についてである。自伝的記憶は、過去の出来事が記憶されている状況それ自体に、関心の主軸がおかれている。たとえば、どのように記憶は整理され取り出されるのか、記憶は何に機能するのかが、自伝的記憶研究の中心的な議論といえる。もっとも自伝的記憶論においては、記憶における出来事同士のつながりや構造に着目する視点もあ

⁸⁷ 同上 p.12

⁸⁸ 同上 p.13

り、ライフストーリー論の立場との親近性が高いと解釈できよう。

さて、ここでもう一度、本研究の目的を顧みたい。本研究の目的は、音楽経験の意味づけと、音楽経験の意味づけに見る音楽経験による職業行動への影響を明らかにすることである。研究の目的と背景の項の記述内容を参照すると「人生を通じて多様に積み重ねられる音楽経験は、どのように意味づけられ、その後の人生に影響を与えていくのか」という問いが、本研究の根幹には存在している。よって、本研究にとって重要な問題は、音楽経験を有する語り手が、音楽経験をどのように意味づけているのかという問いに対する解をいかに導くかにある。したがって、本研究では、ライフストーリー論に依拠した立場から、語りを通じて、研究目的を果たしていくことが妥当であると判断した。

また、本研究の調査協力者である、演奏を続けてきた MBA コース参加者にとって、音楽経験を語ることは、高松(2012)が、ライフストーリーの得意とするところとして指摘する「これまであまり語ってこなかった過去の経験について、他者の協力を得ながら光をあて」⁸⁹ることにもなるだろう。演奏を続けてきた経験が、働く自己としての側面を持つ語り手にどのように結びついていくのかを捉えるという観点においても、ライフストーリー論に基づいた研究の視点が最適と考えられる。

第2節 語りをめぐる「自己」と「自己における経験の意味づけ」

本節では、分析資料となるトランスクリプトにおける「自己」と「自己における意味づけ」をどのように捉えるかについて理論的に整理し、語り手における経験の意味づけを、トランスクリプトからどのように読み解いていくのかについて、まとめる。

以降より、語りにおける「自己」について着目していきたい。ここで再度、本研究の目的を確認すると、それは、自己における音楽経験の意味づけと、そこにおいて解釈される音楽経験による職業行動への影響について明らかにすることにある。よって、具体的に分析を進めるに際してはまず、全ての意味の判断基準となる「自己」を、本研究ではどのような概念として解釈するか、語りの構造をふまえながら、明確にする必要があると考えている。よって流れとしては、まずは「自己」の解釈を定めた上で「自己における経験の意味づけ」を具体的に捉えていく。

(1) ライフストーリーの構造と自己

本項ではまず、自己に関する議論の前提に必要な知識としてのライフストーリーの構造

⁸⁹ 高松(2014)p.2

について確認していく。ライフストーリーの構造は、自己によって決定付けられていると言っても過言ではないだろう。ライフストーリーの構造を読み解くことは、語りにおける自己を明確に捉える上で重要と考える。

ライフストーリーには、いつ、どこで、誰が、なにを、なぜ、どのようにおこなったのかという、出来事や行為のつながりの展開過程を指し示すプロットで構成される部分と、それ以外の部分とに分ける枠組みがある。前者にあたる出来事や行為の展開を表す部分をプロットの枠内は〈物語世界〉とされ、後者にあたるそれ以外の部分、枠外の評価や態度を表す語りは〈ストーリー領域〉と称されている。これは、K.ヤング(1987)に倣って、桜井が提唱したライフストーリーの位相の原型である⁹⁰。これをライフストーリー・インタビューの位相とした場合は、〈物語世界〉と〈ストーリー領域〉に加えて、挨拶や相槌などインタビュアーとの〈会話〉が存在する⁹¹。桜井(2005)は、ライフストーリーの意味体系が、〈会話〉に表出するようなインタビューの相互行為を土台に築き上げられることを前提とした上で、〈ストーリー領域〉は主として聞き手との相互行為によって理解されるものであるが、他方で〈物語世界〉の主導者は基本的に語り手にあると指摘している。このようにライフストーリーの構造について〈物語世界〉と〈ストーリー領域〉という位相、ライフストーリー・インタビューと関連させた場合には〈会話〉の領域を含めて組織していく解釈は、一部にライフストーリーにおける位相の区別がしがたいという否定的な見解がありつつも⁹²、現在のライフストーリー研究において広く浸透していると言えるだろう。桜井は、これまでの調査インタビュー研究を概観し、語り手の情報内容、すなわち〈物語世界〉だけに関心が向けられてきた傾向があったことを指摘し、その上で「語られたこととしての〈物語世界〉と、語り方としての〈ストーリー領域〉との相互関係については、まったく無頓着であった」⁹³と述べている。

さらに、〈物語世界〉〈ストーリー領域〉といった語りの位相にはそれぞれ、語りがライフストーリーとして筋立てられ、意味づけられていくプロセスにおいて果たす機能がある。桜井(2005)によれば、語りは、現実の世界との対応を示す筋で構成される〈指示的機能〉を有する部分と、語り手の態度や価値判断によって話す動機や理由や経験の意義が指し示される〈評価的機能〉を有する部分とに分けられるという。そして前者には〈物語世界〉が、後者には〈ストーリー領域〉が該当すると整理した。なお、語りの機能に着目した研究とし

⁹⁰ 桜井(2002)

⁹¹ 桜井(2002, 2005, 2008, 2012 他)

⁹² 能智(2006)pp.47-52

⁹³ 桜井(2012)P.73

では、グリーンハル(2008)による一連の議論も興味深い。グリーンハルは、語りの機能を「参照的視点」「変容的視点」「遂行的視点」の3点に整理をした⁹⁴。「参照的視点」とは、出来事に関する報告そのものに物語の機能をみる視点、「変容的視点」は、出来事の意味を変容させることに物語の機能をみる視点、「遂行的視点」は、経験を振り返ることよりも、むしろ今後に向かって行為する側面に力点が置かれている。安田(2012)は、グリーンハルの「参照的視点」については上述の<指示的機能>と、「変容的視点」と「遂行的視点」については<評価的機能>と、それぞれ近い機能を有していると指摘している⁹⁵。

(2)語りにおける自己の特質

語りに向き合っていると、語りにおける自己は、実に多様且つ複雑に立ち現れることに気づかされる。そしてそれと同時に痛感するのは、自己の捉え難さである。そのような中、ライフストーリー論における自己の多様性をめぐる議論は、語りにおける自己の特質の理解に必要な示唆を与えてくれる。具体的にその内容は、以下の二つの観点に集約されると考える。

第一の観点は、語られる自己は語り手自身の独白によってではなく、調査者との共同作業をとおして構成されることについての観点である⁹⁶。この点に関連した内容はこれまでも述べており、たとえば、インタビューが語り手と聞き手との相互行為の場であるといった指摘などがある。インタビューの相互行為的な特質については、自己類型化に着目することで理解が深められよう。

自己類型化⁹⁷とは「個別的な存在である個人の個別的な行為を、類型的な動機に基づいて類型的な目的を果たそうとする類型的な社会的役割の類型的な機能に替える」⁹⁸ことである。デパートの店員を一例に説明するならば、顧客との関わりを通して、店員として期待される行為を知り、そして店員としての役割をはたすことで自分を店員として構成していくことが、自己類型化である。同時に、他者を類型化することは、同時に私たちが自分を自己類型化することでもある。すなわち、他者の類型化は自己の類型化を伴うのである。店員を類型化するとき、人は買い物客として自己を類型化する。

この理論を語り手の自己類型化の場合として発展させると、語り手の自己類型化は調査

⁹⁴ グリーンハル(2008)pp.9-10

⁹⁵ 安田(2012)p.41

⁹⁶ 桜井 (2002) p.133

⁹⁷ 自己類型化についての説明は、桜井 (2002) pp.89-92の内容に基づく。

⁹⁸ 同上 p.90

者に対する他者類型化、すなわち調査者における類型化された自己に影響され、決定づけられるプロセスと解釈できる。桜井(2002)は、インタビューの場において、語り手、調査者、両者に起きる自己類型化とその相互作用に関して、自らの調査実習を例示し説明している。その内容は、調査者が、国立大学の女子学生であったことを前提としたうえで、働いたことのある段階世代の既婚女性という条件を満たした語り手が、女性、若い世代、国立大生という類型化を調査者に対し行ないながら、年長者としての立場、女性としての立場からの語りを構成していたことを指摘したものである。このことから、ライフストーリーの語り手に見出される多様な立場における自己の側面が、調査者との相互作用を介して誘導された自己類型化の影響によるものと導けるだろう。桜井は、類型化と語りは、相互反映的な関係の中にあると説明する。

桜井によれば、調査者の自己は多元的であり、語りの場を介して、調査者としてのみならず、年齢や性別、未・既婚、子どもの有無、階級・階層、人種・民族、あるいは多様な立場の観点から、語り手によってさまざまに類型化される。そして、多元的な自己として存在する調査者という他者を類型化することで、語り手は、自己を類型化し、自己を構成していくのである。もっとも、調査者における多元性は、安定的でも恒常的でもなく、純粹に統合的なものでもない。調査者の立場としては、自らが語り手からどのように見られているのかによって、語り手が一定の枠組みで語られることに注意をはらう必要がある。

第二の観点は、二重の自己に関する観点である。二重の自己に関する観点もまた、インタビューの相互行為的特質、対話的相互作用のもとに成り立つものである。インタビューの場は、語り手の自己を多元化し、語り手の自己は二重の自己となる⁹⁹。二重の自己とは、ライフストーリーにおける語る私と語られる私の存在であり、すなわちライフストーリーには、語る自己と、語られる物語の中の主人公である自己が登場するのである。二重の自己は、異なるライフストーリーの位相において確認される。一方は上述した<ストーリー領域>において<いま・ここ>を語る自己であり、インタビューの質問／応答の相互行為としての語りを展開する私、語り手としての自己である。他方は、同じく上述した<物語世界>の登場人物として<あのとき・あそこ>に属する自己であり、語られる私、語られる自己である¹⁰⁰。

語る私と語られる私については、両者における一貫性や同一性をどのように整理するかという議論がなされてきており、現在は両者における一貫性を不変とする考え方が疑問

⁹⁹ 同上 p.213

¹⁰⁰ 桜井(2002, 2005, 2008, 2012 他)

にさらされている状況にある。その理由について、桜井は「語られる自己、すなわち〈物語世界〉に登場する自己は、インタビュー・プロセスにおける一時的な産物」¹⁰¹であるとの見方を示している。すなわち、インタビューの場においては「自己が強い一貫性や同一性を持ち、『ほんとうの自己』が他者からの外部干渉を排した「個人の内部」に存在するという自己観」¹⁰²は必ずしも通用せず、語り手がどのように自己を定義し、どのように規定するかは、語りにおける相互作用を離れて考えることはできない。

二重の自己に関する議論としては、これまで、語りにおける何かしらの評価は、どちらの自己によってなされたものなのかという問題を基軸に展開されてきた。すなわち、何かしらの評価は、プロットにおいて展開されるストーリー内としてある〈物語世界〉の登場人物がくださったものなのか、あるいは〈ストーリー領域〉の主体である語り手がストーリー全体に対してくださったものなのかという議論である。たとえばラボフ(1972)は、評価の主体が語り手である意義を強調したが、桜井(2012)は、プロットの枠内、すなわちストーリー内の登場人物がくださった枠内の〈評価〉と、プロットの枠外、すなわち語り手の〈評価〉、二つの種類があると明示した。現在においてもその解釈は統一されておらず、研究者の立場によって異なる。

なお、桜井(2002)によれば、自己をめぐる評価には、そもそも二つの基準がある。一方は、語り手の人となりや性格づけをめぐる語られるもので、たとえば、困難な状況をどのように切り抜けたのかといったストーリーが語られる。もう一方は、自己を表すにあたって語るに値するストーリーだという解釈に基づいて語られるという、ライフストーリーの特性それ自体である。すなわち、前者はライフストーリーの展開を通して意識的に行われる自己への評価であるのに対し、後者は語られたライフストーリーを生成する体験や出来事が自己に対する評価の現れとなる。二重の自己から派生する評価の議論は、前者の場合に相当する。

(3)自己における経験の意味づけ

ここまで展開してきた「自己」に関する議論をふまえ、本項では「自己における意味づけ」に視点を移し論述していく。具体的には、自伝的推論の諸理論を手掛かりとしながら、どのようにして「自己における経験の意味づけ」をトランスクリプトから読み取っていくのかという点について整理したい。

¹⁰¹ 桜井(2002)p.214

¹⁰² 同上 p.214

自己における経験の意味づけを文字通りに解釈すれば、それは、現在の自分の状況、考え方や行動、振る舞いにおいて、過去の経験の意味を見出していく思考が営まれることである。よって分析に際しては、トランスクリプト上において、その思考の営みが表出した語りの箇所をいかに捉えるのかということが最も重要な点となるだろう。

なお、この点の整理については、前項までに議論してきたトランスクリプトにおける自己解釈を巡る諸理論の援用によって達成できると考えられる。具体的には、〈いま・ここ〉の自己の視点が、〈あのとき・あそこ〉の自己や自己の経験内容を振り返り、今現在における意味を見出していくことが確認される発話箇所において、経験が意味づけられていることが解釈できる。つまり、過去の経験と、現在の自己との間を「結び付け」て思考されている発話箇所に着目することで、音楽経験の意味づけを捉えていくことができるのである。もっとも、この「結びつき」をどのように読み取るのかということが難しい。そこで本研究においては、自伝的推論の研究動向を概観した佐藤(2006)によって提示された、語りにおける結びつきの判断基準を参考にすることとした¹⁰³。

自伝的推論は、経験と自己との間を結びつける思考のプロセスとして解釈されている理論であり、基本的に「過去の出来事と現在の自己を結びつける省察的思考」¹⁰⁴といった定義に準ずる。自伝的推論とは、人が「自分が経験した様々な出来事を単に思い出すだけではなく、想起を通して過去の自分と現在の自分を対比させたり、あるいは過去から現在まで変わらぬ自己像を確認したり、複数の出来事を結びつけて解釈したり、過去経験から何らかの洞察や教訓を引き出して今後の行動指針としたりする (Bluck & Habermas, 2000, 2001; Habermas, 2011; Habermas & Bluck, 2000; Singer & Bluck, 2000)」¹⁰⁵こととされている。また、Habermas(2011)はこの観点から主張を発展させ、自伝的推論について「想像された出来事や人生の遠く離れた部分と、自己やその発達を結びつける」¹⁰⁶と説明し、ライフストーリーの生成に不可欠なプロセスであると提唱した。Habermas(2011)の定義は、本項の冒頭に述べた、〈いま・ここ〉における自己が、〈あのとき・あそこ〉の自己が体験した経験を評価し、今の自己にとっての意味を探究し、意味を見出していくことを、自己における経験の意味づけと述べたその内容とほぼ同義といえよう。

また、自伝的推論の内容分析を通じては、これまでの出来事と自己との様々なつながりの諸相が明らかにされており、それらの結果は自己における意味づけの方向を探る際に参考

¹⁰³ 詳細は第3章にて記述した。

¹⁰⁴ 同上 p.129

¹⁰⁵ 佐藤(2014)p.129

¹⁰⁶ Habermas(2011)p.3

になるものである。よってここに、佐藤(2014)が着目した事例のうちのいくつかを挙げておく¹⁰⁷。たとえば Pillemer(1998, 2003)は、特定の出来事に関する詳細な記憶には、行動や判断を決めるのに役立つ「類推」をはじめ、信念や態度の形成に強い影響を与える「原点」「転機」「アンカー」の4種類があると明示している。また出来事と自己のつながりの中でも特に「その出来事から重要なことを学んだ」というつながりについて分析された研究も多数ある。Sales(2013)らは、「重要なことを学んだ」の具体的なつながりを、「教訓」と「洞察」とに整理した。さらに出来事と自己ではなく、出来事同士のつながりを分析した研究もある。McLean(2008)によれば、単一の出来事と自己とのつながりを語るのと比べると、複数の出来事をつなげたり、一つのテーマでまとめあげる方が、自伝的推論としては水準が高く、こうした高次の自伝的推論は、十分に構成されたライフストーリーの特徴である¹⁰⁸。

(4)本研究における「自己」および「自己における経験の意味づけ」に対する解釈の観点

本節では、先行研究の調査を通して、主にライフストーリー論において展開されている自己に関する諸理論を概観し、自己に対する解釈の観点について検討してきた。本項では、節のまとめとして、ライフストーリーを構成する自己と、それらが担う役割や機能を確認した上で、本研究での自己に対する解釈の立場を明らかにしたい。

ライフストーリー論における自己は、語るという行為をする語り手としての自己と、トランスクリプトにおける語り手の視点の表れである<ストーリー領域>における<いま・ここ>の自己、そして<物語世界>における<あのととき・あそこ>の自己、すなわち語られる自己の存在があることがわかった。それぞれの自己は、ライフストーリーの生成に不可欠な役割と機能を有し、ライフストーリーを構成する。その際、留意すべきは、語り手としての自己は、多元化されるということである。

次に、分析資料となるトランスクリプトとしてのライフストーリーに着目してみると、上で述べたように、そこには、語る自己と語られる自己という二重の自己が存在する。語る自己は、今現在の語り手としての<いま・ここ>の自己の現れであり、語られる自己は出来事の記憶の中に存在する主人公としての自己である。

この<いま・ここ>の自己と<あのととき・あそこ>の自己を棲み分けて解釈することは、経験の意味づけを明らかにする上で不可欠と考えられよう。なぜなら自己における経験の意味づけとは、<いま・ここ>の自己の考え方や行動、振る舞いにとって、<あのととき・あ

¹⁰⁷ 佐藤(2014)p.137

¹⁰⁸ 同上 p.137

そこ>の自己や自己の経験において意味が見出される思考の営みであるからである。よって、トランスクリプトにおいては、<あのとき・あそこ>の自己に見出される過去の経験と、<いま・ここ>における現在の自己との間を「結び付け」られて思考されている発話箇所に着目することで、音楽経験の意味づけを捉えていくことが可能となる。具体的な発話箇所の抽出に際しては、自伝的推論を概観する中で佐藤(2006)による理論を参考とする。

以上、本節においては、語りをめぐる「自己」および「自己における経験の意味づけ」の解釈に焦点化し、議論を展開してきた。結論として、本研究における「自己」および「自己における経験の意味づけ」の解釈に際する観点は(1) <ストーリー領域>には<いま・ここ>での相互行為を行っている語り手が存在する、(2) 語り手の自己は、インタビューの場において、多元化する、(3) 語り手の自己は、二重の自己である、(4) 自己における経験の意味づけは、<ストーリー領域>における<いま・ここ>の自己と、<物語世界>における<あのとき・あそこ>の自己が経験した出来事とつながりが見出される、の4点にまとめられる。

第3節 語りの分析方法の検討

本節では、経験の意味づけについての内容分析をどのように進めるのか、すなわち、語りを具体的にどのように分析していくかについて、文献および先行研究の調査を通じて検討していく。

(1)分析方法に関する多様な選択肢

多様な質的分析方法において、面接やインタビューを通じて収集された発話内容を分析データとするものは、大きく二つの方向性に分けることが可能と考えられる¹⁰⁹。一方はグラウンデッド・セオリーに代表される帰納的な分析手法であり、もう一方は、事例研究と類される一つ以上の事例の深い記述と分析を行なう手法である。そしてコーラー(2014)は、ライフストーリーやナラティブなど、物語られた形式を持つテキストを解釈する場合は、事例中心の研究になる傾向があることを指摘している¹¹⁰。

しかしながら、あくまでそれは傾向であり、基本的に語りの研究においては、分析方法が統一されていない。標準的な分析方法というものがなく、研究目的に応じて、研究者自身が分析方法を検討し、決定するのが一般的である。実際、語りを研究資料とした近年の論文に

¹⁰⁹ 高木(2011)p.4、crewswell(2007)

¹¹⁰ コーラー(2014)p.21

においても、各研究者がその都度、先行研究を参考としながら、研究目的に見合った分析方法を定義している状況にある(田垣 2004; 安田 2012; 砂賀・二渡 2008; 飯野 2010; 他)。グラウンデッド・セオリー・アプローチに代表される帰納的な推論に基づく方法が、応用されている場合が少なからず確認されている。コーラー(2014)も、物語られた形式を持つテキストの研究が事例中心であることを指摘した上で、それ以外の方法を取ることが不可能ではないことを明示している¹¹¹。

(2)事例的な分析手法と帰納的な分析手法

前項では、語りの研究に標準的な分析方法はないものの、事例中心とした研究が多く採用される傾向にあることがわかった。一方で、グラウンデッド・セオリー・アプローチ(以下、GTA)をはじめ、KJ法、SCAT、佐藤の質的データ分析法(2008)など、主要な質的分析法の多くがグルーピングされる帰納的な分析手法の採用には慎重な意見を明示する研究者が少ない(桜井 2012; コーラー 2014)。よって本項では、事例的な分析手法と帰納的な分析手法、それぞれがもたらす、ライフストーリー論の視点に基づいた語りの研究への影響について検討していくこととする。

面接やインタビューを通じて収集された発話内容をデータとする研究には、GTAに関連した各種分析手法や内容分析の手法をはじめ KJ法、佐藤の質的データ分析法(2008)などといった、帰納的な分析手法が頻繁に用いられる。しかしながら、経験的語りの研究においては、その潮流に逆らうように、内容中心の分析が主流となっている現状がある。その理由には、帰納的な分析手法の作業プロセスに共通する、切片化・カテゴリー化・コード化が、語りの研究における障害要素となりやすい可能性があげられよう。帰納的な分析では、発話内容を、単語や文節、意味のまとまりなど、一定のルールで切片化し、切片化によって生成された複数の文書セグメントから、内容の重なりを濃淡を基準に論点の類型をつくり、概念や定説の一般化がはかられていく。この過程を通じて、発話データにおける属人的な文脈というものが取り除かれていくわけであるが、一方でこの文脈こそが、語り手における経験の意味づけの内容を理解する上で重要となる、個々人の主体性や意図の表れなのである¹¹²。見方を変えれば、切片化・コード化の分析過程は、語り手である自己と経験との結びつきが解消

¹¹¹ コーラー(2014)p.25 具体的には、ナラティブ分析において「カテゴリー」を生成したり、一般的な概念で別の言い方にしたりすることも可能と指摘している。医学の歴史においては、具体的な語りの蓄積から、新しい疫病の分類が導かれたことを例示し、また社会学の研究でも、特定の症例での行動を詳細に研究することから、一般的な側面に関する知識が導き出されたことを説明している。

¹¹² コーラー(2014)p.24

されていく過程としても捉えられよう。コーラー(2014)は、物語られた形式を持つテキストの研究は、長い報告に依拠することを指摘している¹¹³。よって、ライフストーリー論の視点に基づく語りの研究においても同様に、抽出した発話に対し切片化やコード化を行わず、抽出した発話を単位としそのまま維持し分析的に扱っていくことが有効的と考えられる。もう一点、帰納的な分析方法における切片化及びコード化のプロセスは、個別的な事柄を一般化していく作業であり、多くの対象に通用する結論が形成されるのが一般的である。一方で、前節でも記述したように、本研究が依拠するライフストーリー論では、経験的語りにおける特殊性や個別性が尊重される。この点においても、経験的語りの研究と帰納的な分析方法との整合性の低さを指摘できよう。

ここで実際に、帰納的な分析手法と事例的な分析手法、それぞれのやり方を具体的に提示した研究者の先行研究に着目し、実践的な視点から、両者を比較検討してみたい。帰納的な分析手法の事例はベルトー(1972)、事例的な分析手法の事例は大久保(2008)である。

まずは前者、フランスの社会学者である D. ベルトーのアプローチ¹¹⁴に着目する。ベルトーのアプローチは、ライフストーリーの研究に帰納的な分析方法を用いることの難しさがわかりやすく示されている事例といえよう。ベルトーは、80人のパン職人のライフストーリーから、フランスのパン屋業界を成り立たせている社会的メカニズムを発見した。具体的には、ライフストーリーを聞き取るたびに見出される共通項を重ねあわせ、異なるパターンが出なくなった時点で理論的飽和とみなし、メカニズムの探究を終了する。そして既出のメカニズムのパターンに反するケースがあるかどうかを検討し、その不在によって先のメカニズムを確かなものとし、メカニズムが支持されるという手順をふむ。このベルトーの分析方法に対する現在の評価については、否定的な見解が主流である。その理由としては主に、ベルトーはライフストーリー研究により『主観的な語りにもとづいて客観的な社会学的理解を発展させる』ことを目指すべきと主張したが、そこには「具体的な人びと」へのまなざしが欠落していることにある¹¹⁵。具体的には、研究成果を個別のライフストーリーを通して示すことをしていない。さらに共通項のあるライフストーリーが尊重されていく分析プロセスをとったため、おのずと多数派の語りによってのみ結果が導出されていき、一方で少数派の語りは淘汰されていった。この点はまさに先に述べた、ライフストーリー論の視点の基づいた経験的語りの研究に、帰納的な方法論を用いる際に懸念された内容と同じである。また桜井(2012)は、ベルトーの分析方法においては、語り手の態度や判断よりも、労働形態

¹¹³ 同上 p.24

¹¹⁴ 桜井・小林(2005)pp.232-237

¹¹⁵ 同上 p.237

などの事実に焦点が合わせられており、ライフストーリーの特色が活かされていないことも指摘している¹¹⁶。

一方の大久保(2008)は、語り研究における分析方法を取り上げた著書文献の中でも、特に実践的な視点から、事例分析の方法に基づいたライフストーリーの手順を説明している点に特徴がある。大久保は、ライフストーリー分析について「人々が『人生を生きる』(人生に意味を付与する)仕方の分析であり、それを通して、人々がおかれている社会的状況と、社会的状況への人々の適応について考察しようとするものである」¹¹⁷と定義した上で、分析方法に関する具体的な説明と、分析事例紹介を行っている。分析方法としては、ライフストーリーから分析テーマに関連した「語り」¹¹⁸に着目し、その「語り」のパターンが何度も出現するようであればそれを「多数派の語り」「支配的語り」と位置づけていくというプロセスをたどる。なお、その際には「少数派の語り」「下位文化的な語り」など「支配的な語り」の否定を含んだ語りが、「多数派の語り」「支配的語り」の前提として存在することについて明示されている。紹介された分析事例は、親からの影響に着目したライフストーリー研究である。分析の結果は、「語り」のパターンから導出されたと思われる観点ごとに、各語り手から抽出された「語り」の内容が紹介されていく。そしてその結果に対し「支配的な語り」「少数派の語り」といった視点から考察がなされている。大久保(2008)のアプローチは、分析の手順および結果の導き方において、ベルトーに指摘された懸念点をフォローしていると解釈できる。

もっとも、大久保の事例は、作業を進め方や判断基準についての細やかな説明がなされていない点においての不明瞭さが否めない。たとえば、どのように「語り」に着目し、その「語り」のパターンをどのような基準で抽出するのか。大久保が示す結果の示し方から鑑みて、分析のプロセスにおいて語り手の個別性を保存する必要があるのだが、それをどのように行うのかといったことについては一切明示されていないのである。

(3)本研究における分析方法

以上本節では、本研究に見合った分析方法について検討してきた。具体的には、ライフストーリー論の視点に基づく語りの研究における分析方法について、帰納的な分析手法と事

¹¹⁶ 桜井(2012)pp.81-82

¹¹⁷ 大久保(2008)p.48

¹¹⁸ 大久保(2008)に倣った表記。「語り」の明確な定義づけはなされていない。筆者は、語られたライフストーリーにおいて、分析テーマに関わる内容が語られた発話部分を「語り」としていると解釈した。

例中心の分析方法とに整理して捉えた。その結果、前者を採用する際には、ライフストーリー論に依拠して進める上でのいくつかの課題があることがわかった。内容は、二点の課題としてまとめられる。

第一には、桜井(2012)が、「重ね焼き法」やグラウンデッド・セオリーに対して「たとえ、ライフストーリー・データであっても、その個人的特性やデータの全体は考慮されず、データの切片化が行われる」¹¹⁹と述べているように、こうした方法ではライフストーリー研究の特質である、自己にとっての経験の意味づけに焦点化しづらい。なぜならば、語りを切片化する過程で、経験の意味づけが、意味づけをした自己とのつながりと分断され、その状態で他の語り手における経験の意味づけとの間に見出された共通性によって帰納的にまとめられ、語られた経験に対し普遍的な意味が与えられるからである。

第二は、帰納的な推論に基づく分析方法において、少数派の語りや、逸脱的な語りやが考慮されない傾向があることについてである。昨今、ライフストーリー研究には、マイノリティや逸脱者など、あまり表立って語られてこなかった領域における経験の意味や自己概念を理解する研究にとっての活用価値が認められてきている。それに対し、帰納的な推論に基づく分析法のプロセスにおいては、少数事例や逸脱的な語りはコーディングの段階で淘汰され、分析結果に反映されない傾向がある。いかに少数派の語りや逸脱的な語りを尊重するか、自己と経験の意味を分断しない分析プロセスをいかに構築するか。ベルトーの事例に指摘される課題は、ライフストーリー研究に帰納的な推論に基づく分析法を用いた際に共通して形成されると想定される。

しかしながら繰り返しになるが、だからといって、ライフストーリーやナラティブなど、物語られた形式を持つテキストの解釈に際し、帰納的な分析方法を用いることが否定されているわけではないのである。また結果についての一般化も、統一的、全体的、統括的に導いていく際には、可能であるとされる¹²⁰。一方、事例中心の分析手法は、本研究で採用する語りの研究との相性が良いことが確認された。しかしながら大久保(2008)のアプローチにおける課題として指摘したように、事例分析の方法は、研究者の属人的な判断への依存度が高く、そういった意味では手法としての脆弱さを否めない。事例中心の分析方法は、研究者がそれぞれの事例である語りと向き合い、深く理解し分析をしていく¹²¹ことで成立する。この「深く理解し分析する」の質をいかに担保するかが重要なポイントとなるだろう。特に語りを扱う事例中心の研究方法は、研究者のキャリアや力量が結果の質を左右しやすいという

¹¹⁹ 桜井(2012)p.82

¹²⁰ コーラー(2014)p.25

¹²¹ Crewsell(2007)p.79

ことが言える。属人的な分析手法だからこそ、適切な分析結果を導けるよう、依拠する語りの研究理論に基づき、語りの構造と捉えたい対象の概念理解とを結びつけて考え、分析の観点をあらかじめ明確にしておくことが不可欠と考える。なおこの点に関して、本研究においては、前節で導いた分析に際する解釈の観点をもって、分析の質の保持に努めたい。

以上、本節における検討を通じて導出された本研究における分析方法は、以下 3 点(1)事例中心の分析方法とする (2)具体的な分析の手順においては、経験を意味づける、個別の文脈を尊重し、切片化・コード化・カテゴリー化を避ける (3)分析結果の考察は、少数派の視点を淘汰せず、全体的かつ統合的な視点で行う、に則るものである。

第 4 節 本研究における分析の枠組み

本節では、本章のまとめとして、本研究における分析の枠組みを明示する。

経験的な語りの語り手は、インタビューの場を介することで、その自己は多元化され、二重の自己となる。二重の自己とは、語る私と語られる私の存在である。

語り手における経験の意味づけは、トランスクリプト上の語る私、すなわち<ストーリー領域>における<いま・ここ>の自己の視点から、語られる私、すなわち<物語世界>における<あのととき・あそこ>の自己に対する評価によって、現在の自己と過去の経験との間に意味が見出され、文脈としてつながりが発生している発話箇所を確認される。よって、語り手における経験の意味づけを分析するにあたっては<ストーリー領域>における<いま・ここ>の自己と、<物語世界>における<あのととき・あそこ>の自己が経験した出来事とのつながりの部分の発話箇所を分析対象とする。

具体的に意味づけの内容を解釈していく際には、意味づけが語り手の個別性に基づく文脈として表れることを考慮する必要がある。よって意味づけについて語られた文脈が失われる、切片化やコード化を分析の手順に組み込まない、事例中心の分析方法をとることが推奨される。

第 3 章および第 4 章では、上記の分析の枠組みに基づき行った分析の内容と結果、考察について記述していく。第 4 章の目的は、自己における音楽経験の意味づけの諸相を明らかにすることに設定し、第 4 章では、第 3 章の考察結果を掘り下げる流れで、音楽経験による職業行動への影響について考察していく。

第2章 調査方法とインタビュー協力者

第1節 調査協力者と方法

(1)対象者の検討

調査対象者の検討に際しては、モース(Morse, 1998)による見解を参考にした。モースは、研究にとって意味のある事例を選択する基準として「当該の事柄や対象に対する必要な知識と経験をもち、インタビューにおいては質問に回答することのできる立場にあること」¹²²としている。

よって本研究における調査対象者は、演奏を続ける MBA コース参加者 10 名の個人とした。もっとも本研究の目的を顧みると、調査対象は、演奏を続けてきた社会人全般となっており、かなり幅が広い。その中で、MBA コース参加者に対象を設定したのは、本研究において、音楽経験とのつながりについて関心を寄せる職業行動について、豊富なコンテキストの収集が期待できると考えたからである。

MBA コース参加者の場合、その多くが、一定期間の職務経験をへて形成された問題意識を入学の志望動機としている。すなわち、総じて自身の職業行動に対して自覚的であり、且つそれに対する主体性と関心が高い。よって、演奏を続ける MBA コース参加者は、働く自己、職業行動の主体としての自己が意識されやすい状況において、音楽にまつわる経験的語りを展開する可能性が高い個人であり、本研究の調査対象者として妥当であると判断した。

(2)調査協力者の決定とエントリーの手順

本研究では、演奏を続ける MBA コース参加者を調査対象とし、具体的には X 経営大学院の在学生・OB・OG によって組織されている音楽サークル「X 音楽の会」に所属する 10 名の個人から調査協力を得た。

[Redacted text block]

¹²² 安田(2012)p.61

まず「X 音楽の会」のメンバーに対し、調査協力のエントリーを行なった。エントリー活動の主な手段は、同サークルのインターネット掲示板での告知であったが、その他にも、定期演奏会や合同練習、自主練習など、所属メンバーが一同に会する場においても、掲示板での告知と並行して継続的に調査協力のエントリー活動を行なった。期間としては 2013 年 7 月から 2017 年 5 月の期間にかけてエントリー活動を継続し、最終的に 10 名の協力者に決定した。エントリーの際には、本研究の目的に合う音楽経験に関する語りの量や質の収集を考慮し、現在の音楽活動を 3 年以上継続して行なっていることと、現在の活動を含め、これまでに何かしらの演奏活動を 10 年程度続けていることを条件とした。なお、演奏活動を続けてきた 10 年程度に関する解釈については、途中の中断、活動形態の変化、演奏楽器の変更を可とした上で、実質的な演奏活動期間の合計を 10 年程度とした。その際、独学や指導者についていたケース、バンドのような有志のコミュニティに所属していたケースや学校での部活動などといった演奏スタイルについても特に問わず、多様なライフステージにおいて、演奏を続けてきたという人生の側面を重視した。これらのエントリー条件は、予備的研究(船越 2013)および本調査に先立ち行った 4 名へのプレインタビュウの結果をもとに検討し決定している。予備的研究やプレインタビュウを通しては、現在、音楽活動をしていても、その期間が短く、初心者としての感覚が強い場合、または 10 年程度の音楽経験があっても現在演奏をしていない場合、音楽経験についての豊かな語りが収集しづらい傾向が確認されている。

(3) インタビュウの準備と実施形態

調査の方法にはインタビュウを採用した。具体的には、筆者があらかじめ設定した質問項目(表 2-1 参照)に沿い、半構造化インタビュウの方法で、インタビュイーである調査対象に、過去から現在にいたるまでの音楽経験の積み重ねについて話してもらうように準備を進めた。半構造化インタビュウの方法は「質問項目や枠組みにある程度の構造化をほどこしつつ、実際のインタビュウ場面では、興味深いトピックスや語りについて適宜質問項目を加えたり、話題の展開に応じて順序を変える等、インタビュイーの反応やインタビュアーの関心に応じて、十分な柔軟性」を持つものである¹²³。なお、質問項目については、過去から現在までの音楽経験についての語りを調査した Pitts(2012)を参考に、3 名へのプレインタビュウを実施し検討を重ねた上で決定した。

¹²³ やまだ(2007a)p.102

【表 2-1 質問項目】

- | |
|---|
| <p>①名前、年齢、仕事内容</p> <p>①これまでの音楽活動や受けたことのある音楽教育についての流れ。</p> <p>②現在、どんな音楽が好きで、どのように楽しんでいるのか。</p> <p>③子供の頃、ご家庭ではどのような音楽の存在があったのか。また、それは自身の成長発達にどのように影響したと思うか。</p> <p>④学校での音楽の思い出はどのようなものか。(人、部活、機会を含む)</p> <p>⑤人生その時々々のステージにおいて、どのような人があなたの音楽的なふるまいに対し、影響をあたえてきたのか。</p> <p>⑥自身の人生を音楽の面で振り返ってみて、もっとも印象的な出来事。</p> <p>⑦音楽的な機会損失に関する後悔の有無。</p> <p>⑧音楽に対する嗜好・思い・考え方などはどのように変化してきたのか。</p> <p>⑨音楽を通して身についたものは何か。</p> <p>⑩その時々々の音楽活動をスタートするきっかけか。</p> |
|---|

インタビューの流れとしては、年齢や性別、仕事内容など、基礎的な項目を確認した後に、現在の音楽活動の概要について尋ねた。その後、現在に通じる音楽活動のきっかけをたどるように、過去の音楽経験を振り返ってもらい、話の自然な流れを尊重しながら、あらかじめ設定されていた質問項目について確認していった。

インタビューの前にはあらかじめ、語りたくないことについては答える必要がないこと、プライバシーを厳守すること、記録したインタビュー内容は学術的な研究目的の下に利用することを説明し了解を得た上で、誓約書をかかわした。面接の回数は最低1回から多い場合で3回、所要時間は1回あたり40分から160分程度であった。直接面接終了後、事実確認の補足として電話やメールを用いることもあった。またあらかじめ、本人の許可をえて、直接面接を録音している。調査期間は2014年6月から2017年4月で、その期間において、それぞれの調査協力者と随時都合調整をしながら、インタビューを実施した。

(4)インタビュー調査の視点

本研究は、音楽経験がどのように自己へと意味づけられ、職業行動への影響と関連していくのかを明確にするものである。よってインタビューもまた、ライフストーリー論の視点に依拠し、どのように人生経験が構成され、意味づけられているかに目をむけて、その語りを

丁寧に聞いていった。すなわち、インタビューの際には、語り手が所有するエピソードを重んじ、それが具体的にどのような内容の経験で、その経験とその後の経験との関連がどのようであり、その経験についてどう思っているのか、経験の中身やその後の人生との関連性、その体験の意味づけを深く聞くことに注力している。インタビューは、話し手にとって語ることがなくなったと思われた時点で話題を終了し、インタビューイによってなされる経験の意味づけを重視した。

第2節 インタビュー協力者

(1)インタビュー協力者の概要

インタビュー協力者10名は、男性9名、女性1名、年齢が30代から50代、職業は10名中6名が会社経営者であった。男女比と職業内容に偏りが見られる。男女比の偏りはX経営大学院全体の男女比率においても圧倒的に男性が多いこと、職業内容の偏りについては、起業家育成に重きをおいた実務直結型のマネジメントプログラムの提供がなされる教育特性に起因すると考えられる。なお、全ての項目は、インタビュー時点での内容となる。

音楽経験の項目においては、現在、継続している演奏活動と過去の音楽経験に分けて、記述した。内容が重複しないよう、現在、継続している演奏活動の内容は、過去の音楽経験の項目に記載していない。加えて、過去の音楽経験については、演奏や歌唱、作曲など表現に関わる活動経験と、主体的な聴取活動としての鑑賞に関わる活動経験についても記載した。演奏経験年数については、演奏・歌唱・作曲に関わる活動をした経験年数と現在継続している演奏活動の期間の合計を記載した。活動頻度は低くても、語り手本人が断続していると認識している場合は経験年数の対象として解釈したが、語り手本人が音楽をやめていた期間として認識している場合は、経験年数の対象としなかった。表2-2がインタビュー協力者一覧である。

【表2-2 インタビュー協力者一覧】

年齢	音楽経験	演奏経験年数	職業(職種)
	①現在の音演奏活動(継続期間、活動形態) ②過去の主要な音楽経験		
A(56)	①リコーダー(4年程度、社会人アンサンブル) ②ホルン(中学高校時代の吹奏楽部)、高校卒業	10年程度	

	以降音楽鑑賞		
B(41)	①エレキギター(15年程度、社会人バンド) ②エレキギター(高校では有志・大学ではサークル、会社では有志にてそれぞれバンドを結成／3年程度、個人レッスン)	30年程度	■■■■■ ■
C(39)	①コントラバス(15年程度、社会人オーケストラ／4年程度、個人) ②ピアノ(幼少期から高校まで・個人)、作曲・キーボード(中学高校のバンド)、クラリネット(中学高校の吹奏楽部)、コントラバス(大学のオーケストラ部)	30年程度	■■■■■
D(50)	①リコーダー(4年程度、社会人アンサンブル) ②ピアノ(幼少期から高校1年生まで・個人)、トランペット(小学校の吹奏楽部)、テューバ(中学校の吹奏楽部)、ユーフォニウム(高校の吹奏楽部)、キーボード(大学のバンドサークル)	20年程度	■■■■■ ■■■■■ ■
E(49)	①ピアノ(4年程度、個人)、リコーダー(4年程度、社会人アンサンブル) ②ピアノ(小学生の時代、個人レッスン)、フルート(高校時代の吹奏楽部)、キーボード・ギター(大学時代の軽音サークルのバンド)、キーボード(8年程度、社会人バンド)	20年程度	■■■■■ ■
F(46)	①ベース・ギター(4年程度、社会人バンド) ②クラシックギター(中学生の時代、3年程度、個人レッスン)、ベース・ギター・作曲(中学から社会人になるまで、有志でバンド結成)	15年程度	■■■■■
G(41)	①■■■■■(個人、7年程度) ②■■■■■(幼少期から高校2年生まで個人レッスン／大学のオーケストラ部での活動／3年程度、大学卒業後の専門学習)	20年程度	■■■■■
H(50)	①ボーカル(20年程度、社会人バンド)	30年程度	■■■■■

	②ギター(小学生6年生から独学)、ブラックミュージックに関連した活動(独学、大学時代)		■
I(47)	①歌(4年程度、合唱) ②歌唱(小学生以降、歌謡曲の鑑賞歌唱、高校大学時代は外国曲や洋楽の鑑賞歌唱も、独学)	20年程度	■
J(53)	①ボーカル(10年程度、バンド)、作曲(10年程度) ②ピアノ(幼少期から小学生の時期、個人レッスン)、フルート・シンバル(中学校の吹奏楽部)、ギター・作曲・ボーカル(高校の友達との有志のバンド、大学時代のサークル活動、社会人になって出産するまでの有志バンド)	40年程度	■

(2)インタビュー協力者のプロフィール

本項では、インタビュー協力者一人ひとりのプロフィールを述べる。プロフィールは、それぞれのインタビューによる語りからまとめた。プロフィールの内容をイメージしやすいよう、下線を引き、そのことに関連する発話部分を注釈として引用している。

【Aさん(56歳 ■)】

中学一年生で始めたブラスバンドの部活動をきっかけに、吹奏楽に夢中になる。高校の進学先も吹奏楽を軸に決め(※1)、周囲を説得し、親元をはなれ、晴れて吹奏楽部の名門校への進学を果たした(※2)。中高共に担当楽器はホルンだった。憧れからスタートした高校生活(※3)の実際は、音楽の楽しさを味わうこととはかけ離れた、想像をこえる過酷な練習と理不尽な上下関係を強いられる日々であった(※4)。途中何度も挫折しそうになりながらも、時に味わえる全国トップの誇りと、自分に対する意地を理由に、3年間の吹奏楽部生活をやり通した(※5)。音大進学を考えた時期もあったが、最終的には高校卒業と同時に吹奏楽も卒業(※6)。以降の人生では基本的に、聴く楽しみを味わう形で音楽との関わりを保ってきた。再開のきっかけは「X音楽の会」の告知をもらった4年前、再び演奏への興味がわいた。以降、リコーダーアンサンブルのテナーパートを担当し、定期演奏会に出場している。

※1「吹奏楽をどうしてもやりたいと。で、やるんならば、やっぱり日本でトップレベルの

学校にどうしても行きたいと。で、当時、Y 高校が、吹奏楽では最高峰だったんです」

※2「ともかく親を説得して...じゃあ、父親が、受験はしていいと。ただし、地元の公立高校もちゃんと受験しなさいと。その上でまあ、どっちにするか決める。これはしめたと！公立高校で何にも書かないで出せばいいと。で私立の方が早いから、試験が。で、Y 高校の試験は受かったんです。ヤッター！みたいな話。それでもう、答案紙に何も書かずにだせる。そしたら父親が急になんか話が変わって、そんなに行きたいんだったらいいと、行けと」

※3「入学式終わって、待たなきゃいけないんですよ、入部するまで。その時に、まだ中身の厳しさを知らないから、練習場の近くに二人で友達と座って、外からずっと音楽を聴いて『や～、違うよな～、やっぱりな～』とか『はやく入りたい～こん中に』って思って、我慢して。4月の終わりくらいになって、ようやく部活動が解禁」

※4「厳しくて。軍隊。朝練もあり、それといわゆる、3年神様、2年家畜、1年蛆虫みたいな。ほんとにすごいですよ、それは。1年生って、ハイとイエとスミマセンしかいえない。3年は、直接、1年には何もいわない。2年が1年に言うんです。さほど歳も変わらないやつらにボコボコやられるわけです」

※5「トップの誇りというのが常にありました。まあ、何せ、やめたかったり、逃げたかったりするの、日常茶飯事だったんですけど、親の反対を押し切ってきたというのもあって、俺、ここでやめたら俺なんだろう、何のために Y 高校に来たんだろう、こんなとこまで。

」

※6「だからそれは、すごく、その満足感も、やり切ったって言う満足感の方がやれなかったという残念感よりも大きくて、まあ、自分的には一つの区切りを付けた」

【B さん (41 歳)】

育った家庭は音楽が身近(※1)だった。中学 3 年の時に、家にあった父親のギターを弾き始める。きっかけは塾の先生が長渕剛の曲を弾いてくれたことだった。以降、独学でギターの練習に励んだ。高校時代にはバンドを組み、ライブのステージに立つようになる。大学もバンドサークルに入り、たくさんの本番を経験した(※2)。特に米米 CLUB のコピーバンドでのった定期演奏会は忘れられないステージとなり、その時に味わった感動が就職先の決め手となった。これまでに、多くの仲間と触れ合いながら、様々なバンドに参加してきたことから、演奏ジャンルは幅広い(※3)。社会人になって以降も、仕事の忙しさや家庭の状況と

の兼ね合いをみながら、バンド活動を続けている。現在は、会社の仲間とのバンドライブや、X 音楽の会の定期演奏会が主な本番。担当楽器は常にギター。基本的にギターが好き(※4)で、社会人になって以降、ギター教室に通っていた時期もあった。

※1「父も母も音楽を聴くことは好きだったみたいで、家にカセットテープとかクラシックのレコードセットとかがあったんです。それを真剣に聴いてる姿をあんまり見たことなかったですけど、流して聴いたりとか。けっこう音楽は溢れていた感じがします。母親が料理するとかに『ガチャッ』て(笑)聴いてたりとか(中略)。新しもの好きな父親は、クラシックのなんか、80枚セットみたいのをプレーヤーと一緒に買ってきて、そういうのを聴かせられたり、聴いたりして、音楽ってこういう風を買っていいんだって思って、自分もこう、お小遣いとかでCDを買うようになった」

※2「断片的にやったり休んだりして続けてはいますが、どうなんですかね、感覚的には10年くらいやって、その中で、何度もこう、人前で演奏するとかってことが必要なんじゃないかなと」

※3「バンドって一人じゃできないじゃないですか。4,5人集まると、4,5人みんなおんなじのを聴いてるわけじゃなくて、こないだでたアルバムあれ聴いたとか、何そのバンド？聴いてみ？の貸し借りが始まるんです。そうすると、一だったものが五にも十にもバ～って広がっていくので、もう、網の目のように音楽の好きなものが広がっていく。一番やっぱ財産だと思って思ったのは、高校でバンドやってたことと、大学のサークル」

※4「ギターが好きなので。ギターってリズム楽器にもなるし、メロディにもなるじゃないですか。それで、その、表現しているのを聴くのがすごい好きで。あと自分が弾いているのがあるので、聴きながら『あ～、このフレーズかっこいいな、どうやって弾くんだろう』とか『この音いいな』とかっていう視点ですと聴いてました」

【Cさん (39歳 XXXXXXXXXX)】

幼稚園教諭だった母親が日常的にピアノを練習していたこともあり、音楽が身近な家庭で育った。両親の考えで幼少期の頃からピアノを習い、高校2年生まで続けていたが、今もあまり得意ではない。最も音楽について勉強したのは中学高校時代。聖飢魔IIや X-JAPAN に心酔し(※1)、独学で楽典を学びながらオリジナル作品を作曲(※2)し、文化祭のステージで発表した。また中学高校時代は学校の吹奏学部にも所属しクラリネットを担当していたが、あまり実にはならなかった。大学ではオーケストラ部に入り、心機一転、コントラバス

を始める。(※3)情熱のある指揮者の先生に導かれ、練習三昧の学生生活を送った(※4)。社会人以降は、一時の中断を経た後、オーケストラに所属し、コントラバスを再開。忙しい中であっても音楽をすることで、仕事面に良い影響が及ぼされることを実感(※5)している。また様々な指揮者の先生からは学ぶところが大きい。(※6) X 音楽の会のステージでは、コントラバスのソロ曲に挑戦している。

※1「X-JAPAN は、ああいう気合いが入ったバンドだったんで、僕はあの姿勢に学ぶところがあって、自分の限界を自分で決めてしまっはいけないというか、限界はもうないというか(中略)(聖飢魔Ⅱの)デーモン閣下、インテリっぽいところがあるので、やっぱり社会に対する考え方というのは勉強になったし、何よりも人と違うことをやる大切さというのと、人が何と言おうとね、自分の信じる道を行くというところがわりと僕としては勉強になった」

※2「(X-JAPAN や聖飢魔Ⅱの)バンドのスコアを買ってきて、みんなどういう風にやってるのかなっていうのを、ドラムはこんなことやってるなとか、ベースはこんなことやってるねっていうのを全部見て、で、ああ、なるほど、こういう風にやれば曲ができるんだっていうのを自分で、今考えると、勉強して、で、打ち込みをして、曲をつくるっていう(中略)多分、その時が音楽、僕、もしかしたら勉強してたかもしれないな。自分でつくるっていう意味で。まあ、作曲っていつでも簡単なものですけど」

※3「6 年間やってたけど、実際、そんなに身にはななくて。で、こりゃもう駄目だと諦めて。でも大学時代やるんだから、今の自分とは全く違う世界に入りたいなと思って、今まで高音の管楽器やってたから、今度は低音楽器をやっぴりやってみたいと思ってコントラバス」

※4「まあ、勉強していた時間もありますけど、どっちかっていうとオーケストラを中心に考えていた」

※5「オーケストラの練習の時間はどうしても音楽をやることになって、結果的には、その時間があるからじゃあ、そのために早くいろいろ終わらせないといけないなとほかのところにも影響がでてきて。というのとやっぱり、週に 3 時間とか 4 時間とかは仕事のことを離れて、あの、音楽に集中する時間ができて、結果的にはやっぱり仕事とは別に音楽の時間ができるっていうのがいい影響を及ぼした」

※6「今思うと(大学時代の KW 先生は気合いの入った先生で...社会人になってからは、SO 先生って知ってますかね?(中略)それと对象的なのは TT 先生(中略)そういう指揮者の先生との出会いというのはあります)

【Dさん(50歳 XXXXXXXXXX)】

両親に頼んで幼稚園でオルガンを習い始め、小学生になってからはピアノに転向。難しい曲を弾けるようになりたくて練習を続けた。一時は音大を視野に入れて勉強した時期もあったが、徐々にモチベーションが低下。高校一年生の時、憧れていたショパンの木枯らしのエチュードを弾けるようになったところで満足し、ピアノを辞める(※1)。小学校から高校までのクラブ活動や部活動は全て吹奏楽系で、小学校ではトランペット、中学ではテューバ、高校ではユーフォoniumを担当した。ピアノと比べて真剣に取り組んだ記憶はなく(※2)、純粹に合奏が楽しくて活動を続けていた(※3)が、一方で指揮者のいる音楽活動に窮屈さを覚え(※4)、大学時代しばらくは音楽を中断。大学四年生からバンドに参加し、キーボードを担当、社会人以降も活動を継続していた。楽しかったが子供が生まれたタイミングでやめた。現在はリコーダーアンサンブルでバスリコーダーを担当。3年前にX音楽の会に所属し、以降、演奏活動を続け、良いリフレッシュになっている(※5)。

※1「ピアノでいえば、最後で弾いたショパン、ショパンが弾けたというのはとても嬉しかったです。難しい曲を弾いてみたかった。ああいう聴くからに難しい曲を弾けるんだという自分でありたかった。あれを弾けた時の満足感はすごく高かった。やりきった感もあったと思います」

※2「合奏の方は遊びでやっていたので、コンクールに出られた、楽しかった、県大会に出たとか出られなかったとか、そういうイベントとして楽しかったですね」

※3「譜面は簡単で、別に初見で吹けるし、音もそれなりに出るので、別に練習なんてしなくてよかった。合奏がとにかく楽しかった。みんなで音を合わせるのが...そういう感じでした」

※4「指揮者のいる音楽が嫌だったんです。高校の時は学生指揮者、つまり同級生の中に指揮者がいる、選ぶ時も立候補で、なんだかんだ決める時にもめるんですね。で、もめて、決まった後も、なんであいつに指図されなくちゃならないんだ、みたいなことがあったし(中略)後輩といえども指揮者に従う。3年間やって我慢が出来なくなった笑。だからもう、指揮者のいる音楽はやめよう」と

※5「今のリコーダーは、音が好きだし、人数が少ないし、合わせやすいし、ちょうどあの大きさがよかった。あのくらいの集団だと合わせやすいし、意志の疎通がしやすいし、吹奏楽だとなんだかんだと...だから、リコーダーアンサンブルはすごくいいなあと。リコーダー

の楽しさは初めてわかりました。ほんと楽しいなと、今までにない楽しさだと。ですから優先順位をあげますよ。いいリフレッシュになっています」

【Eさん(49歳 XXXXXXXXXX)】

音楽が好きな両親のもとに育てられた。特に、盲学校の子供たちに音楽を教えるかたわら、ジャズバンドの活動をしていた父親の影響は強く、小さな頃から音楽に触れる機会が多かった。(※1)小学一年生からピアノを習い始めたが、上達への興味がわからず、練習をせず、小学六年生でやめた。高校二年生の秋から吹奏楽部に入部し、活動を通じ、仲間と一緒に合わせていくという今までにない楽しさを知った(※2)。大学では軽音部に所属し、熱心に活動した。楽典などの理論をはじめ音楽をちゃんと勉強したいという気持ちもあったが、それよりも仲間と音楽する場を楽しむ方を選んできた。引退間際に訪れた小笠原のボランティアキャンプで、自分が求めている音楽の一体感を一瞬味わえたことは、今でも心に残っている。(※3)卒業後は結婚式バンドとしてしばらく活動していたが、結婚ブームが落ち着くと共に、活動も自然消滅。(※4)X音楽の会の所属をきっかけに、細々と続けていたピアノを再開し、初めて出場した定期演奏会ではショパンのノクターンを弾いた。現在は、ピアノ演奏者としてだけでなく、リコーダーアンサンブルのソプラノ奏者もつとめている。ピアノについては、みんなと楽しむことに加えて、きちんと勉強して上達することへの想いが強い。

※1「父親はジャズバンドを作って活動をしていました。僕はリアルでは知らないんだけど、その活動を本にして、著作にして、雑誌に取り上げられたり、アート・ブレイキーというドラマーが、(勤め先の盲学校の施設に)来てくれて、子供たちの面倒を見に、ジャズメッセンジャーの集まりとして、たまたま来てくれたり。(中略)レコードとかが家にたくさんありました。それを勝手に聴いたりして...というのがジャズを聴くきっかけ。楽器は、そうだ、ピアノがあったんだ。ピアノはね、すごく古い中古のピアノをタダ同然でもらってきて、音もたまにでないようなピアノだったけど」

※2「やっぱり音楽すごく楽しいよっていう、単純に楽しいんだと。あとブラスバンドってみんなで合わせていく楽しさを感じることができたかな、と。演奏がというよりも、関わりが、ですね」

※3「僕は小笠原に子供たちを連れて行ってキャンプ活動を指導するというボランティアをやったんです。で、子供たちをわーっと連れて行って、で、僕ができるのは泳ぎと音楽なので(笑)亀の産卵を見るのね、みんなと。殻からでてきて、ピコピコピコっと波に出ていく。

一人のボランティアが両手に二人の子どもと手をつないで、亀を追いかけていく。悪ガキとか言うこと聞かない。で、終わってキャンプファイヤーに突入して、僕がギターを歌って、子供たちが寝た後、ボランティアで飲んで歌って...楽しかった。共有できるっていうね、それが音楽のいいところだった。(中略)気づいたらギターの弦一本しかないっていうか...笑 ちょっと危ういですよね。手も血だらけだし、記憶もないし(笑)そんな感じ。けっこう場とか絵とか覚えてます」

※4「X 音楽祭(定期演奏会)でショパンを弾くまでなかった。ずっとやりたいなと思っていたけれど、なかなか機会がなくて。当時の仲間も地方に行ってバラバラになってしまっ。集まっても楽器は持ち込まず、飲み会と昔話というかね、そうなっちゃって。それはそれで別に楽しんだけど、続けてやっている人を見るとうらやましかった」

【Fさん(46歳 ██████████)】

中学一年生、EARTHSHAKER との偶然的且つ衝撃的な出会い(※1)から、本格的なバンド人生が始まった。中学時代はクラシックギターを習いながら(※2)バンド活動に没頭(※3)し、ベースとギターを担当。高校時代はさらに活動が本格化し、ハードロックバンドを結成しオリジナル曲を発表していた(※4)。高校卒業後は ██████████ の専門学校へ進学。一時はプロのミュージシャンとして生きる道も考えたが断念(※5)し、以降の演奏は、仕事にすることと切り離し続けてきている。およそ20年あまり ██████████ としての道を歩んだ後、36歳で生き方を変えることを決意。経営学を学び、██████████、現在に至る。「X音楽の会」のバンドではベースを担当。昨年は三味線の演奏も初披露した。定期演奏会では舞台PAも担当。音楽経験と職業行動とのつながりを感じている(※6)。

※1「アースシェイカー(EARTHSHAKER)! ジャケットカッコいいな~、これでいいや、いや、やりたい!と。偶然だよ。でも、レコード聴いたら、超カッコよかった。戦慄が走った。これだと思った、ギター覚えようと思った」

※2「中学一年の時にギターをはじめて...まあ、相当揉めましたけど買ってもらって、教室に通わせてもらって。独学じゃなく習おうと思った。Nギター教室、知ってる? 立て看板のある、ギター教室に通い始めたんです。先生にクラシックギターから覚えたほうがいよって、音楽理論から始まって。退屈じゃなかったね、音楽だから楽しかった。エチュードから、タンタンタンタンタンタン・・・」

※3「イーストウェストコンテストの中学生部門があつてそれにも応募したの、はっはっは

(笑)。箸にも棒にもかからなかったけど。中三の時だね」

※4「高二くらいからかな、つくってた。一応、小林亜星の作曲の理論とか読んだけど(笑)もう全然(笑)。だから、とりあえず、知ってる曲のこのフレーズとこのフレーズをくっつけて、当時は録音機器とかなかったから、ラジカセを前にして(笑)。ほんと、この頃は、音楽漬けでしたね」

※5「プロになろうと思ったこともありました、悩みましたね。正直、今振り返ると、頑張ってる、人生かけてもよかったのかな、と思う。プロになりたがっている奴がいて、さっき言ったプレスリーが好きだったボーカルにはプロになろうよって誘われたけど...まだ高校生だったし、明らかに技術もなかったし...正直、プロのミュージシャンというのは職業的にどうなんだろうなあと思って、音響の専門学校ではPAとレコーディングを勉強しました」

※6「説明しにくいけど、音楽をやったことによって、ビジネスにすごいつながっている。発想とか...説明しにくいんだけど、努力じゃなくて、アートな世界。新しいビジネスを起こすのはアートな世界。努力をしつつ、うん、アート以外の何物でもない。そういうことを考えつくのは、音楽をやってきたから、そうなったんだと思う。説明しにくいけど、音楽をやったことによって、ビジネスにすごいつながっている。発想とか...説明しにくいんだけど、努力じゃなくて、アートな世界。新しいビジネスを起こすのはアートな世界」

【Gさん(41歳 [REDACTED])】

家族の勧めから3歳より [REDACTED] を始める。苦痛な練習に耐えるも(※1)限界が訪れ、中学二年生で母親の反対を押し切り [REDACTED] をやめた。大学のオーケストラ部入部をきっかけに音楽を再開、好きな曲を弾けることの楽しさから [REDACTED] に夢中になる(※2)。大学卒業を前にしてプロの演奏家の道に挑戦することを決意。就職先の内定を取り消し、卒業後、音大入学を目指した専門の勉強を始める。以降3年間は人生を賭け(※3)、最初の2年間は著名な [REDACTED] に師事しZ大学を目指す。3年目は [REDACTED] 大学を目指し、現地の教授について努力をした。28歳で断念を決断し(※4)、自ら人生の方向転換を決め、[REDACTED] 試験を目指し合格(※5)、30歳にて社会人としてのキャリアをスタートさせた。[REDACTED]、現在は、[REDACTED] いかにか極めていくか、どのように自身の可能性を広げていくのかを考えている。(※7)

※1 「1日1時間は守ってやってました。楽譜をその一時間なら一時間、もう、どうしてもやらなければいけない。やらないと怒られる。怒られるのが嫌なので、泣きながらでもやら

なければいけない。その体験っていうか、経験っていうのは、非常に...嫌々やっていたという事はよくなかった」

※2「[]をうまくなりたいた。[]自体もやっぱり好きで、人前で弾いたり、合宿の朝昼晩、みんなでやったり、アンサンブルやったり、学園祭でこう、音楽部でお店を出して、そこで一人で弾いたりとか、みんな弾いたりとか、そこで[]が楽しくなってきて...小さい時と全然違うじゃないですか。自分がやりたい曲じゃなく、曲も全部決まっちゃってるし、なんか強制的な練習だし、そういうのもあったけど、今は自分で好きな曲を自分で練習するという喜びがあった」

※3「[]

」

※4「[]試験も受けたんですけど、それもダメで、それでですかね、それでやめようと思ったんです、3年目ですね。3年目はZ大は受けてないんです。現地に行って、自分の目で見て聴いて確認できたというか、まあ、いい先生にも習えて、死ぬほどやって、それでも自分がうまくなれないというか、人に認められてなんぼじゃないですか、プロだ。というところで、認められないというのはしょうがないのかな」

※5「勉強を始めて、たまたま本当に、たまたま、まあ、一回ね、退路も断たれて、一回死んだ身だったというのもあったので、まあ、受かるまでやろうと思って、腹くくってやったらたまたま受かって」

※6「働いてからも最初は[]をさわれなかったですよ。さわる気にならなくて。仕事でも余裕が出てきて何年かしてからです。怖いもの見たさで、ちょっと開けてみようかな。復活したのは2010年くらいですかね」

※7「完全に趣味として、これから[]突き詰めていくじゃないですけど、自分の可能性というのを広げていくか、広げていきたいというのが今です」

【Hさん (50歳 [])】

音楽が日常的にある家庭に育った。小学6年生の時、クラスの女の子がアコースティックギターを楽しそうに弾きながら歌っている姿に心奪われ、ギターを始める。以来、今にいたるまで、ギターはずっと弾き続けている。習った経験はなく独学。大学時代にボブ・マーリーの人生と音楽に衝撃を受けたことをきっかけに、ブラックミュージックに開眼。以来、音楽漬けの日々となる(※1)。実際に、自身がバンド活動を始めたのは社会人になってから。

開始時期は遅いが、以来、基本的にずっとやってきたので、活動歴は20年以上。ポジションはボーカルである(※2)。独学で譜読の勉強をしたが限界を感じ、音楽は基本的に耳コピーで覚えている。ここ最近、バンド活動を休止中。今は自分の音楽の行き詰まりについて、向き合う時期(※3)。その分、音楽をたくさん聴いている。音楽を通じて人間形成をされたといっても過言ではなく、音楽は自分にとって近いも遠いも何もなくてはならないもの。

※1 「『ボーダー』っていう漫画に出会いましたね。ボブ・マーリーを描いた漫画だったんですが、もうここで、一気に、ブラックミュージックに開眼しました。ブラックというマイノリティの立場からレゲエミュージックを発信していった、そして世界に立ち向かっていったという姿勢に、感銘というか、共感というか、強いものをもらったんです。それからもうずっと、ブラックミュージック一直線。寝ても覚めても音楽漬けの日々が始まってね...
結局、就職も■■■■の会社」

※2 「アーティストとしてはやはり歌唱にはこだわりがありますね(笑)。ヴォーカリストとして舞台に立つ時は、基本的にメタ的な視点で自分を見ています。切なさ、楽しさを、どうすれば表現できるか。自己陶醉するのではなく、パフォーマンスの完成度にかなりこだわっているつもりです」

※3 「誰かのコピーをして演奏するだけならとてもクオリティの高いものになるんですよ。が、しかしですよ、オリジナルがつかれない。多分、自分の中に主張がないからだと思います。MCも苦手でね。自分の中にそういった、なんだろう、何かを突き動かす主張がないから、表現だっていいものがないんだと思うんですね。音楽が嫌いになったわけでは決してないですが、今はそういった時期なのかな、と」

【Iさん (47歳■■■■)】

社会人になる前は、学校の授業以外に、特別に音楽に関する習い事をしたことはない。小さい頃から歌うことが好きで、小学生の頃はテレビやラジオの歌番組を通じてたくさんの歌謡曲や演歌を覚えて歌っていた(※1)。中学生以降は、友達と仲良くなる手段としての歌や音楽と関わる側面が強くなる。中学は、友達から勧められたj-popを聴くという受動的な関わりがメイン。高校生の終わりごろにカラオケができてからは、頻繁に通った。また言葉が通じない海外では、外国語の歌をきっかけに話題が生まれることが分かり、外国語の歌を一生懸命練習した時期もあった(※2)。コンサートやライブに行くことも好き。習うというスタイルの音楽活動は■■■年前からで、歌がうまくなりた、友達に褒められたいという動機

から合唱を始めた。結果的には、歌うことが、仕事のストレスからの解放手段ともなり、これまでの音楽との関わり方と少し異なる側面を見出している(※3)。

※1「歌謡曲っていうんですか、志村けんの東村山音頭とか、あれ結構やっぱりウケるから、子どもながらにやりたくなくて、そういうのやったりとか、後は津軽海峡冬景色とか。ほんともう、時代が時代なんで、そういう感じで、やっぱり歌謡曲の時代がすごい長かったなと(中略)ザ・ベストテンとかトップテンとか、あとラジオとか森田公一の青春ベストテンとか。順位あてると一万円もらえるとかで、必死に応募していましたね。そうですね、その当時流行っていた曲はひととおりに聴いていましたね。小学校一年生くらいの時からちょろちょろ、面白いなって思って聴いていて」

※2「ビリー・ジョエルとか...80年代ですね。それで、そうですね、あの、その頃音楽の授業とかで、けっこう、違う国の言葉で歌うっていうのは面白いなと思って、練習しました。でもまあ、こういった外国語の曲は、旅行に行った時に、話題の共通項、つかみになりやすいというのがあって、それはすごくよかった」

※3「ちょうどこの5年くらいで、それでかなりストレスフルな日々ではあったんです。(中略)合唱の場合は、嫌なことを忘れられるというか、忘れないとその質が高まらない。通常、ダンスでも、他のトレーニングも、別のことを考えながらできるんです。極めようと思ってやってたわけじゃないんで、やってると嫌なことを考えちゃったり、やった後にすっきり感がないんです。一般的にいうストレス解消的な活動はしたんだけど、実際はもやもや感が残る」

【Jさん (53歳)】

曲をつくるのが趣味という母親(※1)と、楽器産業が盛んだった地域特性の影響を受け、音楽が身近な生活環境にて幼少期を過ごす。幼稚園からグループ音楽教室に通い、小学校の6年間はピアノを習っていた(※2)。中学では吹奏楽部に入部し、シンバルとフルートを担当。スパルタな練習をこなし(※3)、中学二年生で全国大会への出場を果たした。全国大会の舞台の上で感じた気持ち良さは今も忘れられない(※4)。高校では、バンドを組み、主に作曲と

[REDACTED]

ところで、インタビューを含む社会調査やエスノグラフィー調査においては、調査者が被調査者との間に築き上げなければいけない関係を象徴する用語として「ラポール」がある。ラポールとは、調査者と被調査者、両者の間に結ばれる友好的な関係を指し、被調査者としての相手が嫌がったり、非協力的になって、円滑な調査が行えなくなることや正確なデータを収集することができなくなる状況を避ける上で重要とされている¹²⁴。筆者とそれぞれの調査協力者との人間関係がラポールと呼ばれる状況にあったかどうかの判断は難しい。

[REDACTED]

¹²⁴ 桜井(2002)pp.63-65

第3章 演奏を続ける MBA コース参加者における音楽経験の意味づけ

本章では、第1章および第2章の内容をふまえ、演奏を続ける MBA コース参加者における音楽経験の意味づけについて、明らかにしていく。具体的には、第2章でプロフィールを記述した演奏を続ける MBA コース参加者による語りを手がかりに、各事例において、語り手が自己に対して音楽経験を意味づけている内容について着目し、音楽経験の意味づけがどのような思考であるのかについて考察を行なう。その上で、本章の結論としては、10人の事例分析を通して導かれる音楽経験の意味づけから見出される指摘をまとめた。

第1節 分析の手順

本研究においては、以下の流れで分析を進めた。

<手順1>事例ごとに、インタビューで収集した語りのデータを逐語化し作成したトランスクリプト¹²⁵をもとに、語り手、すなわち、現在の語り手における考え方や行動、ふるまい、立場と、これまでの音楽経験との間につながりが見出される発話箇所を抽出した。

<手順2>抽出した発話の内容について、指示語等が使用されているなど、インタビュー個々の音楽経験について不明瞭な箇所は、トランスクリプトを参照しながら、個人の特性や人生全体の意味を通して、丁寧に解釈した。なおこの段階において、発話同士で、明らかに意味内容に重複がみられる場合は、グルーピングした。

<手順3>各発話箇所について、第1章で導いた、語りにおける自己に関する理論的な解釈に基づき、音楽経験に見出されている意味を明らかにし、語り手において音楽経験がどのように意味づけられているのかについて考察した。

<総合考察>10人の事例分析の結果から示唆される、音楽経験の意味づけから見出される指摘をまとめた。

分析の<手順1>において、それぞれのトランスクリプトから、音楽経験と現在の自己とのつながりについて語られた部分を抽出する際の判断は、佐藤(2006)¹²⁶による、過去の経験に対し現在の自己とのつながりを言及する際の分類基準に依拠した。提示された基準のうち、現在の自己とのつながりが明確に語られている発話および曖昧な語りでありつつも現在とのつながりの示唆がえられる発話を、現在の自己とのつながりについて語られた発話箇所としてみなす。表3-1は、佐藤(2006)の分類基準について整理したものである。本研究

¹²⁵ トランスクリプトは附録とした。

¹²⁶ 佐藤 (2006) pp.151-152

のように、発話抽出の基準を具体的に明示した先行研究はあまり見当たらない。しかしながら、経験の浅い研究者にとって、分析の過程において首尾一貫して発話抽出の基準を一定に保つことは難しいと考えられた。

【表 3-1 発話における現在の自己と経験とのつながりに対する解釈】

(佐藤 2006, pp151-152 を参考に筆者が作成)

【現在の自己とのつながりが明確な発話】	【現在の自己とのつながりが曖昧な発話】	【現在の自己とのつながりを言及していない発話】
(1)理由に「現在の目標である」「現在の出発点である」「その影響で今」など、今現在の自己とのつながりが明らかになっている。 (2)「今」「現在」という表現を用いていなくても、今の自己との関連が示唆されている。現在形で語られているケースが多い。 (3)今の自己の立場になりたいと思ったきっかけとして意味づけている。	「～を学んだ」「～が大切」等、その出来事と現在の自己(の価値観)が結びついていることが示唆される。	当時の説明や感情に限定した記述であり、現在とのつながりが明示されていない。

第2節 分析結果と考察

本節では、インタビューAからJの語りにおける事例分析の結果と考察をそれぞれ記述する。なお、太字は、音楽経験の意味を簡潔な文章にあらわした内容と、発話箇所における話題を展開する語り手の視点についての記述である。「」は、トランスクリプトからの引用部分になる。抽出した発話における()は、文章の意味をわかりやすくするために筆者が適宜補足した、主語や目的語、修飾文である。

(1)Aの事例

中学高校時代の吹奏楽部での活動を中心に、およそ10年の演奏経験を持つAの語りからは4箇所の発話を抽出した。以下より、抽出した発話ごとに、語り手が音楽経験を意味づけた内容について記述する。

①分析結果

<発話 A-1 について>

発話 A-1

「中学校の時に(全国大会での吹奏楽部の演奏が録音された)レコードを聴いていた時に、アナウンスで演奏が始まるんですけど、指揮 TN ってずっと聴いてたわけですよ。実際に(高校の吹奏楽部に)入った時に(TN 先生の指導を受けて)、『これはリアルなんだ!』という感動。だから幸せだと思いますよ、ぼくは。自分の思ったところに行けて、そういう環境の中でできたっていうのは。だから、やり切ったって言う満足感の方がやれなかったという残念感よりも大きくて、まあ、自分的には一つの区切りを付けた」

A は、憧れを叶えるかたちで、吹奏楽部の名門校、Y 高校に入学し、その3年間を吹奏楽一色で過ごした経験を有している。A がそもそも Y 高校に憧れを抱いたきっかけは、中学時代、吹奏学部での活動を通じて、XXXXXXXXXXである Y 高校の演奏を LP で聴いたり、Y 高校に関する雑誌記事を読んだりしたことであった。そして、当時の Y 高校を指導していたのが TN 先生である。TN 先生はいわば、「甲子園でいうと名監督」であり、それだけに当時の A にとって、TN 先生への憧れは強かった。それが表れているのが、上の発話の『これはリアルなんだ!』という感動である。『これはリアルなんだ!』という感動は、高校入学後、TN 先生の指導を受けた時に感じた夢が現実となった実感の現れと捉えられよう。そして発話は展開し「だから幸せだと思いますよ、ぼくは」において、その音楽経験が、現在の語り手にとっての幸せを説明する内容として、結び付けられていくのである。

よって A-1 の発話を通じて読み取れた、現在の自己について音楽経験の意味づけは「憧れの吹奏楽部に入り、3年間の生活をやりきることができた自分は、幸せ」である。

<発話 A-2 について>

発話 A-2

「演奏会でいろんな曲を演奏して、挨拶をする時にやっぱり、大歓声とか拍手を受ける時の気持ち良さとあと誇らしさっていうのはあの当時でしか味わえなかった。なんか胸張って堂々と立てる。で、アンコールかかるじゃないですか。で、アンコールかかって、アンコール曲やって、で、最後にまたありがとうございますって言って、また、みんなでその、聴いている人達にむかってお礼を言うんですけど、それで、ばーって終わって、幕がさがって、それから地獄なんですけど。そこからすぐに移動があるんで、楽器を片づけて、掃除をしなければいけないんですよ。で、ステージの掃除だけじゃなくて、客席の掃除も。その一瞬だけなんです。満足は。幕がしまったらやらなければいけない。それはねえ、今はもう、俺、このためにやってるんだな、というのがあったんです」

A-2 は、A が、Y 高校吹奏学部在籍当時に、全国各地をまわった演奏旅行についての発話である。演奏前後の移動や掃除は「地獄」のようだったが、ステージに立った時の大歓声と拍手、それに対して感じた気持ち良さと誇らしさについて「あの当時でしか味わえなかった」と振り返られている。ここに、現在の語り手にとって、「あの当時」に味わった感情が貴重なものとして大切に感じられていることがうかがえる。

よって発話 A-2 において読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「全国トップの吹奏楽部メンバーとしてステージに立った時、人生に二度とない気持ち良さを味わった」である。

<発話 A-3 について>

発話 A-3

「それは、その後も、あの厳しい練習に一応3年間、耐えたんだから、少々ことは耐えられんだろう、というのはずっとありました。だから起業する時もそれはあったと思います。起業する時に、今から思えば怖いもの知らずで、その勢いだけでやったんだけど、その勢いというのは自分の自信、持っていた自信、そういうものを持っていたのでやってこれたというのはあったなあと思う」

「あの厳しい練習に耐えた3年間」は、過酷な練習と理不尽な上下関係を強いられた、Y 高校時代の吹奏学部での生活のことである。どれだけの厳しさだったのかについては、A のトランスクリプトから、途中でやめずに、3年間の活動をやりとげた理由について語られている箇所を確認することで、想定できる。その内容は「やめたかったり、逃げたかったりするの、日常茶飯事だったんですけど、親の反対を押し切ってきたというのもあって、俺、ここでやめたら、俺、なんだろう、何のために Y 高校に来たんだろう(中略)全否定されちゃうわけですよ、やめたら」というものであり、A にとって、高校時代の吹奏楽部での経験がいかにも、極限的な厳しさに耐えた日々であったことが推測されるのである。

発話 A-3 では、この「厳しい練習に耐えた3年間」の経験が「少々ことは耐えられる」自信につながった経験として意味づけられていく展開が読み取れる。さらに、起業や経営についてのエピソードを通じて、「少々ことは耐えられる」自信が、現在の語り手においても通じていることが語られているのである。

よって発話 A-3 において読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「高校の吹奏楽部での練習生活に屈しなかったことで、試練に耐えられる自信になった」である。

<発話 A-4 について>

発話 A-4

「私はトップレベルだったよと。全然、個人のスキルからしたらトップレベルじゃないんですけどね(笑)」

既に述べてきたように、Aは全国トップの実力を誇るY高校の吹奏楽部に在籍していた。「私はトップレベルだったよと」には、そのことが含意されていると考えられよう。しかしながら、発話の後半は逆説的に展開され、「個人のスキルからしたらトップレベルじゃないんですけどね(笑)」となる。その際、会話後半の時制は現在であることから「トップレベルじゃない」という解釈は、現在の語り手によることがうかがえる。

よって、発話 A-4 において読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「高校の吹奏楽部活動を通じて、音楽的才能の限界を認識する」である。

②考察

以上、4つの抽出した発話を対象に、音楽経験を語り手がどのように意味づけているのかに着目し分析してきた。結果、意味づけの内容はそれぞれ「A-1. 憧れの吹奏楽部に入り、3年間の生活をやりきることができた自分は、幸せ」「A-2. 全国トップの吹奏楽部メンバーとしてステージに立った時、人生に二度とない気持ち良さを味わった」「A-3. 高校の吹奏楽部での練習生活に屈しなかったことで、試練に耐えられる自信になった」「A-4. 高校の吹奏楽部活動を通じて、音楽的才能の限界を認識する」であった。

これら4つの意味づけは、語り手Aにおける二つの側面の自己のもとになされていると考えられる。

一方は、A-4から導かれる、演奏する側面における意味づけである。A-4では自身の音楽的才能の限界を認識しているという考えにおいて音楽経験を意味づけており、それは、高校卒業以降は楽しむことに主眼をおいて音楽と関わってきた、自身の音楽スタイルを間接的に肯定しているよううかがわれる。

もう一方は、A-1、A-2、A-3において見出された、内的基盤を生成する側面における意味づけである。この側面は、あらゆる生活における立場、多様な人生の側面に共通する自身の生き方や価値観、考え方それ自体に向き合う側面の自己である。具体的には、やり切ったという満足感や、人生に残る気持ち良さを味わった実感、そして試練にたえられる自信の獲得といった、自己の内面形成に、音楽経験が影響していることを見出している。

すなわち A は、音楽経験の意味づけによって、演奏者としての自己のあり方を再確認しつつ、音楽経験によって及ぼされてきた内面に対する肯定的な影響を見出していると言える。A にとっての音楽経験の意味づけは、自身の人生の様々な側面に対し影響を受けた経験として音楽経験を捉えていく思考の営みであると言える。

(2)B の事例

およそ 25 年間、時に中断しながら、ギタリストとしてバンド活動をしてきた B の語りからは、7 箇所が発話が抽出された。以下より、抽出した発話ごとに、語り手が音楽経験を意味づけた内容について記述する。

①分析結果

<発話 B-1 について>

発話 B-1

「楽器は身近ですね、確かに。ギターは家にまずあって触れたっていうのが大きいですね。はじめてギターやりたいて思った時には父親のクラシックギターを持ちながら長渕剛を弾いて、長渕と違うなあ、あんな音でないなあって。弦が全然違うので」

発話 B-1 は、生まれ育った家庭における音楽との関わりについての内容である。「(ギターを)触れたっていうのが大きい」というのは、育った家庭においてギターが身近だったから、現在もギターを弾き続けている可能性が大きいという解釈である。数ある楽器の中でギターを手に取り、今も弾き続けている理由に、父親のギターに小さい頃から気軽に触って、身近に感じていたことが、結びつけられている。

よって B-1 の発話を通じて読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「家にギターがあったから、ギターを弾くようになった」である。

<発話 B-2 について>

発話 B-2

「父親なんであんまりだし、(父親は)あんまり(楽器を)やってなかったんで。逆にぼくが今けっこうやってるんで、子どももそれ見ながらやりたいてことはありますね」

B の父親は楽器を所有していたが、実際に B に演奏を聴かせたり、弾き方を教えたりす

るということはなかったという。「父親なんであんまりだし、(父親は)あんまり(楽器を)やってなかったんで」からは、幼少期におけるそのような父親との音楽的な関わりを十分に評価していないことが読み取れよう。そしてだからこそ、Bは自身が父親の立場となった今、子どもの前であえてギターを弾いてみたり、バンドに誘って参加させたりしているのである。Bは、そういったくいま・ここ>の振る舞いを、かつての父親とは「逆」だとして結び付けている。

よって、発話 B-2 において読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「父親の振る舞いを反面教師に、ギターを子供の前で積極的に弾いている」である。

<発話 B-3 について>

発話 B-3

「大学 2 年生の時の定期演奏会。米米 CLUB のコピーバンドやったんですよ。で、さっきの話とちょっと絡むんですけど、そんなにギターうまくなくて、あの、サークルの中にほんとうまい人いっぱいいて、先輩も後輩も、で自分には、この演奏で聴かせるとか、そういうところで表現するの、たぶん難しいなと思ったんですよ。でも、演奏して楽しい、お客さんも喜んでるっていうのを一番感じたのはそのバンドだったんですね。そんなにこう、大勢でやったけど、何度も定期演奏会でましたけど、一番盛り上がったのが、その会で、お客さんも楽しんで、自分たちも楽しくて、そんなにみんなうまいわけじゃないんだけど、お祭りっぽく楽しめて。あ、俺、これやりたかったんだなって思ったんです。で、人を楽しませる、人も一緒に楽しめる、一体感があそこに生まれて。で、実はこの話、この就職の面接でも話してて、だからそういう仕事したいんですって話。それができるのがこの職場」

B-3 の発話は、高校以降はバンドを組んで活動し、特に大学時代を中心に、たくさんの定期演奏会やライブに参加してきた B にとって忘れられない出来事である、大学二年生の時に経験した定期演奏会についての内容である。B はこのステージを通じて「俺、これやりたかったんだなって思った」瞬間があったことを語っており、ここに、自身の価値観を発見したことが読み取れる。そして、その価値観を見出したかつての自己と、現在の語り手における自己とが、「それ(やりたいこと)ができるのがこの職場」によって結びつけられているのである。

よって、発話 B-3 において読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「大学時代のサークルの定期演奏会の成功を通じて、みんなと一緒に楽しめる空間作りが好きな自分に気づいた」である。

<発話 B-4 について>

発話 B-4

「米米の話(B-3 で語られている定期演奏会の話)じゃないですけど、表現、表現ってやっぱ人はどう感じるかなんだよねってことは全てに言えるなってこと。ビジネスでも夫婦の会話でも子供に対しても。それはなんか、音楽やって、ね、つまらなそうに聴いてる時もあるし、あ〜すげ〜ってずっと楽しんでる時もあるし。何が違うんだろうと思うと、こっちの考え方なんです。だから自分ではそうだなって思ってるのが、さっきの米米 CLUB の経験で。お客さんに聴かせる、お客さんがどう思うかが大事。演奏している方の気持ちよりもお客さんが大事だと僕は思ったんです、音楽って。もちろん自分で弾いて気持ちいいのもあるんですけど、聴かせて感動させてなんぼっていうのが音楽だと思うんで、そうすると、聴き手がどう思うか、選曲も、楽器の選び方も、場所もってというのが...あの、仕事選びもそうですし、今でも会議とかミーティングとかでも一緒だなと思う」

「米米の話じゃないですけど」は、B-3 で語られたエピソードを指している。B-3 で語られたエピソードとは、高校・大学時代のバンド活動を通し、何度となく本番で演奏し、いいステージ、いい演奏を模索し続け、成功体験を米米 CLUB のコピーバンドでのったステージで味わうというストーリーラインを伴った経験である。そして、その経験全体を通して得られた気づきが、現在の語り手としての自己にとっても有効であることが「ビジネスでも夫婦の会話でも子供に対しても」や「仕事選びもそうですし」から読み取ることができよう。

よって、発話 B-4 において読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「大学時代のサークルの定期演奏会での試行錯誤を通じて、人がどう感じるかが大事だという考えにいたっている」である。

<発話 B-5 について>

発話 B-5

「(ステージに)出たときの緊張感の楽しみ方っていうか、最初はみんな緊張するんだけどやってくるとだんだん盛り上がってくるよねってことを繰り返すと、会議とかセミナーとか人前でしゃべるとか、でるってことに対して恐れないようになる。もしくはそこから楽しむ、人前で話すことを楽しめるようになる」

発話 B-5 は、バンド活動を通じて何度も人前に立つ経験を重ねてきたことが、日々の生活において人前に立つ際の役立つスキルにつながっているという内容で、現在の語り手によって、その意味が捉えられていることが明らかである。

よって B-5 の発話を通じて読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけている

ことは「人前での演奏を積み重ねてきたことによって、しゃべることや、でることに対して恐れないようになっている」である。

<発話 B-6 について>

発話 B-6

「高校でバンドやってたこととサークル。ジャズとかだけじゃなくて、なんでもいいよっていうジャンルの、サークルに入ったので、先輩、後輩、同期、いろんな人がいろんな音楽を定期演奏会で発表して、あれかっこいいな、なんというんだろうって、CD 買ったりとか。自分の視野を広げるという意味では、友達というのは大きかったと思います。高校の時は同級生で、最初はクラスの友達で、あの、ギターやってるってことも知っていて、僕もギターやって、聖飢魔II好き。じゃちょっとやろうよ、でもほかの楽器いないよねっていうと、クラスに友達いるから集合とかいって、バンドをやることで初めて知り合う。大学のサークルは固定で組まずに、定期演奏会ごとにあれやりたいんだけど誰かできる人いない？つって、俺もやる、みたいな。大学のサークル、人材がプールされている感じなんですよね。なので、やったことないなっても、ちょっと手伝ってよって言われると、嫌々ながらやると、けっこういいじゃん、自分じゃ聴かなかったけどいいね、みたいな。音楽との出会いの場でした。学びは非常にあったと思います。だから今、大人になると、それがなくなっちゃったのは自分でも良くないなあと。(中略)昔聴いていた曲をよく聴いたりとか、好きなジャンルは固定されちゃったり。危機感がありますね。だから今でも、昔みたいに雑誌買わなきゃいけないのかな、とか思います」

発話 B-6 も、高校大学時代のバンド活動に関する内容である。B は、メンバーみんな曲を仕上げていく形態のバンド演奏を続けてきたことに加え、メンバーを固定せずいろいろなメンバーとグループを組んで演奏してきた自身の歩みについて取り上げている。そして、その過程において様々な音楽仲間との出会いがあった結果を、現在の語り手において自覚される音楽的な視野の広がり結びつけて語っている。

よって B-6 の発話を通じて読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「高校、大学のバンド仲間との出会いやつながりを通じて、音楽的な視野が広がった」である。

<発話 B-7 について>

発話 B-7

「彼(ギターの先生)は同い年だったんですけど、高校の時から同じような曲を聴いてて、同じようなタイミングで始めたのに、めちゃくちゃうまくなって、セミプロでやってるんですね。それを聞くと、自分はどこでこう道を間違

ったっていうか(笑)、ギターの練習の仕方が違ったのかなとか。ギターを極めるっていうか、ギターをちゃんと弾いていく上での、演奏者としての影響を受けた気がします。音楽の幅が増えたというよりも、演奏者としての。どういう風にするとうまくなるかとか、どうすると聴かせられるかとか。(中略)だから自分は趣味でやっていこうと」

B は、勤め先にギターが上手な同僚が多かったことをきっかけに、30代半ばのおよそ3年間、同じ年齢の指導者にギターのプライベートレッスンを受けており、上の発話はその経験についての語りである。Bのギターは基本的に独学で、正式な教育を受けたのは、この時が初めてだった。また、プライベートレッスンをやめた以降も現在に至るまでは、教育は受けていない。Bは、社会人になってギターを習った経験について「ギターを極めるっていうか、ギターをちゃんと弾いていく上での、演奏者としての影響を受けた」と語り、演奏者としての自身のレベルを知った経験として捉えられている。具体的には「どこでこう道を間違ってたっていうか(笑)、ギターの練習の仕方が違ったのかなとか」とあるように、指導者との間にある歴然とした差を突き付けられたことによって、プロの道ではなく「自分は趣味でやっていこう」にあるように、現在の語り手の考えを決定づけられていることが語られている。

よって B-7 の発話を通じて読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「**同年齢のギタリストに習った経験を通じて、趣味でやっていくことを決める**」である。

②考察

以上、7通りの抽出した発話を対象に、語り手が音楽経験をどのように意味づけているのかに着目し分析してきた。結果、意味づけの内容はそれぞれ「B-1. 家にギターがあったから、ギターを弾くようになった」「B-2. 父親の振る舞いを反面教師に、ギターを子供の前で積極的に弾いている」「B-3. 大学時代のサークルの定期演奏会の成功を通じて、みんなと一緒に楽しめる空間作りが好きな自分に気づいた」「B-4. 大学時代のサークルの定期演奏会での試行錯誤を通じて、人がどう感じるかが大事だという考えにいたっている」「B-5. 人前での演奏を積み重ねてきたことによって、しゃべることや、でることに対して恐れなくなっている」「B-6. 高校、大学のバンド仲間との出会いやつながりを通じて、音楽的な視野が広がった」「B-7. 同年齢のギタリストに習った経験を通じて、趣味でやっていくことを決める」であった。

これらの結果からは、語り手 B の場合、四つの側面の自己に対し音楽経験を意味づけていることが導かれる。

第一は、B-1、B-6、B-7 から導かれる、演奏を続ける側面における意味づけである。B-1 ではギターを続けてきたことについて、B-6 では音楽的な視野を広げてきたことについて、B-7 では趣味で演奏を続けていく決断について、それぞれ音楽経験を意味づけている。よって三者とも共通して、演奏者としての現在の B 自身のあり方について、音楽経験から受けた影響に基づき、説明している、

第二は、B-2 から導かれる、子育てをする側面における意味づけである。B-2 では、ギターを弾いてくれなかった父親を反面教師に、わが子には意識的にギターを弾いて聴かせているという内容が語られている。すなわち子育てに向き合う自身の横顔に、幼少期の父親との関わりが影響していることを見出している。

第三は、B-5 から導かれる、働く側面における意味づけである。B-5 では、セミナーや会議といったシーンにおいて、人前で演奏を積み重ねてきた経験での気づきを活用していることが語られている B が働く立場にたつ自己の側面を有しているからこそ、音楽経験の意味づけと言えよう。

第四は、B-3 および B-4 から導かれる、内的基盤を生成する側面における意味づけである。B-3 では価値観の発見、B-4 では考え方の形成について、これまでの音楽経験から受けた影響を見出していることがわかる。

これらの内容をまとめると、B は、音楽経験の意味づけによって、演奏者としての自己の歩みを確かめつつ、仕事や子育てにおける具体的なふるまい対して、あるいは人生全体に対し、様々な影響を音楽経験から受けてきたことを見出していることがうかがえる。

(3)C の事例

幼少期に習い始めたピアノ学習をはじめ、作曲、バンド活動、吹奏楽、オーケストラと、幅広い形態で、演奏を続けてきた C の語りからは、6 通りの発話が抽出された。以下より、抽出した発話ごとに、語り手が音楽経験を意味づけた内容について記述する。

①分析結果

<発話 C-1 について>

発話 C-1

「社会人生活をして、週に 2 日しか休みがない中で(コントラバスの練習を)やるって言ってもなかなかうまくいかない時期があって、そうしたらそうこうしているうちに、凄く仕事が忙しくなっちゃって、土日も含めてすごいずっと仕事のこと考えてた時期ができちゃって、もうこのままだとちょっと僕ダメになるなと思って。20 代、入社 3 年

目くらいでした。で、なんかもう駄目だなと思って、でも、どうせ忙しいんだったらもうちょっとやってもいけんじやないかなって、変な思考が働いたことがあって、で、オーケストラやっちゃえて入っちゃったんです。そしたらオーケストラの練習の時間はどうしても音楽をやることになって、結果的には、その時間があるからじゃあ、そのために早くいろいろ終わらせないといけないなとほかのところにも影響がでてきて。やっぱり、週に3時間や4時間は仕事を離れて、音楽に集中する時間ができて、結果的にはやっぱり仕事とは別に音楽の時間ができるっていうのがいい影響を及ぼすんですね」

発話 C-1 においては、社会人になってオーケストラを再開した経験と、バランスを崩しかけていた心身の状況を立て直せたことが明確に結び付けられて、語られている。そして、ここに見出された音楽経験の意味が、現在にも通じていることが、語りの展開から読み取れる。具体的には「結果的には、その時間があるからじゃあ、そのために早くいろいろ終わらせないといけないなとほかのところにも影響がでてきて」という過去の時制での語り「3時間や4時間は仕事を離れて、音楽に集中する時間ができて、結果的にはやっぱり仕事とは別に音楽の時間ができるっていうのがいい影響を及ぼすんですね」という流れで、現在の時制への語りとなっているのである。実際 C は、社会人3年目でオーケストラを再開して以降ずっと、現在にいたるまで20年近く活動を継続していることがわかる。

よって C-1 の発話を通じて読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「社会人のオーケストラ活動によって、メンタルのバランスが保たれる」である。

<発話 C-2 について>

発話 C-2

「ピアノは長いことやっています。弾けないです、残念ながら。ピアノはあんまり得意じゃないんですよね、なんでだろう。まだやっぱり、開き直りっていうか、なんかね、ピアノやってた時期が、僕の音楽に対する接し方がちょっと違ってたのかもしれない。きっちり弾かないといけないという意識が強すぎてあんまり楽しくなかった。だから、僕の基礎、基礎にはなっていると思う」

ピアノをはじめ、作曲やバンド、吹奏楽、オーケストラと、C がこれまでに経験してきた音楽活動の幅はかなり広い。C 自身は、そうした様々なジャンルや形態の音楽を楽しむことができたことに対し、幼少期から高校二年生まで続けていたピアノ学習の経験を意味づけている。具体的には、ピアノ学習の経験を、他の音楽活動経験と比較し「きっちり弾かないといけないという意識」が強かった半面、学習要素の強い経験として整理したうえで

「だから、僕の基礎にはなっていると思う」と、展開しているのである。この場合の基礎は、音楽を楽しむ上での基礎という意味であろう。

よって C-2 の発話を通じて読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「**幼少期から始めたピアノが、音楽活動の基礎になっている**」である。

<発話 C-3 について>

発話 C-3

「自分がこう、こんなでいいのかなって作った曲で。やっぱりちょっと、自分で聴いても、100点だったかっていうと微妙な感じではあったんですけど、でも、やっぱり、発表している日が決まっていると、そこに合わせてやっていかなきゃいけないわけで。完全独学ですよ、一応、楽典の本とか読んだんですけど...(笑)でもなあって感じ、ほんと、見様見真似。でもまあ、聴いてもらって、拍手してもらおうという経験というのは、やっぱりこれで次もやろうかなっていう気になるわけですよ。だから、それは、いろんなところで、こう、自分が書いた文章を読んでもらうとか、自分が書いたプレゼンを聴いてもらうとかって時に役立っていると思います」

発話 C-3 は、C が独学で作った曲を初めて人前で演奏した経験について語られた箇所である。作曲はずっと独学で、発表作品も決して納得のいく出来栄ではなかったが、思い切って人に聴いてもらった結果、次へのやる気へと繋がった。C は、この経験を、現在の自己をとりまくビジネスシチュエーションに役立つ経験として結びつけている。

よって C-3 から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「**仕上りの状態に関わらず、自分の作品を演奏した経験を通じて、発表機会を重視する考え方が養われた**」である。

<発話 C-4 について>

発話 C-4a、C-4b、C-4c

4a 「まあ、今思うと本当に気合いが入った先生だったんです。で、その先生も毎回、定期演奏会のたびに一曲ずつ自分の曲を書いて発表するっていうことをやってたんですよ。ていう、それも今思うと、すごい、組織を率いる、音楽の世界でこうだよってところは影響ありましたよね」

4b 「世界的に著名なフィルの TS さんが言うから説得力があるところがあって。やっぱりなんかすごく僕は勉強になったなど。そういう指揮者の先生との出会いっていうのはいろいろありますよね」

4c 「中学 2 年生の時に、吹奏楽部の部長さんになった部長さんがいて、その人、今でも音楽系の仕事をやってるんですけど、その人が部長になった途端に部の雰囲気すごいガラッと変わったことがあって。やっぱりこういう風にや

ろうっていう。その人自身、音楽性がちゃんとある人で、なるほど、一人の力でこんなに変わるんだなって思ったことがありました。それはすごいなと思いました」

発話 C-4a,C-4b,C-4c はいずれも、印象的なリーダーとの出会いがもたらされた音楽経験についての語りであり、明らかに共通の意味が読み取れる内容であるため、発話 C-4 としてグルーピングし、分析結果をまとめて記述する。中学高校時代の吹奏楽部のリーダーや、大学以降のオーケストラ活動を通じて出会った指揮者の先生の指導の仕方やふるまいから、組織マネジメントに関する観点において影響や学びを受けたことについて語られている。そして、組織マネジメントに関する問題意識は、経営の立場にある、今現在の C によるものであろう。

よって発話 C-4 から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「オーケストラや吹奏楽部のリーダーから、組織の率い方について学んだ」である。

<発話 C-5 について>

発話 C-5a,C-5b

5a 「聖飢魔Ⅱで、デーモン閣下、けっこうああいいうインテリっぽいところがあるので、やっぱり社会に対する考え方というのは勉強になったし、やっぱり何よりも人と違うことをやる大切さというのと、人が何と言おうとね、自分の信じる道を行くというところがわりと僕としては勉強になった。やっぱり、こう、不安になることとかもあった時に、割とデーモン閣下は、いろんなところで、神に頼るのと、自分の心に聞きなさいということ、けっこう言っていて、僕はなんかね、わりとそれはね、なるほどと、結構勇気づけられてた、説得力があるんじゃないかと。だから僕も、散々みんなから言われながらも自分の道を貫いていて、そういう影響はすごく大きいと思いますね」

5b 「中学二年生くらいに、そういう X とか聖飢魔Ⅱに出会って、そこでのいろいろ学ぶことがあると思うんですね。それは社会に対しても、大人になる過程で、特に X-JAPAN は、ああいいう気合いが入ったバンド。初期は気合いが入ったバンドだったんで、でも、僕はあの姿勢に学ぶところがあって、自分の限界を自分で決めてしまっはいけないというか、限界はもうないというか、結果的にみるとあったんですけどね、Xには、でも最初の勢いってすごいな、デビューアルバムでこんなにやっちゃっていいのかな、と。え〜とね、僕が中学二年の時だったと思うんで、そうですね、89年か90年。強烈でした。紅白とかも最初はすごかった。最初は一番...やっぱり人間って努力したらこういうことができるんだっていう原体験になったと思うんです」

発話 C-5 は、中学時代に夢中になった、聖飢魔Ⅱと X-JAPAN についての内容である。なお発話 C-5 は、C-5a,5b から成っている。5b の冒頭に「X(X-JAPAN)とか聖飢魔Ⅱに出会っ

て」と語られているように、Cにとってこの二者との出会いは同じ位置づけであるため、C-5aとC-5bをグルーピングした。

Cは、聖飢魔IIやX-JAPANへの憧れをきっかけに、中学高校時代に作曲を独学で試み、バンドで演奏していた。聖飢魔IIやX-JAPANに夢中になった経験は、大人になる過程で必要な学びを得た経験として捉え、聖飢魔IIからは人に何と言われようと自身のオリジナリティを追求することの大切さを、X-JAPANからは努力すればなんでもできるという確信を、それぞれ受け取ったと解釈している。そして、聖飢魔IIとX-JAPANから受け取ったものが、現在のCの生き方に結びつけられていることが「だから僕も、散々みんなから言われながらも自分の道を貫いて」から指摘できよう。

よって発話C-5から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「中学時代に聖飢魔IIやX-JAPANと出会った経験を通じて、信念が形成された」である。

<発話C-6について>

発話C-6

「吹奏楽やオーケストラはやっぱりチームプレーだと思うんですよね。で、チームで一体となってやった時の喜びっていうのは、それはやっぱりね、一人でやった時の喜びの何倍にもなる。会場、結構、埋まるんですよ、アマチュアの社会人オーケストラでも。1000人以上、お客さんが拍手してくれる、あの拍手を聴いた時の感動...それは何者にも代えがたいものがあります。やっぱり、チームでやると、こう、自分の思いどおりの演奏ではないこともけっこうあって、それで、一緒にやってる人がなんだかわからないんですけど、音程をすごく高めにとる人で...(笑)それでも、音程が合わないなってずっと怒ってて、こないだ聞いたんですよ、他の人に。その人と弾いてる他の人に、どう思いますか、と。高すぎると思う、あれはって言ってたから、よかった自分だけじゃなかったって思って(大笑)。それはよかったんですけど。けっこう、なんていうか、そういういろんなことありつつも、最後、本番を迎えて一つになってという経験というのは、それは会社を、僕も個人でやるよりは、会社でみんなで頑張ってるっていう気持ちになるのはそういうところなのかな、と」

発話C-6では、中学高校時代に経験した吹奏楽の活動や、大学生になって以降続けてきたオーケストラ活動といった、集団体制での音楽活動経験について語られている。Cは、思い通りにいかないことも含めて、仲間と向き合いながら、本番を迎えて一つになった時に感じる一体感には大きな喜びがあるとし、そのことについて「何者にも代えがたいものがあります」と語られていることから、現在のCにも通じていることが明らかである。

よって、発話C-6から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは

「チームプレーだからこそ味わえる気持ち良さは、何物にも代えがたい価値がある」とする。

②考察

以上、6通りの抽出した発話を対象に、語り手が音楽経験をどのように現在の自己に意味づけているのかに着目し分析してきた。結果、意味づけの内容はそれぞれ「C-1. 社会人のオーケストラ活動によって、メンタルのバランスが保たれる」「C-2. 幼少期から始めたピアノが、音楽活動の基礎になっている」「C-3. 仕上がりの状態に関わらず、自分の作品を演奏した経験を通じて、発表機会を重視する考え方が養われた」「C-4. オーケストラや吹奏楽部のリーダーから、組織の率い方について学んだ」「C-5. 中学時代に聖飢魔IIやX-JAPANと出会った経験を通じて、信念が形成された」「C-6. チームプレーだからこそ味わえる気持ち良さは、何物にも代えがたい価値がある」となった。

これらの結果からは、Cの場合、3通りの側面の自己に対して音楽経験を意味づけていることが導かれる。

第一は、C-1、C-3、C-4 から導かれる、働く側面に対する意味づけである。具体的には、C-1では、働く上でのメンタルバランスが保てていることについて、C-3では、発表機会を重視する自身の仕事姿勢について、C-4では、組織の率い方を学んだことについて、音楽経験が意味づけられていた。これらの内容からは、音楽経験が働き方に影響している、あるいは音楽経験を仕事に活かしているというCの解釈が読み取れよう。

第二は、C-2から見出される、演奏する側面に対する意味づけである。C-2では、作曲や吹奏楽、オーケストラなど、多様な音楽活動を楽しめる演奏者としての自身の状態について、幼少期のピアノ学習経験をその要因として意味づけ、語られている。その内容は演奏者としての自身の成長を捉えたストーリーと言えよう。

第三は、C-5およびC-6から見出される、内的基盤を生成する側面に対する意味づけである。具体的には、C-5においては信念の形成について、C-6においてはチームプレーが好きな価値観の発見について、音楽経験の影響を見出している。

これらの内容をまとめると、Cは、音楽経験の意味づけによって、特に、働く自己のあり方や考え方に対する音楽経験の影響を見出していることが指摘できる。たとえば、音楽経験による形成への影響が見出された内的要素も、信念の形成や、チームプレーを好む志向性の発見など、職業行動との関連が予測される内容である。

(4)D の事例

幼少期から高校 1 年生まで続けていたピアノを音楽経験としての基軸としつつ、小学校から高校までの部活動は一貫して吹奏楽部、大学時代はバンド活動、そして今はリコーダーアンサンブルでバスパートを担当する D の事例からは、5 通りの発話が抽出された。以下より、抽出した発話ごとに、語り手が音楽経験を意味づけた内容について記述する。

①分析結果

<発話 D-1 について>

発話 D-1

「ある程度のところができるようになったので、やればできるというのが、自信にもつながった。だから何だろう、一つ突き抜けると、ほかのところにも...一番、最後にショパンの木枯らしのエチュードを弾いて...あれを普通に弾けるようになったところでやめちゃった。(中略)ピアノでいえば、最後に弾いたショパン、ショパンが弾けたというのはとても嬉しかったです。難しい曲を弾いてみたかった。ああいう聴くからに難しい曲を弾けるんだという自分でありたかった。あれを弾けた時の満足感はずごく高かった。やりきった感もあったと思います」

発話 D-1 においては、D が幼少期から高校一年生までの 12 年間ピアノを習い続け、最終的には難しい曲を弾ける自分でありたいという夢をかなえたというサクセスストーリーとしての音楽経験の話題が展開されている。そして、夢をかなえた経験は自信となり、人生全体に影響する自尊感情へと結び付けられていることが「一つ突きぬけると、ほかのところにも...」の語りから、明確に読み取れるのである。

よって、発話 D-1 から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「憧れの曲が弾けるようになるまでピアノを続けた経験を通じて、どんなフィールドでも、やればできるという自信がついた」である。

<発話 D-2 について>

発話 D-2

「リコーダーの楽しさは初めてわかりました。ほんと楽しいかと、今までにない楽しさだと。どんなに忙しくてもリコーダーには時間をつくります。優先順位をあげますよ。その時は仕事の面倒なことも忘れられて、いいリフレッシュになっています」

D は 4 年前から、リコーダーアンサンブルのメンバーとして、バスリコーダーを担当して

いる。発話 D-2 においては、その練習活動が、仕事のリフレッシュ活動として捉えられていることが読み取れよう。そして「リコーダーには時間をつくります」は、現在の D の意見であることが明確である。

よって、発話 D-2 から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「**社会人のリコーダーアンサンブルの活動が、仕事のリフレッシュになる**」とした。

<発話 D-3 について>

発話 D-3

「目的がとにかく、本番があるとはっきりするので、そこではとにかく金賞をとりたいといった目標があるので、そのために必要な練習はこういうことなので、だからこうしようとか。そういう頭の使い方ができたんですよ。だからそういう癖が付いていますね」

発話 D-3 は、高校時代の吹奏楽部での経験についてである。D は、高校の吹奏楽部でユーフォニウムを担当し、県大会での金賞受賞を目標に、活動していた。D は、高校時代の吹奏楽部での活動を通じて、目標にむけて計画的に努力する頭の使い方ができたとし、それが、現在も癖として残っていると解釈している。

よって、発話 D-3 から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「**高校時代の吹奏楽部での経験を通じて、目標に向けて計画的に努力する癖が身についた**」である。

<発話 D-4 について>

発話 D-4

「合奏にしてもピアノにしても、全体の体系でひとつのまとまりじゃないですか。技術的にはもちろんこまかいところをほるのでしょうけれど、いろいろこまかいところをほった上で、まとまったものを創るというイメージなんですね。だから仕事でも、生活しながら新しいものを考えたりする時にも、こんなイメージ。全体的に考えだす発想の仕方が音楽に似ている。譜面をみて練習している時は楽しくないけれど、海の歌みたいに、こんな曲を演奏したいというイメージが先にあると、そのために必要なことをやるっていうか、うまく伝えられないんですけど」

発話 D-4 は、何か新しいものを仕上げていく場合の発想のプロセスと、曲を仕上げていく時のそれとを結びつけ、共通性を見出していく内容である。D はまず、たとえ話として、高校の吹奏楽部で県大会に出場していた他校が演奏していた「海の歌」を仕上がりのイメー

ジとしても持ちながら「海の歌」に取り掛かった際の、練習にある楽しさを取り上げている。そしてこの、合奏やピアノにおける曲を仕上げていくという観点が、現在の生活や仕事の場面で「新しいものを考えたりする時」にも活かされると述べている。

よって発話 D-4 から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「新しく発想をする時に、演奏を仕上げていく感覚を応用している」である。

<発話 D-5 について>

発話 D-5

「ピアノを弾いていたことが、仕事にすごく役に立っています。パソコンのキーボード、早くというか押す力とか関係ないし、すごく難易度が低いと思うんだけど、自分が何かアイデアを思いつくと手が勝手に動いてくれる。すぐに出てくれるから、人よりも長く考える時間がとれている。そこはアドバンテージであり、ピアノをやっていなかったら、そうはなっていなかった。アイデアと画面が直結している感じです。それは技術面ですごく有利です」

発話 D-5 では、ピアノを弾いてきた経験について「仕事にすごく役に立っています」と述べられており、過去のピアノ学習の経験が、現在の職業行動に結びつけられ、意味が見出されていることが明確である。具体的には、パソコンのキーボード入力をする際には、運指の練習で培われた指先の操作能力の高さが手伝われて、アイデアを練ることに自身の思考力を集中させることができるように捉えられている。

よって発話 D-5 から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「ピアノの運指練習のおかげで、パソコンのキーボードタッチが楽」である。

②考察

以上、5つの発話箇所を対象に、音楽体験を語り手がどのように現在の自己に意味づけているのかに着目し分析してきた。その結果、音楽経験の意味づけの内容はそれぞれ「D-1. 憧れの曲が弾けるようになるまでピアノを続けた経験を通じて、どんなフィールドでも、やればできるという自信がついた」「D-2. 社会人のリコーダーアンサンブルの活動が、仕事のリフレッシュになる」「D-3. 高校時代の吹奏楽部での経験を通じて、目標に向けて計画的に努力する癖が身についた」「D-4 . 新しく発想をする時に、演奏を仕上げていく感覚を応用している」「D-5. ピアノの運指練習のおかげで、パソコンのキーボードタッチが楽」である。

これらの結果から、D は、語り手における2つの側面に対して音楽経験を意味づけていることがうかがえる。

一方の側面は、D-2 および D-5 から導かれる、働く側面の自己である。D-2 は、仕事のリフレッシュができていないこと、D-5 ではパソコンスキルの高いことに、それぞれ音楽経験の影響を見出しているといえよう。両者からは、業務の質向上に対し、音楽経験が有効に働くという D の解釈がうかがえる。

もう一方の側面は、D-1、D-3、D-4 が集約される、内的基盤を生成する側面の自己である。具体的には、D-1 ではやればできるという自信、D-3 では目標達成にむけて努力する癖づけ、D-4 では自分なりの発想法の確立、がそれぞれ音楽経験によってなされたという D の解釈が読み取れる。

D は、音楽経験の意味づけを介し、D における今ある自信や発想力、目標にむけて努力する力など、主に内面の形成や発達に対して音楽経験の影響を見出していることが読み取れる。業務の質向上においても音楽経験が有効に働くことを認識している。一方、演奏する自己のあり方に対し、音楽経験を意味づけていない点は、D の特徴として指摘される。

(5)E の事例

大学時代の軽音部での活動経験について多く語られていた E の事例だが、大学時代の活動のほかにも、小学生の頃に習っていたピアノ、高校時代の吹奏楽部、大学卒業後の有志でのバンド活動、そして大人になって以降独学で弾いているピアノなど、様々な音楽活動を経験している。E の事例からは、4 通りの発話が抽出された。以下より、抽出した発話ごとに、語り手が音楽経験を意味づけた内容について記述する。

①分析結果

<発話 E-1 について>

発話 E-1a,E-1b,E-1c

E-1a「ミュージシャンとか歌手とかのマネージャーとか、 会社は少ないですが、私、 科だったんで 笑、私のほうがまとも(笑)。みんな留年ばかり 笑。私はプロになるとかは考えたことがなかったです。あんまり才能ないなって、音楽は(笑)」

E-1b「作曲もしましたけど、あんまりやっぱり才能ないなと。どっちかという姉貴のほうが」

E-1c「ピアノについてはそこに上達したいという思いがあります。でもなんか、結局、最初小学校の時に習っていたつまらなかったというのは、やっぱりそこを楽しむ才能がなかったのかな、という気がして」

発話 E-1 では、明らかに共通した内容が確認された 3 つの発話箇所をまとめている。E-

1a,E-1b,E-1c ではすべて、ピアノをはじめ、高校時代の吹奏楽、大学時代の軽音サークル、作曲と、人生を通し経験してきた様々な音楽活動を振り返る中で、音楽的な才能には長けていないという現在の自己認識について語られている。

よって発話 E-1 から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「作曲、バンド、ピアノ、いずれにおいても、音楽的な才能の限界を認識する」である。

<発話 E-2 について>

発話 E-2

「(高校時代の)プラスバンドって、みんなで合わせていく楽しさを知ることができたかな、と。演奏がというよりも、関わりがですね。(中略)できたての吹奏楽部なので楽器も十分じゃないし、その中で補完し合いながらやるじゃないですか。その中で自分たちなりの演奏の仕方っていうのができるんだなという。それまでは小学校の時にピアノをやっただけだったので、誰かと一緒にがなかった。みんなと一緒にやるっていうことを体験できたっていうのが、音楽の一体感、男子校だったんで、男同士、みんなで集まってやるっていうのがなかったし、水泳部っていうのは個人競技だったんで、やっぱりあんまりね、みんなでやるっていうのがなかったなかで、みんなでやって、みんなで合わせて、というのが、今までになかった。それを体験できたのがすごく重要だった」

発話 E-2 では、高校時代の吹奏楽部での経験を通じて、みんなでやる、一緒に合わせるということが楽しいということに気づいたことについて、語られている。発話には「演奏が、というよりも関わりが」とあるように、立ち上がったばかりの部で、楽器の数や種類など練習環境が整っていない環境だったからこそ、仲間同士の一体感がより強くなったということが読み取れる。加えて、それまでに経験してきたスポーツや音楽が個人プレイのスタイルだった E にとって、吹奏楽部での活動はみんなと一緒に目的の達成を目指していくというのは新しい試みであったからこそ「それを体験できたのはすごく重要だった」として、現在の価値観にも結びついていることが読み取れる。

よって発話 E-2 から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「高校時代、できたての吹奏楽部での活動を通じて、みんなで創り上げていく楽しさを知った」である。

<発話 E-3 について>

発話 E-3

「そういう意味では、会社で仕事なんかする時にも役立っていますよね。使っているんだと思うんだけど、知らず知

らずのうちに...いやその、抽象的なものをある程度、なんとなく、わかりやすいような形にするとか、たとえば話にするとか、そういうようなことは音楽の経験があるからできるんじゃないかと思います。聴く耳が持てる、聴いて共感ができる、それに対してアドバイスができる。ある程度、相手がわかってもらえたんだって思ってもらえるレベルのリプライができる...結局さ、ビジネスも抽象的なこといっぱいあるじゃない、それを論理的に、わかりやすく、できるだけ多くの人がおなじようにしていくって、けっこうそれって難しくって...それをやるトレーニングってわけじゃないけど」

発話 E-3 は、大学時代の軽音部での経験をふまえて語られた内容である。「そういう意味では、会社で仕事なんかする時にも役立っていますよね。使っているんだと思うんだけど、知らず知らずのうちに...」と語られているのは、E が、ライブステージなど定期的に人前で演奏をしていた軽音部時代の経験を、現在の働く自分に結びつけ、意味づけているのである。E は、大学の軽音部活動の中から、ステージでの演奏を重ねている側面に着目し、客席との共有感がある演奏を模索する経験として捉えている。一方、ビジネスのシーンには、抽象的なことを、いかにわかりやすく、相手に伝え、リプライをするという課題が常にあると捉えている。すなわち E-3 では、過去の音楽経験と、今あるビジネス活動との共通性を見出す形で、現在の自己に対し音楽経験を意味づけていることがわかる。

よって発話 E-3 から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「客席と音楽を共有できる演奏の模索を通じて、抽象的なことをわかりやすく伝え合い、リプライできるようになった」である。

<発話 E-4 について>

発話 E-4

「その時何を学んだかって考えると...それは結構役に立っていて、音楽、けっこうそんなにレベルは高くないんだけど、つくっていくプロセス、曲作ったりアレンジして、同時に人をよんで、仲間を集めて、仕上げていくって言う一つのプロセスっていうのは、会社にもあって、商品開発のプロセスとほぼ近い、というか同じ。あと、創造、クリエーションしていくって、そういうことでは共通点は非常に多く、会社に入って、そういうことやる上でも、その時のやってきたことが役に立ったかなあという実感があります。吹奏楽は一年だけだったから、軽音の時ですね」

発話の内容は、E-3 同様、大学の軽音部での活動経験に関するものである。定期的に催されるライブステージを仕上げていくという面から大学の軽音部での活動経験を捉え、ステージを仕上げていくプロセスと、E が携わる商品開発のビジネスプロセスとに共通性を見出

している。すなわち、軽音部での経験を、働く現在の自身の状況へと結びつけている。

よって発話 E-3 から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「ライブを仕上げていくプロセスでの学びが、商品開発に活かされている」である。

②考察

以上、4つの発話箇所を対象に、音楽経験を語り手がどのように意味づけているのかに着目し分析してきた。その結果、音楽経験の意味づけの内容はそれぞれ「E-1. 作曲、バンド、ピアノ、いずれにおいても、音楽的な才能の限界を認識する」「E-2. 高校時代、できたての吹奏楽部での活動を通じて、みんなで創り上げていく楽しさを知った」「E-3. 客席と音楽を共有できる演奏の模索を通じて、抽象的なことをわかりやすく伝え合い、リプライできるようになった」「E-4. ライブを仕上げていくプロセスでの学びが、商品開発に活かされている」であった。

これらの結果から、Eは、3つの側面の自己に対して音楽経験を意味づけていることが明らかである。

第一に、E-1 から導かれるのは、演奏する側面の自己に対する意味づけである。E-1 は、過去に経験してきた様々な音楽に関わる出来事を通じて、音楽的な才能に長けていないという現在の自己認識にいたっていることが読み取れる。

次に、E-3 と E-4 から見出されるのは、働く側面に対する意味づけである。E-3 では、ビジネスにおいて有効なコミュニケーションスキルが鍛えられたことについて、E-4 では、商品開発に活用できる創造的な考え方を身につけていることについて、それぞれ、過去の音楽経験を結び付けている。すなわち E の場合、働く自己のあり方や考え方に対する音楽経験の影響を見出していることが明らかと言える。

E-2 においては、内定基盤を生成する側面の自己に対する意味づけが解釈される。すなわち「みんなで創り上げていく楽しさを知った」という自身の考え方が育った理由に、音楽経験の影響が見出されているのである。「楽しさを知った」は、いわば価値観の発見であり、様々な生活領域や人生の側面に通じる内面性の形成に、音楽経験の影響が結びつけられて考えられていることがわかる。

以上の内容をまとめると、Eの音楽経験の意味づけからは、Eが音楽的な自身の才能の限界を感じつつも、自身の価値観の形成や、仕事において役立つ学びや考え方の獲得において、音楽経験が肯定的に影響していることについて自覚していることが読み取れる。

(6)F の事例

中学一年からギターを習い始め、ベースをメインに、時にはギターでバンド活動に没頭してきた F の事例からは、5 通りの発話が抽出された。以下より、抽出した発話ごとに、語り手が音楽経験を意味づけた内容について記述する。

①分析結果

<発話 F-1 について>

発話 F-1

「スキルって、ほら、音楽とかスポーツやってる人ってわかると思うけど、繰り返し繰り返し反復練習をしてできるようになるじゃない。どんな仕事も最初からできるわけない。ちゃんと繰り返し反復練習をして、自分のものになっていく。まあ、難しい 16 分の音符だって、一年練習すればできるようになる。まあ、めげない、めげない(笑)。そこは感情を抜きにして、反復練習すればできるようになるんだよね。だから、こういうことやりたいと思っても、難しいけど、反復すれば...できないんだったら、しかるべき行動をとってないんだなと思う」

F の音楽活動は主にバンド活動であり、中学一年生から、途中のブランクはありつつも、今に至るまでずっと、ギターとベースを弾き続けてきた。「難しい 16 分音符だって、一年練習すればできるようになる」や「感情を抜きにして、反復練習する」というのは、時間をかけ、繰り返し練習を続けてきた音楽経験の道のりにおける一側面を捉えていることが読み取れる。そして、その経験が、現在の考え方に結びついていることが「どんな仕事も最初からできるわけない」や「できないんだったら、しかるべき行動をとってないんだなと思う」という語りから明らかである。

よって発話 F-1 から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「時間をかけて上達したギターやベースの経験を通じて、練習を繰り返し重ねればできるようになるという考え方を身につけている」である。

<発話 F-2 について>

発話 F-2

「正直、悩みました。プロのミュージシャンというのは職業的にどうなんだろうなあと。まあ、プロになりたい、行きたがってる奴はいた。さっき言ったプレスリーが好きだったボーカルにはプロになろうよって誘われたけど...まだ高校生だったし...でも正直、今振り返ると、頑張って、人生かけてもよかったのかな、と思う。でも明らかに下手だったし」

トランスクリプトを参照すると、中学高校時代のバンド活動経験には、プロへの登竜門として知られるイーストウエストコンテスト¹²⁷への挑戦をはじめ、プロのミュージシャンとしての将来を視野に入れつつ、その道には進まない決断くださったという側面が読み取れる。F-2は、その内容をふまえての発話箇所である。語り手である現在のFは、その当時について、「人生かけてもよかったのかな」としたうえで「でも、明らかに下手だったし」と振り返っている。

よって発話 F-2 から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「プロを視野にいれた挑戦した経験を通じ、プロのミュージシャンになるには下手という自己判断をした」である。

<発話 F-3 について>

発話 F-3

「今もクラシックギターは弾かないけど、でも、あれ(ギター教室でのクラシックギター学習)をやっておいてよかったと思うよ。とにかく応用がきくのよ。そこから発生しているから。感覚的には、クラシックギターさえ弾ければ、ベースもできるし、アコギもできるし、エレキもできるし、ちょっとほら、少しずつあれはちがうけど、根っこは同じだから、最初に習ったのは大きかった」

中学の入学祝いにもらった商品券を片手に出かけた CD ショップで、アースシェイカー (EARTHSHAKER) と出会った F は、ギターに強烈な憧れを抱いた。そこで、両親に懇願し通わせてもらったのが、ギター教室である。F は、バンドを結成した後も、およそ 3 年間、教室に通い続けた。発話 F-3 からこそ、クラシックギターを習った経験があるからこそ今、エレクトロニック系、アコースティック系、様々なギター類の楽器はあまり苦勞することなく演奏ができると捉えていることがわかる。

よって発話 F-3 から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「独学でギターを始めず、教室に通って基礎を習ったおかげで、今、様々なタイプのギターが弾ける」である。

¹²⁷ 日本楽器製造(ヤマハ)東京支店の主催により、1976年から1986年にかけて年1回行われたアマチュアバンドのコンテスト。コンテストの優勝グループの中には現在のサザンオールスターズ、エレファントカシマシなどが挙げられ、著名なアーティストを多く輩出した。<https://ja.wikipedia.org/wiki/EastWest> accessed October 29, 2017

<発話 F-4 について>

発話 F-4

「多分、説明しにくいけど、音楽をやったことによって、ビジネスにすごいつながっている。発想とか...説明しにくいんだけど、努力じゃなくて、アートな世界。新しいビジネスを起こすのはアートな世界。努力をしつつ、うん、アート以外の何物でもない。そういうことを考えつくのは、音楽をやってたから、そうなったんだと思う。発想の仕方とか、うまく説明しにくいんだけど、俺の中に明確にある。音楽をやっていたことがビジネスで発想する部分と、仕事って誰かと協調して、でも、その中で自分のやりたいことを伝えるというのもあるし...戦いつつも仲間みたいな。それは音楽をやることによって生まれてくる新しい発想。なんだろうな、今までこうやってきたからこれからもそうですよ、ではなくて、どんどん良くしていこうよとか。地道にスキルを学ぶということと、新しい発想、アートの部分、今までないものができるっていうことを、音楽をやって学んだと思う。うまく言えないんだけど。

発話 F-4 における「音楽をやった」は、中学以降、長年にわたって続けたベースとギターによるバンド活動経験のことである。発話においては「説明しにくい」としながらも、それらの音楽経験が、ビジネスをする現在、自身の発想力に結びついていると語られている。長年にわたるバンド活動の経験には「誰かと協調して」「自分のやりたいことを伝える」「どんどん良くしていこう」「地道にスキルを学ぶ」といった要素があり、さらにそれらが掛け合わさることで「生まれてくる新しい発想」のある音楽活動が成立する。すなわち F-4 で語られた音楽経験は「今までないものができる」ということを学んだ経験であり、だからこそ、新しいビジネスを起こしてきた現在に活かされているのである。

よって発話 F-4 から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「音楽を追求してきたことによって、ビジネスで発想する力が養われた」である。

<発話 F-5 について>

発話 F-5

「ピアノはやってたんだけどね、子供の頃。小学生低学年の頃、そうそう、嫌で嫌で。小学一年二年くらいで、ほんとに2~3か月くらいでやめちゃった。家にアップライトがちゃんとあって、よっぽど俺にピアノをやらせたかったんだらうけど、嫌で嫌で、家出をしてやめた。なんか先生が怖かった記憶がある、ちゃんと覚えていないけど。なんでやめたのかなあ...でもねえ、そんなこと(大人になって大事だとわかること)わからないよね。もうちょっと楽しくて続けたいよ、子どもが楽しい場所をつくるべきだよ。楽器はなんでもいいけど、音楽が楽しいって思える環境をつくってあげたいよ。音楽はやっぱ楽しくないといけないと思うのね、特に子どもの時は」

発話 F-5 では、小学生の低学年の時期に嫌々ピアノを習わされていた経験を通じて「音楽はやっぱり楽しくないといけない」という考えにいたっていることが読み取れる。具体的には子どもへの音楽教育に思いをめぐらせ「楽しくて続けたくなる、子どもが楽しい場所をつくるべき」と語られている。特に「音楽が楽しいって思える環境をつくってあげたいよ」は、現在、一児の父親である F の視点が感じられよう。

よって、発話 F-5 から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「小学生の時に嫌でやめたピアノの経験から、楽しんでこそ音楽という考え方にいたっている」である。

②考察

以上、5つの発話箇所を対象に、音楽体験を語り手がどのように現在の自己に意味づけているのかに着目し分析してきた。その結果、音楽経験の意味づけの内容はそれぞれ「F-1. 時間をかけて上達したギターやベースの経験を通じて、練習を繰り返し重ねればできるようになるという考え方を身につけている」「F-2. プロを視野にいれた挑戦した経験を通じ、プロのミュージシャンになるには下手という自己判断をした」「F-3. 独学でギターを始めず、教室に通って弾き方を習ったおかげで、今、様々なタイプのギターが弾ける」「F-4. 音楽を追求してきたことによって、ビジネスで発想する力が養われた」「F-5. 小学生の時に嫌でやめたピアノの経験から、楽しんでこそ音楽という考え方にいたっている」である。

これらの結果からは、F は、4つの側面の自己に対して音楽経験を意味づけていることが明らかとなった。

F-1 から見出されたのは、内的基盤を生成する側面の自己に対する意味づけである。F-1 では、練習を積み重ねれば、いつか必ずできるようになるという自信が養われたことについて、音楽経験の影響を見出していることが読み取れる。

F-2 および F-3 から見出されるのは、演奏する側面の自己に対する音楽経験の意味づけである。F-2 ではプロのミュージシャンにはなれないという自己認識にいたっていることや、F-3 では様々なギターを弾ける応用力を身につけていることの背景に音楽経験を結び付けている。これらの語りは、演奏を続けてきた自身のあり方が、様々な音楽経験の影響を受けて決定づけられていると解釈されていることがわかる。

F-4 は、働く側面の自己に対する音楽経験の意味づけである。F-4 ではビジネスに役立つ発想力が、音楽経験によっていかに養われているかについて語られており、音楽経験が仕事に役立っていることについて実感を有していることがわかる。

よって発話 G-1 から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「幼少期における強制的な ██████████ 練習を通じて、忍耐力と集中力が身についた」である。

<発話 G-2 について>

発話 G-2

「一時間でも、僕には大変でしたよ。でも、練習は裏切らないというか、そういうのは身についているんでしょうね。自然に。勉強にしても仕事にしても、頑張っていれば、いつかできるというか、そういう訓練というかね、それは非常によかったなど。結果として、そういうのはすごく良かったと思いますね。別にそれ目的でやっていたわけではなかったけれど」

発話 G-2 も、G-1 同様、幼少期から中学二年生までの期間、強いられていた ██████████ 学習についての語りである。嫌々ながらも練習を積み重ねてきた経験は、結果として、頑張っていればいつかできるようになるという現在の考え方の形成につながったと捉えている。「練習は裏切らないというか、そういうのは身についているんでしょうね」からは、幼少期における ██████████ 経験に対し、現在の G の視点から意味づけがなされていることが明確である。

よって発話 G-2 から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「幼少期から積み重ねてきた ██████████ 練習によって、頑張ればいつかできるようになるという考えが身についた」である。なお、発話 G-1 同様、G-2 においても、頑張ればいつかできるようになるという考え方が反映されるシチュエーションについての具体的な限定はなされていない。

<発話 G-3 について>

発話 G-3

「それ ██████████ を経験したのではっきり言って ██████████
██████████
██████████
██████████ に比べれば全然楽勝。人の感性で判断、点数が決まらないじゃないですか。これはなんとかなるというのがどっかしらにあったんで、毎日 10 時間勉強しました」

発話 G-3 の冒頭における「それ」というのは、
3 年間のことである。G は、その 3 年間を通じて、努力ではどうにも乗り越えられない、生まれ育った環境や生まれ持った感性が左右する目標と、努力でかなえられる目標があることを知ったとしている。そしてその経験があったからこそ、たとえば現在の職業であるの試験にも「要は努力すればなんとかなるよ」という姿勢でのぞめ、結果につなげられたことが語られている。

よって発話 G-3 から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「人の感性が評価に関わるの世界で勝負した経験を通じて、努力で何とかなら達成できる自信ができた」である。

<発話 G-4 について>

発話 G-4

「嫌々やってたというのがあるから、それを少しでも思いをさせたくないというのと、あと超一流とかだともう 6 歳位から始めたというのがあるんですね。だから、なるべく本人がやりたいって言いだしても一年くらい様子見て、本当にやりたいのかを確認してからやらせたほうがいのかな、と。(中略)自分みたいな経験はやっぱりあまりさせたくないし。まあ、やりたいといえば、ちょっと様子見てからやらせよう」と

発話 G-4 は、G-1 や G-2 同様、幼少期学習についての語りである。嫌々やらされていた苦痛な経験が、わが子に対して音楽教育を施す、現在の判断基準につながっている。具体的には「嫌々やってたというのがあるから、それを少しでも思いをさせたくない」や「自分みたいな経験はやっぱりあまりさせたくない」とう語りから、幼少期の経験が、わが子への音楽教育の方針につながっているのが明らかであろう。

よって発話 G-4 から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「幼少期の学習を反面教師に、子供には、を強制しない」である。

<発話 G-5 について>

発話 G-5

「音楽とかが楽しいんだよってことを伝えられる人になれたら楽しいだろうなって思います。そうですね、自分で弾きもするけれど、教える、大人にもそうだけど、今まで習ってきたことを人に教えられたら、自分も楽しいし、楽しい人生ですね。でも迂闊にできないというのもわかるので。たまに、たまにね、やっぱり恐れ多

いというか、自分が嫌な経験をしているので、迂闊には教えられないなというのがあります。責任重大だから」

発話 G-5 も「嫌な経験」としての幼少期の [] 学習をもとに展開されている語りである。発話 G-5 は、嫌々やらされていた苦痛な経験が、現在の音楽教育に対する問題意識を醸成していることが読み取れる。具体的に、G は、 [] の楽しさを伝える教育の重要性について、 [] 立場から主張し、自らその問題の解決に関わる意欲を語っていることがうかがえよう。実際、発話においては「自分で弾きもするけれど、 []、自分も楽しいし、楽しい人生ですよ」や「迂闊に教えられないなというのがあります。責任重大だから」と語られるなど、 [] 具体的に教育改善に関わりたい想いがあることが読み取れる。

よって、発話 G-5 から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「幼少期の強制的な [] 経験を通じ、音楽教育への関心が生まれた」である。

<発話 G-6 について>

発話 G-6

「 [] に行って、自分の目で見て聴いて [])
確認できたというか、まあ、いい先生にも習えて、それでも自分がうまくならないというか、人に認められてなんぼじゃないですか、プロだと。というところで、認められないというのはしょうがないですよ」

発話 G-6 にある「いい先生にも習えて、それでも自分がうまくならない」というのは、G が [] やれるだけの努力をしたが結果的に音大への道が拓けなかったことから、プロとして生きていくのは難しいという認識にいたっている。そしてその認識が現在にも通じていることが「認められないというのはしょうがないですよ」という、過去ではなく現在を時制で語られているところから、読み取ることができる。

よって、発話 G-6 から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「 [] 経験を通じて、プロにはなれない自己認識ができた」である。

<発話 G-7 について>

発話 G-7

「 [] 最初から、Z 大しか行きたくないと、身のほど知らずだったんですけど、そういうつも

りで、結果的にはそれが良かったと思うんですけど...(中略)先生は『Z 大の試験、受けられるだけ用意できたんでもすごいよ』って言うけど、受からなきゃ意味ないし。やっぱり圧倒的に違うからね、Z 大では。用意する曲もそうだし、レベルもそうだし。なので、まあ、それは結果としてよかったと思う [] 言ったらそれまでの練習しかないし.....」

発話 G-7 においては、音大に行くという夢を果たせなかった現実を受け止めながらも、一方で、その過程においては妥協せずに全力で挑戦した面に着目し「結果的にはそれが良かったと思うんですけど...」「それは結果としてよかったと思う」と振り返られている。すなわち、結果はともあれ、夢にむかって全力で挑戦できた経験として、音大を目指した3年間 [] に対し、今も納得感を有していることが読み取れよう。

よって、発話 G-7 から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「行きたい音大に妥協せず全力で挑戦してよかった」である。

②考察

以上、7つの発話箇所を対象に、音楽体験を語り手がどのように現在の自己に意味づけているのかに着目し分析してきた。その結果、音楽経験の意味づけの内容はそれぞれ「G-1. 幼少期における強制的な [] 練習を通じて、忍耐力と集中力が身についた」「G-2. 幼少期から積み重ねてきた [] 練習によって、頑張ればいつかできるようになるという考えが身についた」「G-3. 人の感性が評価に関わる [] の世界で勝負した経験を通じて、努力で何とかなら達成できる自信ができた」「G-4. 幼少期の [] 学習を反面教師に、子供には、 [] を強制しない」「G-5. 幼少期の強制的な [] 経験を通じ、音楽教育への関心が生まれた」「G-6. [] 経験を通じて、プロにはなれない自己認識ができた」「G-7. 行きたい音大に妥協せず全力で挑戦してよかった」である。

これらの結果から、G は3つの側面の自己に対し音楽経験を意味づけていることがうかがえる。

第一に、G-1、G-2、G-3、G-7 から見出されるのは、内的基盤を生成する側面の自己に対する意味づけである。G-1 では、忍耐力と集中力が身につけていることについて、G-2 では頑張ればいつかできるようになるという考えを持っていることについて、G-3 では努力で何とかなら達成できる自信を有していることについて、幼少期の [] 経験や音大を目指して勉強していた経験が影響していると解釈している。また、G-7 は、全力で挑戦

することの大切さについて、大学を卒業した後に妥協せず音大受験を目指した経験を通じて認識したことを導いている。これら全て、いずれの内容においても、生き方の基底の部分に直結する内面性、考え方や価値観、生き方それ自体に対し、音楽経験が影響していることの実感が読み取れると言えよう。

第二は、G-5 および G-6 から読み取れる演奏する側面の自己に対する意味づけである。G-5 では、音楽教育への関心が、G-6 ではプロになれない自己認識が、それぞれ音楽経験によって育まれたと解釈されている。また、いずれの語りにおいても、現在のみならず、これからの演奏人生の展望についても触れられており、未来の演奏する自己のあり方に対しても、音楽経験の影響がおよんでいることが読み取れる。

最後、G-4 からは、子育てする側面の自己に対する意味づけが導かれている。嫌々やらされた幼少期の ████████ 学習の経験を反面教師として、わが子に対しては ████████ を強制しないという考え方が形成されていることについて語られている。

以上の考察より、G の音楽経験の意味づけからは、G が音楽経験に対し多様な角度から現在の自身に対する影響をみだしていることが読み取れよう。また、嫌々だった幼少期の ████████ 学習の経験も、かなわなかった音大入学を目指した経験も、共に語りを通じて、現在の G には、ポジティブな方向で意味づけられている点が、興味深い。また、G の場合、働く自己への意味づけがなされていないのが、他の事例と比較した際には、その特徴として捉えられる。

(8)H の事例

小学校から高校にかけては独学でギターを弾き、大学でブラックミュージックに開眼して以降はバンドのヴォーカルを 20 年以上続けてきた H の事例からは、3 通りの発話(H1~H3)が抽出された。以下より、抽出した発話ごとに、語り手が音楽経験を意味づけた内容について記述する。

①分析結果

<発話 H-1 について>

発話 H-1

「音楽は毎日聴いてきたので、聴感覚それ自体が鍛えられたというのはあると思います。たとえば複数台あるギターの音色を、ギターをみないで聴き分けることができたりとかね」

発話 H-1 では、時期や活動の形態を限定せず、長く続けてきた音楽経験全体を通じて、聴覚が鍛えられたことについての内容である。H は、音楽鑑賞を趣味とし、小学六年生でギターを弾きはじめ、社会人になって以降はバンド活動を 20 年以上続けている。

よって、発話 H-1 から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「長年の音楽経験によって、ギターの音色を聴き分けられる聴覚が発達した」である。

<発話 H-2 について>

発話 H-2

「(大学時代に)ブラックミュージックに開眼しました。ブラックというマイノリティの立場からレゲエミュージックを発信していった、そして世界に立ち向かっていったという姿勢に、感銘というか、共感というか、強いものをもらったんです。それからはもうずっと、ブラックミュージック一直線。寝ても覚めても音楽漬けの日々が始まってね... 結局、就職も■■■■の会社。音楽で人間形成をされたといっても過言ではないから...自分にとって近いも遠いも何もなくてはないもので...(中略)だから、当然、価値観も音楽に多分に影響されていると思いますね」

発話 H-2 からは、大学生になり「ブラックミュージックに開眼」して始まった「音楽漬けの日々」が、自己の価値観の形成に影響していることを語っている。H は、楽曲としてのブラックミュージックのみならず、ブラックミュージックの持つ文化的背景や思想にも強く感銘を受けている。そして「音楽によって人間形成されたといっても過言ではない」「価値観も音楽に多分に影響されている」「結局、就職も■■■■の会社」といった発話からは、そうした「音楽漬けの日々」の影響が、現在にも及んでいることが明確に捉えられよう。

よって、発話 H-2 から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「音楽によって、価値観が形成された」である。

<発話 H-3 について>

発話 H3

「特に素晴らしいと感じた音楽に対し、どうしたらこうできるのか、どうしたらこうなるのか、という風に、その背景に好奇心を持ち、研究して、再創造しようとする癖はあるのかなと思いますね。それは仕事にも、人生にも通じた自分の一貫した姿勢だと思います。なぜを考えること、なぜなのかが気になることはすごく多い。感動に対するなぜを知りたくなるんです。理由というか仕組みというか...

発話 H-3 では、H が社会人になって以降、20 年に渡ってボーカルを担当してきたバンド

活動経験の語りである。Hのバンドは、オリジナル曲よりも、著名なアーティストによる楽曲のコピー演奏をメインとしている。そしてHはその活動経験を通じて「感動に対するなぜ」を突き止め「再創造しよう」とする癖が身についていったと捉えているのである。そしてその癖は、現在の仕事や生活をはじめ「人生にも通じた自分の一貫した姿勢」として語られていく。

よって、発話 H-3 から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「音楽活動において感動の理由や仕組みを知り再創造する癖が、人生に一貫している」である。

②考察

以上、3つの発話箇所を対象に、音楽体験を語り手がどのように現在の自己に意味づけているのかに着目し分析してきた。その結果、音楽経験の意味づけの内容はそれぞれ「H-1. 長年の音楽経験によって、ギターの音色を聴き分けられる聴感覚が発達した」「H-2. 音楽によって、価値観が形成された」「H-3. 音楽活動において感動の理由や仕組みを知り再創造する癖が、人生に一貫している」である。

Hの場合、これら3つ内容がすべて、内的基盤を生成する側面の自己に対する意味づけである。H-1では聴感覚の発達、H-2では価値観の醸成、H-3では自身の発想や思考の癖の形成に対し、音楽経験の影響が見出されている。もっともその際、発想の仕方や価値観の形成といった内面への影響に加えて、聴感覚という身体感覚に近い側面においても音楽経験の影響を見出している点に、Hの特徴を指摘できるだろう。

(9)Iの事例

幼い頃から歌うことが好きで、生活の中にある歌う機会や歌を聴く機会に主体的な関わりを持ち、■年前からは社会人合唱団の一員として活動を続けているIの事例からは、2通りの発話が抽出された。以下より、抽出した発話ごとに、語り手が音楽経験を意味づけた内容について記述する。

①分析結果

<発話 I-1 について>

発話 I-1

「合唱の場合は、自分の声を合わせるとか、自分自身が他の人と合わせていけないといけないから、必然的に、集中

せざるをえない。(中略)合唱の時は何も考えていない、余計なビジネスのことを考えないので、まあ、やったからって問題は解決しないんですけど、集中してほかのことをやらないで、という状況を、具体的にも気持ち的にもできるっていう。(中略)合唱の時間で自分の気持ちがりセットされるというか、切り替えをパッパッパとやっていけるんで、自分の仕事の質があがったんじゃないかと思います」

発話 I-1 は、■年前から続けている社会人合唱サークルでの活動経験が語られた発話であり、社会人合唱サークルの活動が、自身の仕事の状態に改善につながっていることを語っている。具体的には「合唱の時間で自分の気持ちがりセットされ」ることで「問題は解決しない」けれども「余計なビジネスのことを考えない」時間が生まれ、結果として「仕事の質があがった」というストーリーである。■

よって、発話 I-1 から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは、「合唱で自分の気持ちがりセットされ、仕事の質があがる」である。

<発話 I-2 について>

発話 I-2a,I-2b

I-2a 「■

■合唱の活動を通じて、俺みたいな人がこんな有名な人の指導を受けちゃっていいのかなと、それはすごいなと思いましたね。実際、TR 先生だとか EN 先生とか SD 先生もそうだし、第九のパートリーダーをずっとくださった SG 先生とか、僕自身がそういった方にたとえばネットで調べて連絡しても練習なんてして下さるわけないから...今回の EN 先生の第九で感じたのは、グンとあがったなど。EN 先生の多才ぶりとコミットメントと、小学校の音楽室みたいなのところにも来てくれて、我々、遅刻してくる人間もいるというのに、お叱りの言葉も発せず...感動しながらやりました」

I-2b 「本当に素人集団のところになんか素晴らしい先生が来てくださって、少しでも良くしようとしてくださった先生の姿に感動しました。それだけやったださるんであれば...と。あとはオーガナイズをされている方々の力の入れようもすごかったので.....そういう方々も含めて、熱意があるというか、仕事は自分自身もやってる時は集中しているんでしょけれども、熱意を人に感じさせるとか、そこまでの人ってなかなかいないわけですよ」

発話 I は、2 か所の発話 I-2a および I-2b から成る。I-2a および I-2b 共に、合唱指導の先生方から受ける刺激や学びに、現在の I にとっての価値を見出しているという内容である。具体的には、合唱団においてリーダーシップをとる指導者の先生方の姿に、■

自身の姿を比較し、重ね合わせ、語っている。たとえば、発話 1-2a においては、指揮者の先生の組織に対するコミットメントの仕方について、発話 1-2b においては、指揮者の先生の熱意溢れる指導について、心が動かされている様子がうかがえよう。

よって、発話 I-2 から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは、「合唱活動を通じて出会った指導者の先生方の、組織を率いるパフォーマンスに、学びをえる」である。

②考察

以上、2つの発話箇所を対象に、音楽体験を語り手がどのように現在の自己に意味づけているのかに着目し分析してきた。その結果、音楽経験の意味づけの内容はそれぞれ「I-1. 合唱で自分の気持ちのリセットされ、仕事の質があがる」「I-2. 合唱活動を通じて出会った指導者の先生方の、組織を率いるパフォーマンスに、学びをえる」である。

I の場合、これら 2つの内容は両者共に、働く側面に対する音楽経験の意味づけと言える。具体的には、合唱活動によって仕事の質が高まり、合唱指導の先生からリーダーシップに関する学びが得られていることが認識されている。

すなわち I の音楽経験の意味づけからは、総じて、I が仕事の質の向上に対し音楽経験の影響を見出していることが読み取れよう。

(10)J の事例

幼少期にはピアノ、中学生時代は吹奏楽、高校以降は作曲とバンド活動をメインに音楽と関わってきた J の事例からは、3通りの発話箇所が導出された。以下より、抽出した発話ごとに、語り手が音楽経験を意味づけた内容について記述する。

①分析結果

<発話 J-1 について>

発話 J-1

「ドレドレとか腹筋で鍛えてとかリズム感とか、それは一生物だと思います。ちゃんと繰り返しやればできるようになるっていうのは、しみついてる。このフレーズができなかったのを、500回やったらできるようになるっていう経験は、他のことにも残るといっか...いつか絶対できるようになる。同じ繰り返しじゃなくて、ゆっくりやったり、早くやったり...っていうバリエーションでね。たとえば語学を身につけるにしても、これだけやるんじゃなくて、こっちからやったり、こうやったりっていう、体動かすことにもそれはどこかに絶対できるようになる方法はあるって

いう自信がある。できなかったことができるようになった時気持ちいい、というのが一生の感覚、と思います。仕事でもそう思う」

「ドレドレ」は、幼少期のピアノ学習経験に対する指示語であり、具体的には運指の基礎練習を積み重ねた経験を指している。同じように「腹筋で鍛えてとかりズム感」は、中学時代に所属していた吹奏楽部でトレーニングを繰り返した経験を指している。Jの所属していた吹奏楽部は、全国大会への出場を目指すスパルタな部活であり、実際、全国大会への出場も果たした。Jは、幼少期のピアノ学習経験と、中学の吹奏楽部での経験を「ちゃんと繰り返しやればできるようになる」「いつか絶対できるようになる」ことがしみついた経験として捉えており、その経験は仕事をはじめ、音楽以外の他の領域にも通用すると解釈している。努力すればできるようになるという自信は、人生のシチュエーションを限定することなく、様々な役割を持つ自己を支える内面性として機能すると考えられる。

よって、発話 J-1 から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは「中学の吹奏学部での活動や幼少期のピアノ学習で経験した繰り返し練習から、努力すれば必ずできるようになる自信が身についた」である。

<発話 J-2 について>

発話 J-2

「曲をつくる家だったのよ。父親は寡黙な人で音楽なんかやらないんだけど、母はそういう趣味の人だった。あたしの誕生日の歌とか...『J子、七歳の歌』とか、あるんですよ。『猫の歌』とか。あのね...(メロディを思いだし、そして歌い始める)<春の日うららかに 陽炎おどりだす 三月の終わり 私は生まれたの 8年の前のその時は 東京五輪に沸いていて 抱かれて見送った 聖火のリレー>という歌があるのよ。だから、何かあると、つくりたいなってしまうの。(中略)だから何かあればそのためにやるって感じ。母親の影響がありますよね。もちろん、もちろんあります、あります」

発話 J-2 では、生まれ育った家庭における音楽との関わり、具体的には曲をつくってプレゼントをしていたという母親との関わりについて語られている。演奏を続ける自身の人生にとっての原体験についての語りを展開されている発話箇所である。

Jは、母親に曲をプレゼントしてもらった経験と、現在の自身の音楽スタイルとを関連づけて捉えている。たとえば、結婚式や入学式など「何かあればそのためにやる」、すなわち、機会をみつけて曲をつくり、演奏をしているのには「母親の影響がありますよね。もちろん、もちろんあります」と解釈しているのである。

よって、発話J-2から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは、「曲をプレゼントする母親の影響で、自分も曲を作って演奏を続けている」である。

<発話 J-3 について>

発話 J-3

「全国大会で演奏して、背中が、ザワーッとしたの、気持ちよくて。40 数人で音出すでしょ、気持ちよくて。気持ちいいのは覚えてる。ザワーって。その時に味わった...わかるでしょう？ザワーって、鳥肌がザワーって。ない？素晴らしい演奏を聴いた時とかにもありますが、自分で弾いてってというのは初めてで。後にも先にもないですね。あのザワーッがもう一度ほしくて、音楽を続けている部分もあるかもしれない」

発話 J-3 では、中学二年生の時に出場した吹奏楽の全国大会での演奏にまつわる内容、具体的には、自分たちの演奏に鳥肌がたったエピソードについて語られている。その上で、その当時、演奏中に味わった感覚「鳥肌がザワーッ」は「後にも先にもない」と解釈し、「もう一度、その感覚を味わいたい」という想いが、今まで音楽を続けてきた要因に位置づけている。

よって、発話J-3から読み取れた、現在の自己について音楽経験を意味づけていることは、「全国大会で演奏した時の感動は、音楽を続ける要因に成りえる」である。

②考察

3か所の発話を抽出し、音楽経験を語り手がどのように現在の自己に意味づけているのかに着目し分析してきた。その結果、音楽経験の意味づけの内容はそれぞれ「J-1. 中学の吹奏学部での活動や幼少期のピアノ学習で経験した繰り返し練習から、努力すれば必ずできるようになる自信が身についた」「J-2. 曲をプレゼントする母親の影響で、自分も曲を作って演奏を続けている」「J-3. 全国大会で演奏した時の感動は、音楽を続ける要因に成りえる」である。

これら3つの意味づけの内容からは、語り手における2つの自己の側面が見出される。

まず、J-1 は、内的基盤を生成する側面の自己における意味づけである。努力すればできるようになるという自信を身につけていることに、音楽経験の影響が見出されていることが解釈されるからである。

一方、J-2 および J-3 から導かれるのは、演奏する側面の自己に対する意味づけである。具体的に、J-2 および J-3 では、J が生涯に渡って音楽を続ける理由が、音楽経験から導かれ

ている。母親との音楽を介した関わりと、中学の吹奏楽部時代に経験した全国大会でのステージが、今も曲をつくり、歌い続ける背景に結び付けられているのである。

よって、Jの音楽経験の意味づけからは、Jが、音楽を続ける理由や必然性を、これまでの音楽経験から見出していることが読み取れる。ただしその中でも幼少期および中学時代の学習経験については特別であり、努力すればできるようになるという考え方を形成した音楽経験として解釈している。

第3節 総合考察

本章では、音楽経験の意味づけがどのような思考であるのかを明らかにすることを目的に、10人の事例分析を行ってきた。本節では、それらの結果および考察をふまえ、総合考察として、以下の4点の指摘について論述する。

- ①音楽経験の意味づけられる自己の側面は、4通りに集約される。
- ②音楽経験の意味づけには、演奏者としての自己規定を促す機能がある。
- ③音楽経験の影響は、音楽に直接関わりのない人生の側面においても見出される。
- ④夢や目標の達成に重要な内面性の形成に、音楽経験が意味づけられている。

以降、①から順に、それぞれの指摘についての考察を記述する。

- ①音楽経験が意味づけられる自己の側面は、4通りに集約される。

本章においては、10人それぞれの事例分析に際し、語り手が具体的にどのような側面の自己のあり方や考え方に対し、音楽経験を意味づけているのかに着目して考察してきた。その結果、音楽経験が意味づけられる自己の側面は、4通りに集約されることが明らかとなった。具体的には【演奏する側面】【働く側面】【子育てをする側面】【内的基盤を生成する側面】である。

すなわち、10人の演奏を続けるMBAコース参加者は、大きく4通りの自己の側面における生き方や考え方に対し、音楽経験の影響を見出していると言えよう。各事例において、具体的に、どの側面の自己に対する意味づけがなされていたのかは、以下表3-2は、のとおりである。

【表 3-2 各事例において見出された自己の側面の構成と数】

事例(意味づけの数)	【演奏する側面】	【働く側面】	【子育てする側面】	【内的基盤を生成する側面】
A(4)	1			3
B(7)	3	1	1	2
C(6)	1	3		2
D(5)		2		3
E(4)	1	2		1
F(5)	2	1	1	1
G(7)	2		1	4
H(3)				3
I(2)		2		
J(3)	2			1

以下、4つの側面がそれぞれ、語り手における、どのような自己のあり方や生き方を示すものであるのかということと、その自己が、インタビューの場において引き出され、認識された要因について論述する。

まず【演奏する側面】についてである。【演奏する側面】とは、音楽に関わり続けてきた自己であり、演奏者としての自己、演奏する役割を有する自己である。すなわち【演奏する側面】の自己に対する音楽経験の意味づけがなされる場合、演奏を続けてきた自己のあり方や生き方、すなわち演奏者としての人生の側面に対して、音楽経験の影響が見出される。

【演奏する側面】は10人中7人の事例において確認される。【演奏する側面】に対する意味づけが多くなされているのは、調査協力者をエントリーする際、短くても10年程度の音楽経験を有しており、現在も演奏を続けていることを条件の一つに設定していることが主な理由として挙げられよう。よって、語り手は、音楽に関する経験的語り際に、演奏や音楽活動をする立場にある自己を無意識的に認識し、話題を豊富に展開していたことが想定される。

加えて、語り手と聞き手である筆者の関係は、同じ音楽同好会の活動に参加している演奏仲間であり、インタビューの機会に関わらず、日ごろから音楽を話題に会話することは多い。よって、インタビューの時も【演奏する側面】を互いの接点とすることで、コミュニケーションしやすかったことが、指摘できよう。

次に【働く側面】についてである。【働く側面】とは、仕事をする自己であり、まさしく社会人して社会的な役割を有する自己である。よって【働く側面】に対して音楽経験が意味づけられる場合は、働く自己としてのあり方や考え方、すなわち社会人としての人生の側面に対して、音楽経験の影響が見出されている。

【働く側面】は10人中6人の事例において確認された。すなわち半分以上の事例において【働く側面】の自己に対する意味づけがなされている。その要因にもまた、本研究における調査協力者をエントリーする際に設けた条件があげられるだろう。本研究においては、エントリー対象者をMBAコース参加者であることに設定している。よって、働くことへの問題意識や関心が比較的高い個人であることが想定され、よってインタビューにおいてもビジネスをする立場からの発信がなされやすかったことが想定される。

さらに、聞き手である筆者もまた、ビジネススクールの修了者であり、語り手がおかれた立場と共通するものがある。よって語り手と聞き手との間には、ビジネスについての興味や関心を共有している感覚が無意識のうちに芽生えていた可能性が高く、よってインタビューの場においても音楽経験が【働く側面】の自己において意味づけられ、語られやすい雰囲気があったと想定される。

【子育てする側面】は、家庭において育児をする側面の自己であり、親としての側面の自己である。よって【子育てする側面】において音楽経験が意味づけられる際には、親としてのあり方や考え方、すなわち親として生きる人生の側面に対する音楽経験の影響が見出されている。

3人の事例、B、F、Gにおいて【子育てする側面】に対する音楽経験の意味づけが確認されている。【子育てする側面】が確認された3人に共通するのは、子どもの年齢が小学生以下であり、生活において育児が占める時間的精神的割合が高いことが想定される。加えて、聞き手である筆者自身が育児する立場にあり、子どもの年代が小学生であることが、インタビューの場において発生する、対話的相互作用にも影響しているだろう。もっとも語り手と聞き手の間柄においては、家族ぐるみでの付き合いや、子どもを介したコミュニティの共有などが具体的になされたことはない。そういった影響をうけ【働く側面】や【演奏する側面】と比較し【子育てする側面】からは、音楽経験について語りにくかったことが想定される。

育児経験に関しては、もともと研究協力者のエントリー条件に設定していなかったものの、結果的には10人の語り手全員が育児経験者であった¹²⁸。もっとも、AやJの場合は、

¹²⁸ 育児経験の有無については、事前確認はしておらず、インタビューの話の流れの中で、あきらかになった。

インタビューの時点で既に子供が成人しており、また D、E、H の場合も、既に高校生や大学生である。このことから、A、J、D、E、H のように、実質的に子育てから手が離れている状況においては【子育てする側面】に対して音楽経験が意味づけられにくくなる可能性がうかがえる。

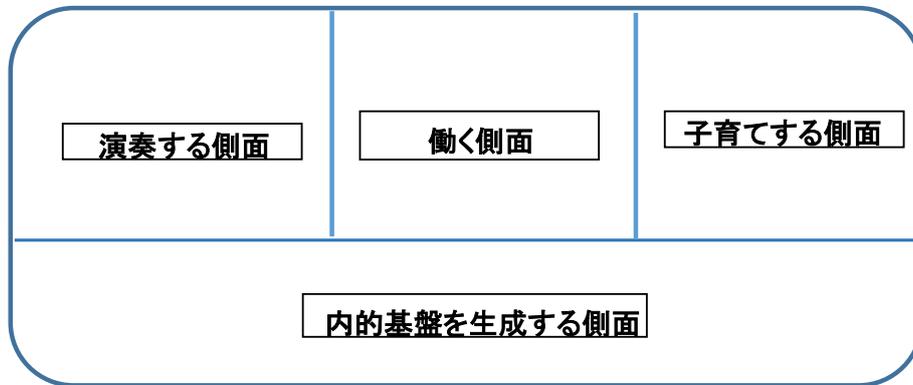
最後に【内的基盤を生成する側面】である。他の側面における意味づけと同様、【内的基盤を生成する側面】において音楽経験の意味づけがなされる場合も、自身の感じ方や考え方、価値観の認識や変容、形成に対する、音楽経験の影響が認識されているということがいえる。

【内的基盤を生成する側面】は、これまでに述べてきた側面とは質的に異なる側面である。【演奏する側面】や【働く側面】、【子育てをする側面】のように具体的な社会的役割や立場に基づく自己ではないため、人生を通じて担っていく様々な役割や立場において共通する内面性、価値観や考え方を生成している自己と規定した。すなわち、語りにおいては、語り手としての自己の一側面として位置づけられつつ、一方ではこれまでにあげた 3 つの側面を内的に支え、俯瞰するような機能を持つことが解釈される。

よって【内的基盤を生成する側面】における音楽経験の意味づけは、その内容によっては【演奏する側面】や【働く側面】【子育てする側面】における自己のあり方や考え方に、無意識的に反映されていくことが指摘されよう。そして【内的基盤を生成する側面】における音楽経験の意味づけとしての説得力は【演奏する側面】【働く側面】【子育てする側面】など、現在の人生の側面としての自己において通じることが実感されることによって、より高まっていくのである。語り手の自己の側面を表した図 1 を参照されたい。

【内的基盤を生成する側面】は、10 人中 9 人の事例で確認されている。その背景には、語り手全員が社会人学生という立場において学んできた経験があげられよう。学びの場によって培われた、自身の内面にある考えや価値観を、他者に表現する習慣が、インタビューの場においても発揮されたことにより、自己の内面についての語り積極的に展開されたと考えられる。

以上、インタビューを介して、音楽経験は多様な自己の側面に意味づけられることが見出された。そしてそれらは 4 通りに集約された。このように、異なる自己の側面に音楽経験は意味づけられている。このことから、音楽経験の影響が、多様な広がりをもって、様々な立場や役割を生きる人生の側面において見出されていることが導ける。



【図1 内的基盤を生成する側面とその他の側面の位置関係】

②音楽経験の意味づけには、演奏者としての自己規定を促す機能がある。

表3-2を参照すると、過半数の事例、具体的には10名中7名の事例において、【演奏する側面】について音楽経験が意味づけられていることが確認される。

本研究における研究協力者は、共通して全員、長期間にわたって演奏を続けてきているが、特に演奏家やミュージシャンといった肩書を有しているわけではない。演奏者という立場にある個人として社会的にみなされることは、日常的でないと考えられる。また熟達の程度に関する判断も難しい。DとEをのぞいて、専門的な音楽教育を受けた経験は確認されず、中でも、基本的に独学のスタイルで音楽と向き合ってきたBやEやF、一度も習った経験がないHは、客観的な評価を受けてきていない。

このように演奏者としての自己を規定する客観的な基準や社会的な立場の位置づけがない一方で、語りにおいては【演奏する側面】の自己が立ち現れているということからは、語り手としての自己において演奏する側面の自己、演奏者としての自身の歩みに目をむける自己が、内在していたことが暗に示されていると捉えられよう。そして、演奏者としての側面の自己が潜在的に内在している状況において、語りを通して音楽経験を意味づけていくことで【演奏する側面】の自己に対する意識が向けられ、演奏者としての自己が規定されていくというメカニズムが成立すると考えられる。

それでは具体的に、演奏者としての自己はどういった内容で規定されているのだろうか。ライフストーリーの研究は、これまであまり語られてこなかった人生の側面に光を当てる

ことを得意とする¹²⁹。ここでは、その特性を活かし、各事例において【演奏する側面】に対して、音楽経験がどのような内容で意味づけられているのかについて具体的に着目し、【演奏する側面】に意識がむけられた結果、どのように演奏者としての自己が規定されているのかについて着目する。

【演奏する側面】における音楽経験の意味づけが確認された7人の事例において、音楽経験の意味づけの内容をまとめたところ、以下の表3-3のようになった。そしてさらに、その内容に着目していくと、大きく3つの区分、《演奏者としての自己の能力や可能性における限界を認識させられた》《演奏者としての基礎固めとなった》《音楽を続ける必然性がある》に集約して説明される。(表3-4 参照)

【表 3-3 【演奏する側面】における音楽経験の意味づけ】

A	A-4. 高校の吹奏楽部活動を通じて、音楽的才能の限界を認識する。
B	B-1. 家にギターがあつて触れてから、ギターを弾いている。 B-6. 高校、大学の音楽仲間との出会いやつながりを通じて、音楽的な視野が広がった。 B-7. 同年齢のギタリストに習った経験を通じて、趣味でやっていくことを決める。
C	C-2. 幼少期から習ったピアノが、音楽活動の基礎になっている。
E	E-1. 作曲、バンド、ピアノ、いずれにおいても、音楽的才能の限界を認識する。
F	F-2. プロを目指すか迷いながらバンド活動をしていた経験を経て、プロのミュージシャンになる演奏レベルではないという自己判断に至っている。 F-3. 独学でギターを始めず教室で基礎を習ったおかげで、今、様々なタイプのギターが弾ける。
G	G-5. 音大入学が叶わなかった経験から、プロになれない自己を認識している。
J	J-2. 曲をプレゼントする母親の影響で、自分も曲を作って演奏を続けている。 J-3. 全国大会で演奏した時の感動が、今も音楽を続ける理由となっている。

【表 3-4 意味のまとまりで整理した【演奏する側面】における音楽経験の意味づけ】

<p>《演奏者としての自己の能力や可能性における限界を認識させられた》</p> <p>A-4. 高校の吹奏楽部活動を通じて、音楽的才能の限界を認識する。</p>
--

¹²⁹ 特に、高松(2007)のライフストーリー論においては、この点が積極的に強調されている。高松はライフストーリーと向き合うことについて「これまで語ってこなかったことに『光を当てる』作業」と定義する。(高松 2007, p.16, p.18)

<p>B-7. 同年齢のギタリストに習った経験を通じて、趣味でやっていくことを決める。</p> <p>E-1. 作曲、バンド、ピアノ、いずれにおいても、音楽的才能の限界を認識する。</p> <p>F-2. プロを目指すか迷いながらバンド活動をしていた経験を経て、プロのミュージシャンになる演奏レベルではないという自己判断に至っている。</p> <p>G-5. 音大入学が叶わなかった経験から、プロになれない自己を認識している。</p>
<p>《演奏者としての基礎固めとなった》</p> <p>B-6. 高校、大学の音楽仲間との出会いやつながりを通じて、音楽的な視野が広がった。</p> <p>C-2. 幼少期から習ったピアノが、音楽活動の基礎になっている。</p> <p>F-3. 独学でギターを始めず教室で基礎を習ったおかげで、今、様々なタイプのギターが弾ける。</p>
<p>《音楽を続ける必然性がある》</p> <p>B-1. 家にギターがあって触れてから、ギターを弾いている。</p> <p>J-2. 曲をプレゼントする母親の影響で、自分も曲を作って演奏を続けている。</p> <p>J-3. 全国大会で演奏した時の感動が、今も音楽を続ける理由となっている。</p>

一つ目の区分《演奏者としての自己の能力や可能性における限界を認識させられた》は、それぞれの音楽経験を通じて「プロになれない自己を認識する」「音楽的な才能に乏しい」「趣味でやっていくことを決める」など、5通りの意味づけの内容を集約する。二つ目の《演奏者としての基礎固めとなった》は、「今、様々なタイプのギターが弾ける」「音楽的な視野が広がった」「音楽活動の基礎になっている」など、3通りの意味づけ内容を集約した内容とした。三つ目は《音楽を続ける必然性がある》で、「今も音楽を続ける理由になっている」「演奏を続けている」「ギターを弾いている」など3通りの意味づけ内容がまとめられている。なお3通りのうち2通りがJにおける意味づけである。

事例ごとに、【演奏する側面】における音楽経験の意味づけの内容を統合的に読み込んでいくと、それぞれの語り手が、演奏者としての自己をどのように説明し、規定しようとしているのかが、解釈できる(表 3-5 参照)。

【表 3-5 事例別にみる【演奏する側面】における音楽経験の意味づけ】

A	「A-4. 高校の吹奏楽部活動を通じて、音楽的才能の限界を認識する」⇒《演奏者としての自己の能力や可能性における限界を認識させられた》
B	「B-1. 家にギターがあって触れてから、ギターを弾いている」⇒《音楽を続ける必然性を見出す》 「B-4. 高校、大学の音楽仲間との出会いやつながりを通じて、音楽的な視野が広がった」⇒《演奏者としての

	<p>基礎固めとなった》</p> <p>「B-7. 同年齢のギタリストに習った経験を通じて、趣味でやっていくことを決める」⇒《演奏者としての自己の能力や可能性における限界を認識させられた》</p>
C	<p>「C-2. 幼少期から習ったピアノが、音楽活動の基礎になっている」⇒《演奏者としての基礎固めとなった》</p>
E	<p>「E-2. 作曲、バンド、ピアノ、いずれにおいても、音楽的な才能に乏しい」⇒《演奏者としての自己の能力や可能性における限界を認識させられた》</p>
F	<p>「F-2. プロを目指すか迷いながらバンド活動をしていた経験を経て、プロのミュージシャンになる演奏レベルではないという自己判断に至っている」⇒《演奏者としての自己の能力や可能性における限界を認識させられた》</p> <p>「F-3. 独学でギターを始めず教室で基礎を習ったおかげで、今、様々なタイプのギターが弾ける」⇒《演奏者としての基礎固めとなった》</p>
G	<p>「G-5. 音大入学が叶わなかった経験から、プロになれない自己を認識している」⇒《演奏者としての自己の能力や可能性における限界を認識させられた》</p>
J	<p>「J-2. 曲をプレゼントする母親の影響で、自分も曲を作って演奏を続けている」⇒《音楽を続ける必然性を見出す》</p> <p>「J-3. 全国大会で演奏した時の感動が、今も音楽を続ける理由となっている」⇒《音楽を続ける必然性を見出す》</p>

たとえば B においては 3 つ、全ての区分における意味づけが確認される。そこから読み取れる B の演奏者としての自己規定は、演奏する自己の能力や可能性における限界は認識しつつも、楽器が身近な環境に生きてきた感覚と、これまでに培ってきた音楽的な基礎力を活かし、これからも演奏を続けていきたいという内容である。

それとは対照的に、C のように《演奏者としての基礎固めとなった》のみを、演奏者としての自己において意味づけている場合もある。C は、ピアノで習得した基礎によって、幅広く演奏活動を楽しめる状態にあるということによって、演奏者としての自己を規定しようとしていることが解釈されるのである。

③音楽経験の影響は、音楽に直接関わりのない人生の側面にも積極的に見出される。

考察①の表 3-2 を参照すると、10 人全員が、語りを通じて【演奏する側面】のみならず【働く側面】や【子育てする側面】といった、音楽と直接関わりのない側面の自己のあり方や考え方に対し、音楽経験を意味づけていることが確認された。言い換えれば、音楽経験を【演奏する自己】の側面にのみ意味づけている事例はなく、音楽と直接関わりのない側面の

自己に対し、それぞれ多様な観点から音楽経験を意味づけているのである。すなわち、演奏を続けてきた語り手は、音楽経験について、人生の様々な側面に対して影響を及ぼす経験として解釈していると言える。

さらにもう一点、D、H、Iの3名の事例のように、【演奏する側面】に対する音楽経験の意味づけがなされず、音楽に直接の関わりがない側面の自己に対してのみ音楽経験が意味づけられる場合もある。このことから、必ずしも、過去の音楽経験が、演奏者としての自己のあり方や考え方に対し、優先的に意味づけられるわけではないということが読み取れよう。それよりもむしろ、音楽に直接関わりのない側面における自己の行動や考え方に対し、積極的に影響が見出されていく場合があるということが確認できる。

序論における研究の背景や先行研究の項において記述したとおり、これまでの音楽に関する経験的語りの研究においては、演奏家としての成長や演奏技術の熟達に対し、過去の音楽経験がどう影響してきたのかということについて集中的に関心が寄せられてきた。しかしながら、本章の分析結果を通じては、音楽経験の影響が音楽に関わる人生の側面や活動に限定されることなく、多様に広がっていることについての示唆がえられる。

④夢や目標の達成に重要な内面性の形成に、音楽経験が意味づけられている。

考察①で記述した内容と一部重複するが、10名中、9名の事例において【内的基盤を生成する側面】に対し音楽経験が意味づけられている。このことは、音楽経験が、内面の発達や形成に緊密に意味づけられていることを示唆している。そこで具体的にどのような内面の発達や形成に対し、音楽経験の意味が見出されているのについて、以下より考察していきたい。以下表3-6は、各事例から【内的基盤を生成する側面】における音楽経験の意味づけの内容を取り出し、まとめたものである。

【表 3-6 各事例の【内的基盤を生成する側面】における音楽経験の意味づけの内容】

A	A-1. 憧れの吹奏楽部に入り、3年間の生活をやりきることができた自分は、幸せ。 A-2. 全国トップの吹奏楽部メンバーとしてステージ立った時、人生に二度とない気持ち良さを味わった。
B	B-3. 大学時代のサークルの定期演奏会の成功を通じて、みんなと一緒に楽しめる空間作りが好きな自分に気づいた。 B-4. ライブや定期演奏会での試行錯誤を通じて、人がどう感じるかが大事だという価値観にいたっている。
C	C-5. 中学時代に聖飢魔IIやX-JAPANと出会った経験を通じて、価値観が形成された。 C-6. チームプレーだからこそ味わえる気持ち良さは、何物にも代えがたい。

D	<p>D-1. 憧れの曲が弾けるようになるまでピアノを続けた経験を通じて、どんなフィールドでも、やればできるという自信がついた。</p> <p>D-3. 県大会出場を果たした吹奏楽部での活動経験を通じて、目標に向けて計画的に努力する癖が身についた。</p> <p>D-4. 新しく発想をする時に、演奏を仕上げていく感覚を応用している。</p>
E	<p>E-2. 高校時代、できたての吹奏楽部での活動を通じて、みんなで創り上げていく楽しさを知った。</p>
F	<p>F-1. 時間をかけて上達したギターやベースの経験を通じて、練習を繰り返し重ねればできるようになるという考え方を身につけている。</p>
G	<p>G-1. 幼少期における強制的な [] 練習を通じて、忍耐力と集中力が身についた。</p> <p>G-2. 幼少期から積み重ねてきた [] 練習によって、頑張ればいつかできるようになるという考えが身についた。</p> <p>G-3. 人の感性が評価に関わる [] の世界で勝負した経験を通じて、努力でかなえられる目標は達成できる自信ができた。</p> <p>G-7. 行きたい音大に妥協せず全力で挑戦してよかった。</p>
H	<p>H-1. 長年の音楽経験によって、ギターの音色を聴き分けられる聴感覚が発達した。</p> <p>H-2. 音楽によって、価値観が形成された。</p> <p>H-3. 音楽活動において感動の理由や仕組みを知り再創造する癖が、人生に一貫している。</p>
J	<p>J-1. 中学の吹奏学部での活動や幼少期のピアノ学習で経験した繰り返し練習から、努力すれば必ずできるようになる自信が身についた。</p>

さらに、それぞれの事例における音楽経験の意味づけの内容に着目したところ、それらは以下表 3-7 とおり、6つの区分にまとめられた。6つの区分は、「努力すれば必ずできるようになるという考え方が身についた」、「途中で投げださない自信がついた」、「価値観が形成された」、「新しいものを発想する仕組みを学んだ」、「全力で挑戦する意義を知る」、「聴感覚が発達した」である。

【表 3-7 意味のまとまりで整理した【内的基盤を生成する側面】における音楽経験の意味づけ】

<p>《努力すれば必ずできるようになるという考え方が身についた》</p>	
D-1.	憧れの曲が弾けるようになるまでピアノを続けた経験を通じて、どんなフィールドでも、やればできるという自信がついた。
D-3.	県大会出場を果たした吹奏楽部での活動経験を通じて、目標に向けて計画的に努力する癖が身についた。
F-1.	時間をかけて上達したギターやベースの経験を通じて、練習を繰り返し重ねればできるようになるという考え

<p>方を身につけている。</p> <p>G-2. 幼少期から積み重ねてきた [] 練習によって、頑張ればいつかできるようになるという考えが身についた。</p> <p>G-3. 人の感性が評価に関わる [] の世界で勝負した経験を通じて、努力でかなえられる目標は達成できる自信ができた。</p> <p>J-1. 中学の吹奏学部での活動や幼少期のピアノ学習で経験した繰り返し練習から、努力すれば必ずできるようになる自信が身についた。</p>
<p>《途中で投げださない自信がついた》</p> <p>A-3. 高校の吹奏楽部での練習生活に耐えた自信があったから、試練を乗り越えられた。</p> <p>G-1. 幼少期における強制的な [] 練習を通じて、忍耐力と集中力が身についた。</p>
<p>《価値観が形成された》</p> <p>B-3. 大学時代のサークルの定期演奏会の成功を通じて、みんなが一緒に楽しめる空間作りが好きな自分に気づいた。</p> <p>B-4. ライブや定期演奏会での試行錯誤を通じて、人がどう感じるかが大事だという価値観にいたっている。</p> <p>C-5. 中学時代に聖飢魔IIやX-JAPANと出会った経験を通じて、価値観が形成された。</p> <p>E-2. 高校時代、できたての吹奏楽部での活動を通じて、みんなで創り上げていく楽しさを知った。</p> <p>H-2. 音楽によって、価値観が形成された。</p> <p>C-6. チームプレーだからこそ味わえる気持ち良さは、何物にも代えがたい。</p>
<p>《新しいものを発想する仕組みを学んだ》</p> <p>D-4. 新しく発想をする時に、演奏を仕上げていく感覚を応用している。</p> <p>H-3. 音楽活動において感動の理由や仕組みを知り再創造する癖が、人生に一貫している。</p>
<p>《全力で挑戦する意義を知る》</p> <p>A-1. 憧れの吹奏楽部に入り、3年間の生活をやりきることができた自分は、幸せ。</p> <p>A-2. 全国トップの吹奏楽部メンバーとしてステージ立った時、人生に二度とない気持ち良さを味わった。</p> <p>G-4. 妥協せず全力で音大受験に挑めたことに、満足している。</p>
<p>《聴感覚が発達した》</p> <p>H-1. 長年の音楽経験によって、ギターの音色を聴き分けられる聴感覚が発達した。</p>

これらの結果を概観すると、音楽経験によってその形成や発達が意味づけられた内面性はいずれも、日々における行動や判断において、そして人生全体の方向づけにおいて、強い影響をもたらすものである。

さらに全体としては、夢や目標の実現において重要となる内面性の形成に対し、音楽経験

が意味づけられていることが読み取れる。たとえば《価値観が形成された》ことによって、自ら人生における夢や目標が見出していける。そして《努力すれば必ずできるようになるという考え方》や《途中で投げださない自信》によって、常に、成功イメージをもって取り組むことができる。また《全力で挑戦する意義を知》っているからこそ、掲げた夢や目標の難易度に関わらず、その実現や達成にむけて取り組んでいけるのである。成功の前例のない局面にかかっても《新しいものを発想》していく創造的な思考によって、状況を打破していきけるからである。

以上の4点の指摘を総合的に解釈すると「演奏を続ける MBA コース参加者における音楽経験の意味づけ」とは、「演奏者としての自己規定をすすめ、人生における様々な領域の営みに対する音楽経験の影響を見出し、人生の原動力につながる内面性が音楽経験を通じて育まれてきたことを捉える、肯定的な思考行為」である。

本研究の目的において、特に注目すべきは、経験の意味づけの分析によって、音楽経験の影響が、音楽と直接関わりのない人生の側面において見出されることについて、確認できた点であろう。たとえば音楽をすることと働くこと、客観的には別の領域に属する活動として判断されることも、個人における多様な自己の側面が引き出されるインタビューの場において収集された語りを通じては、経験と個人との間にも多様なつながりを積極的にあぶりだすことができるのである。経験の意味づけに着目することで、音楽を通しての学びや気づき、あるいは音楽経験それ自体は、様々なフィールドの人生において多様に活かされていることを、導けた。

次章では、本章での考察結果をふまえて「MBA コース参加者における音楽経験の意味づけ」において、職業行動に対する音楽経験の影響が具体的にどのように解釈されているのかについて、考察していく。

第4章 音楽経験の意味づけに見る音楽経験による職業行動への影響

前章では、演奏を続けてきた MBA コース参加者 10 名を対象とした事例分析を通して、音楽経験の意味づけについて考察してきた。本章では、前章での考察結果をふまえ、

「MBA コース参加者における音楽経験の意味づけ」において、職業行動に対する音楽経験の影響が具体的にどのように解釈されているのかについて、考察していく。

具体的には、音楽経験が意味づけられた発話箇所における職業行動との関連を分析し、語り手における、職業行動に対する音楽経験の影響に対する解釈を明らかにしていきたい。以下より分析手順について記述する。

第1節 分析の手順

前章での分析結果をふまえ、次の手順にて分析を進める。

<手順 1> 第3章で抽出した、これまでの音楽経験と現在の自己とにつながりが見出され語られている発話箇所、すなわち音楽経験が意味づけられている語りの箇所に着目し、職業行動にまつわる話題の有無を確認する。

<手順 2> 職業行動にまつわる話題が確認された発話箇所を対象とし、同じ発話箇所から第3章にて読み取った音楽経験の意味づけの内容を参照しながら、発話箇所の語りを丁寧に読み込み、音楽経験による職業行動への影響についてどのように解釈されているのかを読み取る。

<総合考察> この手続きを 10 人の事例に対し行ない、音楽経験による職業行動への影響について、総合的な考察を述べる。

前章においては、職業行動への影響は【働く側面】における音楽経験の意味づけにおいて確認されている。しかし語り全体において、職業行動にまつわる話題が【働く側面】においてのみ音楽経験と結びつけられて展開されるのか否かについては確認していない。また【内的基盤を生成する側面】における意味づけからは【働く側面】をはじめ生活に則した自己の側面に通じる考え方が導かれる場合があることも指摘している。よって、本分析においては、まず、音楽経験が意味づけられた発話箇所全てを対象とし、職業行動にまつわる話題の有無について確認した。

本章の分析手順は主に、石川麻衣・宮崎美砂子(2008)『高齢者のライフストーリーから捉えた健康づくりの構造—独居女性高齢者の健康づくりの意味づけを通して—』、砂賀道子・二渡玉江(2008)『乳がん体験者の自己概念の変化と乳房再建の意味づけ』、中村雅也(2015)『視

覚障害教師の障害の経験と意味づけ—生徒とのかかわりを中心に』を参考としている。

【表 4-1 分析手順において参考とした先行研究】

研究者名	①研究目的 ②分析方法
石川・宮崎(2008)	<p>①高齢者が語るライフストーリーにより意味づけられた健康づくりを構造的に明らかにする。</p> <p>②ライフストーリーの中から、健康づくりの行為、感情、思考が語られている部分を取り出し、ライフストーリーの中で健康づくりがどのように意味づけられているかをカテゴリとして抽出。さらに各カテゴリにおいて健康づくりがどのように形成・変化しているかという視点から、高齢者の健康づくりについて構造化。</p>
砂賀・二渡(2008)	<p>①自己概念の変化プロセスと乳房再建への意味づけを明らかにする。</p> <p>②自己概念の変化を、個人の生活史上で体験した出来事や、その経験についての語りから分析するというライフストーリーの手法を参考に分析し、乳がん体験者の自己概念の変化のプロセスと乳房再建との意味づけを明らかにしていく。具体的には、2名を対象者とし、乳房再建に伴う思い、自己の価値観の変化に関連した文脈を抽出し、意味が類似したものを集めてテーマを表す。テーマごとに、再建との意味づけを解釈。</p>
中村(2015)	<p>①視覚障害のある教師が、教育実践において、障害をどのように経験し、意味づけているのかを明らかにする。</p> <p>②インタビューのトランスクリプトから、生徒とのかかわりについての語りを抽出し、KJ法を援用しカテゴリを導出。カテゴリごとに、教育実践における障害の経験についての語り、生徒指導や教科指導、障害者教師が学校にいることの効果についての語りをそれぞれ抽出し、考察。</p>

砂賀・二渡(2008)は、乳がん経験者の語りをもとに、乳がん経験を通じた自己概念の変容プロセスを導出した上で、そのプロセスごとに乳房再建の意味づけがどのようになされているのかを明らかにした。また中村(2015)は、視覚障害のある教師の語りを通じて、視覚障害を伴った後の教育活動経験の特徴と、その営みに見る教育的意義を捉えようとした。これら二つ研究事例に共通するのは、病気や障害の経験を通じた自己変化、形成された価値観や考え方が、その後の人生や生活にどう影響をもたらしているのかを捉えようとする視点である。一方、石川・宮崎(2008)は、高齢者のライフストーリーを通じて、健康づくりにまつわる習慣・価値観・考え方が、人生のどのような流れや経験から生成されているのか、その

意味づけの構造を明らかにすることを試みた。石川・宮崎(2008)は、あるテーマに関する「いま・ここ」¹³⁰の自己に関する解釈と、「いま・ここ」の自己を生成するにいたった背景を個人の人生経験から読みといている。

上記3事例に共通するのは、経験的な語りを通じて、関心の対象にある経験を通して形成されていく自己を質的に解釈していることと、質的に解釈された自己が、生活における特定のテーマや課題に対する意味づけにどう結びつき、関わっているのかに、着目している点である。この3事例のみならず、看護・医療・介護・グリーフケアの研究領域では、経験してきた自己と今現在の生活との関係やつながりに着目した先行研究が数多く蓄積されている。

本研究では、こうした看護・医療・介護・グリーフケアの領域での議論を参考にした。その理由は、本研究が、語りの解釈を通じて、語り手にとっての音楽経験の意味づけと、その中において解釈されている職業行動にもたらされる影響に着目している点、すなわち、自己における音楽経験の意味づけにおいて、職業行動という生活の営みに対する音楽経験による影響がどのように捉えられているかを明らかにしようとしている点で、上述の先行研究との共通性が見出されることにある。

第2節 分析の結果と考察

本節では、A から J までの事例分析における結果について、①分析のプロセス、②結果と考察の順で、記述する。

(1)A の事例

A の事例において第3章で抽出されていたのは4か所の発話であった。以下より、それぞれの発話箇所のうち職業行動にまつわる話題が確認されたものを対象に分析する。具体的には、前章にて同じ発話箇所から読み取った、語り手が音楽経験を意味づけた内容を参照しながら、語りの文脈を丁寧に解釈し、音楽経験による職業行動への分析と考察を行なう。

①分析のプロセス

①：前章で抽出した、音楽経験が意味づけられている発話箇所から、職業行動にまつわる語りの有無を確認する。語りの該当部分は、太字斜字で表記、職業行動を端的示す単語は下線。	②：前章にて、同じ発話箇所において導かれた、音楽経験の意味づけの内容を参照し、職業行動への影響がどのように解釈されているかを読みこむ。	③：②から導かれた、音楽経験による職業行動への影響を、簡潔な文章に記述する。
A-1 「 <u>中学校の時に(全国大会で金賞を受賞した吹奏楽部の演奏が録音された)レコードを聴いていた時に、ア</u>	A-1. <u>憧れの吹奏楽部に入り、そこでの生活をやりきる</u> こと	

¹³⁰ ライフストーリー論において、一般的に、語りの現場の語り手の視点を意味する用語。

<p>ナウンスで演奏が始まるんですけど、指揮 TN ってずっと聴いてたわけですよ。実際に(高校の吹奏楽部に)入った時に(TN 先生の指導を受けて)、『これはリアルなんだ!』という感動。だから幸せだと思いますよ、ぼくは。自分の思ったところに行けて、そういう環境の中でできたっていうのは。だから、やり切ったって言う満足感の方がやれなかったという残念感よりも大きくて、まあ、自分的には一つの区切りを付けた」</p>	<p>ができた自分は、幸せ</p>	
<p>A-2 「演奏会でいろんな曲を演奏して、挨拶をする時にやっぱり、大歓声とか拍手を受ける時の気持ち良さとかと誇らしさっていうのはあの当時でしか味わえなかった。なんか胸張って堂々と立てる。で、アンコールかかるじゃないですか。で、アンコールかかって、アンコール曲やって、で、最後にまたありがとうございますって言って、また、みんなでその、聴いている人達にむかってお礼を言うんですけど、それで、ばーって終わって、幕がさがって、それから地獄なんですけど。そこからすぐに移動があるんで、楽器を片づけて、掃除をしなければいけないんですよ。で、ステージの掃除だけではなくて、客席の掃除も。その一瞬だけなんです。満足は。幕がしまったらやらなければいけない。それはねえ、今はもう、俺、このためにやってるんだな、というのがあったんです」</p>	<p>A-2. 全国トップの吹奏楽部メンバーとしてステージに立った時、人生に二度とない気持ち良さを味わった</p>	
<p>A-3 「それはその後も、あの厳しい練習に一応3年間、耐えたんだから、少々のことは耐えられんだろう、というのはずっとありました。だから起業する時もそれはあったと思います。起業する時に、今から思えば怖いもの知らずで、その勢いだけでやったんだけど、その勢いというのは自分の自信、持っていた自信、そういうものを持っていたのでやってこれを、というのはあったなあと思う。音楽的なこととはちょっと離れてるけど」</p>	<p>A-3. 高校の吹奏楽部での練習生活に屈しなかったことで、試練に耐えられる自信になった</p>	<p>高校時代の吹奏楽部での試練に耐えた自信があったから、起業に挑戦できた</p>
<p>「私はトップレベルだったよと。全然、個人のスキルからしたらトップレベルじゃないんですけどね(笑)」</p>	<p>A-4. 高校の吹奏楽部活動を通じて、音楽的才能の限界を認識する</p>	

②結果と考察

A の事例において第 3 章で抽出されていた 4 か所の発話のうち、職業行動にまつわる話題が確認されたのは A-3 の発話であった。職業行動にまつわる話題が確認されなかった発話は薄字の表記としている。

A-3 の発話を分析対象に選出し、前章で同じ発話箇所から読み取った音楽経験の意味づけの内容を参照しながら、語りの展開を丁寧に読み込み、分析を進めた。結果、音楽経験による職業行動への影響は「高校時代の吹奏楽部での試練に耐えた自信があったから、起業に挑戦できた」であった。A-3 の発話部分に着目すると、下線で記したとおり、意味づけについての語り、職業行動にまつわる話題へと自然に展開していることが確認される。具体的には、起業に挑戦し今にいたる背景と、高校時代の吹奏楽部での試練に耐えた経験による自信とが、結びつけられて語られており、高校時代の吹奏楽部での経験を通じて育まれた自信があったからこそ起業に挑戦できたという、ストーリーの展開がなされているのである。

(2)B の事例

B の事例において第 3 章で抽出された 7 か所の発話のうち、職業行動に関連した話題が確認されたのは B-3、B-4、B-5 の 3 通りであった。以下より 3 通りの発話箇所に着目し、音楽経験による職業行動への影響について、A の事例と同じ手順にて、分析と考察を行なう。なお、本事例よりは、分析プロセスの表には、職業行動にまつわる話題への展開が確認された発話箇所のみを取り上げていくこととする。

①分析のプロセス

①：前章で抽出した、音楽経験が意味づけられている発話箇所から、職業行動にまつわる語りの有無を確認する。語りの該当部分は、太字斜字で表記、職業行動を端的示す単語は下線。	②：前章にて、同じ発話箇所において導かれた、音楽経験の意味づけの内容を参照し、職業行動への影響がどのように解釈されているかを読みこむ。	③：②から導かれた、音楽経験による職業行動への影響を、簡潔な文章に記述する。
<p>B-3 「大学 2 年生の時の定期演奏会。米米 CLUB のコピーバンドやっただですよ。で、さっきの話とちょっと絡むんですけど、そんなにギターうまくなくて、あの、サークルの中にほんとうまい人いっぱいいて、先輩も後輩も、自分には、この演奏で聴かせるとか、うまいなか、そういうところで表現するの、たぶん難しいなと思ったんですよ。でも、演奏して楽しい、お客さんも喜んでるっていうのを一番感じたのはそのバンドだったんですね。そんなにこう、大勢でやっただけど、何度も定期演奏会でましたけど、一番盛り上がったのが、その会で、お客さんも楽しんで、自分たちも楽しくて、そんなにみんなうまいわけじゃないんだけど、お祭りっぽく楽しめて。あ、俺、これやりたかったんだなって思ったんです。で、人を楽しませる、人も一緒に楽しめる、一体感があそこに生まれて。で、実はこの話、<u>ここの就職の面接でも話してて、だからそういう仕事したいんですって話。それができるのがこの職場。</u>なんで、なので、音楽がいいなって思うのはそういう瞬間で」</p>	<p>B-3 大学時代のサークルの定期演奏会の成功を通じて、みんなと一緒に楽しめる空間が好きな自分に気づいた</p>	<p>B-3 大学時代の定期演奏会の成功を通じて、やりたいことをみつけ、それが叶う会社を就職先に決めた</p>
<p>B-4 「米米の話(B-3 で語られている定期演奏会の話)じゃないですけど、表現、表現ってやっぱ人はどう感じるかなんだよねってことは全てに言えるなってこと。<u>ビジネスでも</u>夫婦の会話でも子供に対しても。それはなんか、音楽やって、ね、つまらなそうに聴いてる時もあるし、あ〜、すげ〜って、ずっと楽しんでる時もあるし。何が違うんだろうと思うと、こっちの考え方なんです。だから自分ではそうだなって思ってるのが、さっきの米米 CLUB の経験で。お客さんに聴かせる、お客さんがどう思うかが大事。演奏している方の気持ちよりもお客さんが大事だと僕は思ったんです、音楽って。もちろん自分で弾いて気持ちいいのもあるんですけど、聴かせて感動させてなんぼっていうのが音楽だと思うんで、そうすると、聴き手がどう思うか、選曲も、楽器の選び方も、場所もっていうのが...あ、<u>仕事選びもそうですし、今でも会議とかミーティングとかでも一緒だなと思う</u>」</p>	<p>B-4 大学時代のサークルの定期演奏会での試行錯誤を通じて、大事なことは人がどう感じるかという問題で、全てに言えるとわかった</p>	<p>B-4 大学時代の定期演奏会を通じて得た表現の良し悪しは人がどう感じるか次第という気づきを、会議やミーティングの場においても活かしている</p>
<p>B-5 「(ステージに)出たときの緊張感の楽しみ方っていうか、最初はみんな緊張するんだけどやってくるとだんだん盛り上がってくるよねってことを繰り返すと、<u>仕事で人前でしゃべるとか、でるってことに対して恐れなくな</u>る。もしくはそこから楽しむ、人前で話すことを楽しむ」</p>	<p>B-5 人前での演奏を積み重ねてきたことによって、しゃべることや、でることに対して恐れなくなっている</p>	<p>B-5 人前での演奏を積み重ねてきた経験によって、仕事関係で人前に出る場合も恐れがなく、むしろ楽しめるようになっていく</p>

②結果と考察

B の事例において第 3 章で抽出されていた 7 か所の発話のうち、職業行動に関連した話題が確認されたのは B-3、B-4、B-5 の発話であった。それぞれの発話において、前章で同じ発話箇所から読み取った音楽経験の意味づけを参照しながら、語りの展開を丁寧に読み込み、分析を進めた。結果、音楽経験による職業行動への影響は、それぞれ、B-3「大学時代の定期演奏会の成功を通じて、やりたいことをみつけ、それが叶う会社を就職先に決めた」、B-4「大学時代の定期演奏会を通じて得た表現の良し悪しは人がどう感じるか次第という気づきを、会議やミーティングの場においても活かしている」、B-5「人前で演奏するという経験を積み重ねてきたことによって、仕事関係で人前に出る場合も恐れがなく、むしろ楽しむようになっている」であった。

B-3 の場合、下線で記したとおり、音楽経験を意味づけている発話部分において、やりたいことを見つけた定期演奏会での経験を就職活動の面接にて話したというエピソードが語られている。ここに、音楽経験の意味と職業行動との具体的な結びつきを読み取ることができる。そして「それができるのがこの職場」という語りからは、今現在も、当時、就職先として選んだ会社に勤務している B が、就職活動当時の判断を今も肯定的に捉えていることがうかがえる。このことから、B にとって、音楽経験が職業の選択に影響を及ぼしていることが捉えられよう。

B-4 の場合は、下線部において、大学時代の定期演奏会を通じた気づきが、多様な場において活用できることについて語られており、多様な場の選択肢の一つとして、職業行動に関わるシチュエーションが「...あの、仕事選びもそうですし、今でも会議とかミーティングとかでも一緒だなと思う」という流れで、挙げられている。音楽経験を通じていたった「人がどう感じるかが大事だという考え」に対し、ビジネスの現場における応用性が見出されることが読み取れる。職業行動への影響が及んでいるといえよう。

B-5 の場合も B-4 同様、人前で演奏を重ねてきた経験があるから「仕事で人前でしゃべるとか、でるってこと」や「人前で話すこと」を恐れることなく楽しむという展開が語りにおいてなされている。音楽経験の意味づけによって、音楽活動と職業行動、両者において人前で表現する、というシチュエーションの共通性が見出され、職業行動に対する音楽経験の影響の確認がなされていることがうかがわれた。

(3)C の事例

C の事例において第 3 章で抽出された 6 か所の発話のうち、職業行動に関連した話題が確認されたのは C-1、C-3、C-4、C-5、C-6 の 5 通りであった。以下より 5 つの発話箇所に着

目し、音楽経験による職業行動への影響について、分析と考察を行なう。

①分析のプロセス

①：前章で抽出した、音楽経験が意味づけられている発話箇所から、職業行動にまつわる語りの有無を確認する。語りの該当部分には、太字斜字で表記、職業行動を端的示す単語は下線。	②：前章にて、同じ発話箇所において導かれた、音楽経験の意味づけの内容を参照し、職業行動への影響がどのように解釈されているかを読みこむ。	③：②から導かれた、音楽経験による職業行動への影響を、簡潔な文章に記述する。
<p>C-1「社会人生活をして、週に2日しか休みがない中で(コントラバスの練習を)やるって言うてもなかなかうまくいかない時期があって、そうしたらそうこうしているうちに、凄い仕事が忙しくなっちゃって、土日も含めてすごいうざって仕事のこと考えてた時期ができちゃって、もうこのままだとちょっと僕ダメになるなと思って。20代、入社3年目くらいでした。で、もうなんか、もう駄目だなと思って、でも、どうせ忙しいんだったらもうちょっとやってもいけんじゃないかなって、なんか変な、変な思考が働いてことがあって、で、オーケストラやっちゃえて、入っちゃったんです。そしたらそのオーケストラの練習の時間はどうしても音楽をやることになって、<u>結果的には、その時間があるからじゃあ、そのために早くいろいろ終わらせないといけないなとほかのところにも影響ができてきて。というのとやっぱり、週に3時間とか4時間は仕事のことを離れて、音楽に集中する時間ができて、結果的にはやっぱり仕事とは別に音楽の時間ができるといのがいい影響を及ぼしてるな</u>っていう。社会人になってから。それが僕は一番印象に残っている」</p>	<p>C-1 仕事から離れて、音楽の時間ができるとして、生活が立て直せた</p>	<p>C-1 仕事とは別に音楽の時間を確保することで、働き方が改善され、仕事の質も上がる</p>
<p>C-3「自分がこう、こんなでいいのかなって作った曲で。やっぱりちょっと、でも、僕、100%、自分でできて100点だったかっていうと微妙な感じではあったんですけど、でも、やっぱり、発表している日が決まっていると、そこに合わせてやっていかなきゃいけないわけで。完全独学ですよ、一応、楽典の本とか読んだんですけど...(笑) でもまああって感じ、ほんと、見様見真似。でもまあ、聴いてもらって、拍手してもらおうという経験というのは、やっぱりこれで次もやろうかなっていう気になるわけですね。だから、それは、いろんなところで、こう、<u>自分が書いた文章を読んでもらうとか、自分が書いたプレゼンを聞いてもらうとかって時に役立っていると思います</u>」</p>	<p>C-3 仕上がりの状態に関わらず、自分の作品を演奏した経験を通じて、発表機会を重視する考え方が養われた</p>	<p>C-3 出来栄に自信がない状況でも自作の曲を発表し、やる気につながったという経験から、プレゼン資料や文章は、その完成度に関わらず、発表機会の重要性を認識し、アウトプットしている</p>
<p>C-4a「まあ、今思うと本当に気合いが入った先生だったんです。で、その先生も毎回、定期演奏会のたびに一曲ずつ自分の曲を書いて発表するっていうことをやってたんですよ。っていう、それも今思うと、<u>すごい、組織を率いる、音楽の世界でこうだよってところは影響ありましたよね</u>」 C-4b「世界的に著名なフィルの TS さんが言うから説得力があるところがあって。<u>やっぱりなんかすごく僕は勉強になったなと。そういう指揮者の先生との出会いっていうのはいろいろありますよね</u>」 C-4c「中学2年生の時に、吹奏楽部の部長さんになった部長さんがいて、その人、今でも音楽系の仕事をやってるんですけど、その人が部長になった途端に<u>部の雰囲気</u>がすごいガラッと変わったことがあって。<u>やっぱりこういう風にやろうっていう。その人自身、音楽性がちゃんとある人で、なるほど、一人の力でこんなに変わるんだなって思ったことがありました。それはすごいなと思いました</u>」</p>	<p>C-4 オーケストラや吹奏楽部のリーダーから、組織の率い方について学んだ</p>	<p>C-4 オーケストラや吹奏楽部の指揮者の先生やリーダーから、組織の率い方について学んだ</p>

<p>C-5a「聖飢魔Ⅱで、デーモン閣下、けっこうああいいうインテリっぽいところがあるので、<u>やっぱり社会に対する考え方というのは勉強になったし、やっぱり何よりも人と違うことをやる大切さ</u>というのと、<u>人が何と言おうとね、自分の信じる道を行く</u>というところがわりと僕としては勉強になった。やっぱり、こう、不安になることとかもあった時に、割とデーモン閣下は、いろんところで、神に頼るなど、自分の心に聞きなさいということ、けっこう言っていて、僕はなんかね、わりとそれはね、なるほどと、結構勇気づけられてた、説得力があるんじゃないかと。<u>だから僕も、散々みんなから言われながらも自分の道を貫いていて(家業を継がずに、起業して経営)を、そういう影響はすごく大きい</u>と思いますね」</p> <p>C-5b「<u>中学2年生</u>くらいに、<u>そういうXとか聖飢魔Ⅱに出会って、そこでのいろいろ学ぶことがあると思うんですね</u>。それは社会に対しても、<u>大人になる過程</u>で、特にX-JAPANは、ああいいう気合いが入ったバンド。初期は気合いが入ったバンドだったんで、でも、<u>僕はあの姿勢に学ぶところがあって、自分の限界を自分で決めてしまっ</u>てはいけないというか、<u>限界はもうない</u>というか、結果的にみるとあったんですけどね、Xには。でも最初の勢いってすごいな、デビューアルバムでこんなにやっちゃっていいのかな、と。え〜とね、僕が中学2年の時だったと思うんで、そうですね、89年か90年。強烈でした。紅白とかも最初はすごかった。<u>最初が一番…やっぱり人間って努力したらこういうことができるんだ</u>っていう原体験になったと思うんです」</p>	<p>C-5 中学時代に聖飢魔ⅡやX-JAPAN と出会った経験を通じて、信念が形成された</p>	<p>C-5 中学時代に出会った聖飢魔ⅡやX-JAPANの影響を受け、自身も、限界を決めず、人から何を言われても、自分の信じたキャリアを重ねてきた</p>
<p>C-6「吹奏楽やオーケストラはやっぱりチームプレーだと思うんですね。で、チームで一体となってやった時の喜びっていうのは、それはやっぱりね、一人でやった時の喜びの何倍にもなる。会場、けっこう、埋まるんですよ、そのアマチュアの社会人オーケストラでも。1000人以上、お客さんが拍手してくれる、あの拍手を聴いたときの感動…それは何者にも代えがたいものがあります。やっぱり、チームでやると、こう、自分の思いどおりの演奏ではないこともけっこうあって、それで、一緒にやってる人がなんだかわからないんですけど、音程をすごく高めにとる人で…(笑)それでもう、音程が合わないなあってずっと怒ってて、こないだ聞いたんですよ、他の人に。その人と弾いてる他の人に、どう思いますか、と。高すぎると思う、あれはって言ってたから、よかった自分だけじゃなかったって思っ</p> <p>(大笑)。それはよかったですけど。けっこう、なんていうか、そういういろんなことありつつも、<u>最後、本番を迎えて一つになってという経験</u>というのは、<u>それは会社を、僕も個人でやるよりは、会社でみんなで頑張ってやっていこうという気持ちになるのはそういうところなのかな</u>、と」</p>	<p>C-6 チームプレーだからこそ味わえる気持ち良さは、何物にも代えがたい価値がある</p>	<p>C-6 チームでの演奏が成功した時に感じる大きな喜びは、仕事も一人ではなく、組織をつくってみんなで頑張っていこうという気持ちにつながる</p>

②結果と考察

Cの事例において第3章で抽出されていた6か所の発話のうち、職業行動に関連した話題が確認されたのはC-1、C-3、C-4、C-5、C-6の5通りの発話であった。それぞれの発話において、前章でまとめた音楽経験に意味づけられた内容を参照しながら、語りの展開を丁寧に読み込み、分析を進めた。結果、音楽経験による職業行動への影響は、それぞれ、C-1「仕事とは別に音楽の時間を確保することで、働き方が改善され、仕事の質も上がる」、C-3「出来栄に自信がない状況でも自作の曲を発表し、やる気につながったという経験から、プレ

ゼン資料や文章は、その完成度に関わらず、発表機会の重要性を認識し、アウトプットしている」、C-4「オーケストラや吹奏楽部の指揮者の先生やリーダーから、組織の率い方について学んだ」、C-5「中学時代に会った聖飢魔IIやX-JAPANの影響を受け、自身も、限界を決めず、人から何を言われても、自分の信じたキャリアを重ねてきた」C-6「チームでの演奏が成功した時に感じる大きな喜びは、仕事も一人ではなく、組織をつくってみんなで頑張っていこうという気持ちにつながる」が導かれた。

C-1の場合は、職業行動への展開を見る以前に「社会人のオーケストラ活動によって、メンタルのバランスが保たれる」という音楽経験の意味づけそれ自体に既に、職業行動に関連する内容が確認される。発話内容を見ていくと、社会人3年目に再開したオーケストラ活動がいかに働き方を変えたかについてのエピソードが具体的に語られており、職業行動の変化によって、音楽経験の意味づけがなされていると言っても過言ではない。発話後半の語りにおいては「結果的にはやっぱり仕事とは別に音楽の時間ができるっていうのがいい影響を及ぼしてるなっていう。社会人になってから」とあり、音楽経験が職業行動に及ぼす影響が今も継続していることがうかがえる。

C-3の意味づけは、自作の曲を自信がないながらに発表した経験を通じて学びを得たことである。自己における音楽経験の意味づけと職業行動とを結びつけた語りの展開に着目すると、下線部にあるとおり、その学びを活かし、プレゼンテーションをはじめとする人前での発表に臨んでいることが語られている。

C-4の場合は「勉強になった」「影響ありました」という言葉で、音楽経験を、<いま・ここ>における自己から振り返ることで、今の自己と音楽経験とが結びつけられている。その際に学びが見出される側面が、マネジメントやリーダーシップなど組織運営に関わる場所にあり、よって<いま・ここ>の自己における視点が働く立場にあること、職業行動の主体である自己であることが捉えられよう。

C-5の発話では、中学時代に没頭した聖飢魔IIやX-JAPANによって、人生の筋を通す信念が形成されたことのエピソードが語られている中で、職業行動にまつわる話題の展開がなされる。具体的には「だから僕も、散々みんなから言われながらも自分の道を貫いていて(家業を継がずに、起業して経営)を、そういう影響はすごく大きい」とあり、音楽経験を通じて信念が育まれたことによって、家業を継がず、起業独立という働く道を選択してきたという、音楽経験が職業行動に影響をもたらしたとするC自身の認識を読み取ることができる。

C-6では、オーケストラの本番、団員みんなで力を合わせて味わえる一体感や達成感と、

組織で仕事をしていく働き方を選択する自身のあり方とを結びつけて語り、〈いま・ここ〉の働く自己の定義づけを行っている。C-6は、音楽経験を通じて再認識される自身の価値観が、働き方においてもぶれることなく一貫しているということについての確認作業が展開されることで、働く自己の内面が肯定化されている点を理由とし、職業行動に関連する話題として判断した。

(4)D の事例

D の事例において第 3 章で抽出された 5 か所の発話のうち、職業行動に関連した話題が確認されたのは D-2、D-4、D-5 の 3 通りであった。以下より 3 つの発話箇所に着目し、音楽経験による職業行動への影響について、分析と考察を行なう。

①分析のプロセス

①：前章で抽出した、音楽経験が意味づけられている発話箇所から、職業行動にまつわる語りの有無を確認する。語りの該当部分は、太字斜字で表記、職業行動を端的示す単語は下線。	②：前章にて、同じ発話箇所において導かれた、音楽経験の意味づけの内容を参照し、職業行動への影響がどのように解釈されているかを読みこむ。	③：②から導かれた、音楽経験による職業行動への影響を、簡潔な文章に記述する。
D-2「リコーダーの楽しさは初めてわかりました。ほんと楽しいなど、今までにない楽しさだと。 <u>どんなに忙しくてもリコーダーには時間をつくります。優先順位をあげますよ。その時は仕事の面倒なことも忘れられて、いいリフレッシュになっています</u> 」	D-2 社会人のリコーダーアンサンブルの活動が、仕事のリフレッシュになる	D-2 社会人のリコーダーアンサンブルの活動で、仕事のリフレッシュをする
D-4「合奏にしてもピアノにしても、全体の体系でひとつのまとまりじゃないですか。技術的にはもちろんこまかいところをほるのでしょうけれど、いろいろこまかいところをほった上で、まとまったものを創るというイメージなんです。だから <u>仕事でも、生活しながら新しいものを考えたりする時にも、こんなイメージ。全体的に考えだす発想の仕方が音楽に似ている。譜面をみて練習している時は楽しくないけれど、海の歌みたいに、こんな曲を演奏したいというイメージが先にあると、そのために必要なことをやるっていうか、うまく伝えられないんですけど</u> 」	D-4 新しく発想をする時に、演奏を仕上げていく感覚を応用している	D-4 演奏を仕上げていく感覚を、新しい発想をする時に応用している
D-5「 <u>ピアノを弾いていたことが、仕事にすごく役に立っています。パソコンのキーボード、早くというか押す力とか関係ないし、すごく難易度が低いと思うんだけど、自分が何かアイデアを思いつくと手が勝手に動いてくれる。すぐに出てくれるから、人よりも長く考える時間がとれている。そこはアドバンテージであり、ピアノをやっていなかったら、そうはなってなかった。アイデアと画面が直結している感じです。それは技術面ですごく有利です</u> 」	D-5 ピアノの運指練習のおかげで、頭を使わずにパソコンのキーボードタッチができる	D-5 ピアノで指先の感覚を鍛えたおかげで、パソコン入力への負担が少ない分、人より長く考える時間が取れる

②結果と考察

D の事例において第 3 章で抽出されていた 5 か所の発話のうち、職業行動に関連した話題が確認されたのは D-2、D-4、D-5 の 3 通りの発話であった。それぞれの発話において、前章でまとめた音楽経験の意味づけの内容を参照しながら、語りの展開を丁寧に読み込み、

分析を進めた。結果、音楽経験による職業行動への影響は、それぞれ、D-2「社会人のリコーダーアンサンブルの活動で、仕事のリフレッシュをする」、D-4「演奏を仕上げていく感覚を、新しい発想をする時に応用している」、D-5「ピアノで指先の感覚を鍛えたおかげで、パソコン入力の負担が少ない分、人より長く考える時間が取れる」であった。

D-2 では、音楽経験の自己における意味づけに、今現在活動しているリコーダーアンサンブルが仕事のリフレッシュになるという意味が含まれており、職業行動への影響が音楽経験の自己における意味づけとして語られている。

D-5 の場合も、抽出した発話部分の冒頭、下線部太字斜字において「ピアノを弾いていたことが、仕事にすごく役に立っています」と語られていることから、自己における音楽経験の意味づけに見る内容自体が、職業行動に関連していることがうかがえる。なお D-5 における音楽経験の意味づけは「ピアノの運指練習のおかげで、頭を使わずにパソコンのキーボードタッチができる」である。

最後に D-4 であるが、D-4 の発話では「だから仕事でも、生活しながら新しいものを考えたりする時にも、こんなイメージ。全体的に考えだす発想の仕方が音楽に似ている」と語られている。すなわち語りの展開には、演奏を仕上げていく感覚を応用するシチュエーションが生活の様々な領域にあることを俯瞰したのち、その一つの選択肢として仕事の間が例示されているのである。ここにおいて、職業行動に関連する話題が展開されていると判断をした。

(5)E の事例

E の事例において第 3 章で抽出された 4 か所の発話のうち、職業行動に関連した話題が確認されたのは E-3、E-4 の 2 通りであった。以下より 2 つの発話箇所に着目し、音楽経験による職業行動への影響について、分析と考察を行なう。

①分析のプロセス

①：前章で抽出した、音楽経験が意味づけられている発話箇所から、職業行動にまつわる語りの有無を確認する。語りの該当部分は、太字斜字で表記、職業行動を端的示す単語は下線。	②：前章にて、同じ発話箇所において導かれた、音楽経験の意味づけの内容を参照し、職業行動への影響がどのように解釈されているかを読みこむ。	③：②から導かれた、音楽経験による職業行動への影響を、簡潔な文章に記述する。
E-3 「 <u>そういう意味では、会社で仕事なんかする時にも役立っていますよね。使っているんだと思うんだけど、知らず知らずのうちに...</u> いやその、抽象的なものがある程度、なんとなく、わかりやすいような形にするとか、たとえ話にするとか、そういうようなことは音楽の経験があるからできるんじゃないかと思います。聴く耳が持てる、聴いて共感ができる、それに対してアドバイスができる。ある程度、相手がわかってもらえたんだって思ってもら	E-3 他人と共有できる演奏の模索を通じて、抽象的なことをわかり合えるコミュニケーションができるようになった	E-3 演奏活動を通じて培われた抽象的な事柄をわかりやすく人と共有していくコミュニケーションスキルは、ビジネスシーンでこそ活かされる

<p>えるレベルのリプライができる...結局さ、<u>ビジネスも抽象的なこといっぱいあるじゃない、それを論理的に、わかりやすく、できるだけ多くの人がおんなじようにして</u>いって、けっこうそれって難しくて...それをやるトレーニングってわけじゃないけど」</p>		
<p>E-4「その時何を学んだかって考えると...それは結構役に立っていて、音楽、けっこうそんなにレベルは高くないんだけど、つくっていくプロセス、曲を作ったりアレンジして、同時に人を読んで、仲間を集めて、上げていって言う一つのプロセスっていうのは、<u>会社にもあって、商品開発のプロセスとほぼ近い、というと同じ。</u>あと、<u>創造、クリエーションして</u>いって、そういうことでは共通点は非常に多く、会社に入って、そういうことやる上でも、その時のやってきたことが役に立ったかなあという実感があります。吹奏楽は一年だけだったから、<u>軽音の時ですね</u>」</p>	<p>E-4 ライブを仕上げていくプロセスでの学びが、商品開発に活かされている</p>	<p>E-4 演奏を仕上げてステージで発表するプロセスと、商品開発プロセスは共通しており、仕事をすすめやすい</p>

②結果と考察

Eの事例において第3章で抽出されていた4か所の発話のうち、職業行動に関連した話題が確認されたのはE-3、E-4の発話であった。これまでの事例同様、分析をすすめた結果、音楽経験による職業行動への影響は、それぞれ、E-3「演奏活動を通じて培われた抽象的な事柄をわかりやすく人と共有していくコミュニケーションスキルは、ビジネスシーンでこそ活かされる」、E-4「演奏を仕上げてステージで発表するプロセスと、商品開発プロセスは共通しており、仕事をすすめやすい」が導かれた。

E-3は、発話箇所の冒頭において「そういう意味では、会社で仕事なんかする時にも役立っていますよね。使っているんだと思うんだけど、知らず知らずのうちに...」と展開されている語りがあり、音楽経験の意味づけが、職業行動に役立っていることが具体的に指摘されている。「役立っていますよね」「トレーニングってわけじゃないけど」という語りは、音楽経験を通じて磨かれたコミュニケーションスキルが、ビジネスにおいて活かされていることの実感がうかがえるものである。

E-4も、E-3同様、意味づけを生成した発話の冒頭において「それは結構役に立っていて」と語られており、自己における音楽経験を意味づけることで、音楽経験が職業行動におよぼす影響が見出されていく過程が読み取れた。事例Eの特徴としては、音楽経験の自己における意味づけと職業行動とを役に立つという言いまわしで結び付けている点である。役に立つという解釈にいたる語りの展開に着目すると、E-3、E-4共に、演奏活動の特定の側面における構造やプロセスが、ビジネスにおけるそれと共通するという認識がなされていることが読み取れる。具体的には、演奏を仕上げていくプロセスは商品開発のプロセスに共通性が見出され、音楽という抽象的なことを互いに共有していく構造は、抽象的な事柄を理解しあうビジネスシーンの構造に共通性が見出されている。

(6)F の事例

F の事例において第 3 章で抽出された 5 か所の発話のうち、職業行動に関連した話題が確認されたのは F-1、F-4 であった。以下より 2 つの発話箇所に着目し、音楽経験による職業行動への影響について、分析と考察を行なう。

①分析のプロセス

①：前章で抽出した、音楽経験が意味づけられている発話箇所から、職業行動にまつわる語りの有無を確認する。語りの該当部分は、太字斜字で表記、職業行動を端的示す単語は下線。	②：前章にて、同じ発話箇所において導かれた、音楽経験の意味づけの内容を参照し、職業行動への影響がどのように解釈されているかを読みこむ。	③：②から導かれた、音楽経験による職業行動への影響を、簡潔な文章に記述する。
F-1 「スキルって、ほら、音楽とかスポーツやってる人ってわかると思うけど、繰り返し繰り返し反復練習をすることができるようになるじゃない。 <u>どんな仕事も最初からできるわけない。ちゃんと繰り返し反復練習をして、自分のものになっていく。</u> まあ、難しい 16 分の音符だって、一年練習すればできるようになる。まあ、めげない、めげない(笑)。そこは感情を抜きにして、反復練習すればできるようになるんだよね。だから、こういうことやりたいと思っても、難しいけど、反復すれば...できないんだったら、しかるべき行動をとってないんだと思う」	F-1 時間をかけて上達したギターやベースの経験を通じて、練習を繰り返し重ねればできるようになるという考え方を身につけている	F-1 音楽経験を通じて、努力すれば必ずできるようになるという考え方が育まれたことによって、難易度の高い仕事にもめげずに取り組める
F-4 「多分、説明しにくいけど、 <u>音楽をやったことによって、ビジネスにすごいつながっている。</u> 発想とか...説明しにくいんだけど、努力じゃなくて、アートな世界。 <u>新しいビジネスを起こす</u> のはアートな世界。努力をしつつ、うん、アート以外の何物でもない。そういうことを考えつくのは、音楽をやったから、そうなったんだと思う。 <u>発想の仕方とか、うまく説明しにくいんだけど、俺の中に明確にある。音楽をやっていたことがビジネスで発想する部分と、仕事って誰かと協調して、でも、その中で自分のやりたいことを伝えるというものもあるし...</u> 競いながらも仲間みたいな。それは音楽をやることによって生まれてくる <u>新しい発想</u> 。なんだろうな、今までこうやってきたからこれからもそうですよ、ではなくて、どんどん良くしていこうよとか。地道にスキルを学ぶということと、新しい発想、アートの部分、今までないものができるということを、音楽をやって学んだと思う。うまく言えないんだけど」	F-4 音楽を追求してきたことによって、ビジネスで発想する力が養われた	F-4 音楽を追求してきたことによって、ビジネスで発想する力が養われた

②結果と考察

F の事例において第 3 章で抽出されていた 5 か所の発話のうち、職業行動に関連した話題が確認されたのは F-1、F-4 の発話であった。分析の結果、音楽経験による職業行動への影響は、それぞれ、F-1 は「音楽経験を通じて、努力すれば必ずできるようになるという考え方が育まれたことによって、難易度の高い仕事にもめげずに取り組める」、F-4 が「音楽を追求してきたことによって、ビジネスで発想する力が養われた」であった。

F-1 の場合、自己における意味づけが生成される過程において「どんな仕事も最初からで

きるわけない。ちゃんと繰り返し反復練習をして、自分のものになっていく」と語られており、音楽経験の自己における意味づけが、職業行動にもあてはめられていることがわかる。その後が続いて展開される語りにおいては具体的に職業行動を指し示す単語や話題は確認されないが、たとえば「こういうことやりたいと思っても、難しいけど、反復すれば...できないんだったら、しかるべき行動をとってないんだな」といった語りも、職業行動を想定した内容として解釈するのが自然と考えた。

F-4 は、音楽経験の意味づけにおいて、職業行動への影響があらわれている。発話を参照すると、冒頭部分においては「音楽をやったことによって、ビジネスにすごいつながっている」とあり、音楽経験が<いま・ここ>における働く自己の行動内容に影響していることが明確に語られている。そのあとに続く語りにおいては「説明しにくい」としながらも、ベースやギターで続けてきたバンド活動での演奏経験を通じて培われた発想力が、ビジネスをする<いま・ここ>の自己において活かされていることが語られている。前章にも記述したが、長年のバンド活動経験には「誰かと協調して」「自分のやりたいことを伝える」「どんどん良くしていこう」「地道にスキルを学ぶ」といった要素があり、さらにそれらが掛け合わせることで「生まれてくる新しい発想」のある音楽活動が成立する。すなわち F-4 で語られた音楽経験は「今までないものができる」ということを学んだ経験であり、発想する力が養われた過程であり、だからこそ、新しいビジネスを起こす<いま・ここ>の職業行動において、それが活かされているように解釈されていると言えよう。

(7)G の事例

G の事例において第 3 章で抽出された 7 か所の発話のうち、職業行動に関連した話題が確認されたのは G-1、G-2、G-3 の 3 か所であった。以下より 3 つの発話箇所に着目し、音楽経験による職業行動への影響について、分析と考察を行なう。

①分析のプロセス

①：前章で抽出した、音楽経験が意味づけられている発話箇所から、職業行動にまつわる語りの有無を確認する。語りの該当部分は、太字斜字で表記、職業行動を端的示す単語は下線。	②：前章にて、同じ発話箇所において導かれた、音楽経験の意味づけの内容を参照し、職業行動への影響がどのように解釈されているかを読みこむ。	③：②から導かれた、音楽経験による職業行動への影響を、簡潔な文章に記述する。
G-1 「それは...楽譜をその一時間なら一時間、もう、どうしてもやらなければいけない。やらないといと怒られる。怒られるのが嫌なので、泣きながらでもやらなければいけない。そういう強制された時間を過ごすというのは、やっぱり忍耐力。ひと言なんですけど、つながると思います。というのと集中力。なんでもこう、 <u>仕事もそうなんですけど</u> 、集中力ですね。やっぱりやってないのとは大きな違いがあると思います」	G-1 幼少期における強制的な ██████████ 練習を通じて、忍耐力と集中力が身についた	G-1 仕事において、幼少期の強制的な ██████████ 練習を通じて身につけた忍耐力と集中力を活かしている

<p>G-2 「一時間でも、僕には大変でしたよ。でも、練習は裏切らないというか、そういうのは身につけているんですよ。自然に。<u>勉強にしても仕事にしても、頑張っていれば、いつかできるというか、そういう訓練というか</u>ね、それは非常によかったなど。結果として、そういうのはすごく良かったと思いますね。別にそれ目的でやっていたわけではなかったけれど」</p>	<p>G-2 幼少期から積み重ねてきた[]練習によって、頑張ればいつかできるようになるという考えが身についた</p>	<p>G-2 幼少期から積み重ねてきた[]の練習経験によって身についた、頑張ればいつかできるようになるという考え方をもち、仕事にも取り組める</p>
<p>G3 「<u>それ[]を経験したのではっきり言って</u> <u>なんてクソだったんです、いや、クソじゃないですよ、要は努力すればなんとかなるよと</u>。なるから、もちろんそれも腹くくって、とはいえ難しいんで、最初は箸にも棒にもかからなくて、これ、一生受からないんじゃないのってやっぱり思いましたけど、でもやっていくうちに、[]に比べれば全然楽勝。人の感性で判断、点数が決まらないじゃないですか。これはなんとかなるというのがどっかしらにあったんで、毎日10時間勉強しました」</p>	<p>G-3 人の感性が評価に関わる[]の世界で勝負した経験を通じて、努力で何とかなる目標は達成できる確信を持てるようになった</p>	<p>G-3 音大を目指した経験を通じて、努力で何とかなる目標は達成できる確信があったからこそ、[]になることができた</p>

②結果と考察

G の事例において第3章で抽出されていた7か所の発話のうち、職業行動に関連した話題が確認されたのはG-1、G-2、G-3、3か所の発話であった。それぞれの発話において、前章でまとめた自己に見出された音楽経験の意味を参照しながら、語りの展開を丁寧に読み込み、分析を進めた。結果、音楽経験による職業行動への影響は、それぞれ、G-1では「仕事において、幼少期の強制的な[]練習を通じて身につけた忍耐力と集中力を活かしている」、G-2では「幼少期から積み重ねてきて[]の練習経験によって身についた、頑張ればいつかできるようになるという考え方をもち、仕事にも取り組める」、G-3では「音大を目指した経験を通じて、努力で何とかなる目標は達成できる確信があったからこそ、[]になることができた」が導かれた。

G-1は、毎日一時間、強制的に練習をさせられた幼少期の[]学習の経験を通じて忍耐力と集中力が身についたという内容の意味づけを生成した後、発話において「なんでもこう、仕事もそうですけど」と展開をさせ、音楽経験が職業行動においても活かされていることを主張している。

G-2もまた、G-1と同様に、練習は裏切らないという感覚が音楽経験を通じて身についたとし、その上で「勉強にしても仕事にしても、頑張っていれば、いつかできるというか、そういう訓練というかね、それは非常によかったなど」と語りを展開していることが確認された(下線部太字斜字参照)。このように、G-1およびG-2においては、音楽経験を通じて考え方や内面性が育まれたとする自己に対する意味づけによって、職業行動への影響が見出されているのである。

また、G-3の意味づけについては、その発話内容を参照すると音大を目指した経験を通じ

て、努力で何とかなる目標は達成できる確信を持てるようになったことを自己において意味づけ、だからこそ■■■■の試験で猛勉強し、合格できたという職業行動への影響を表す展開が語られている。なお、■■■■は現在も変わらず G の職業である。このことから、音楽経験が、G の就職、そして今現在の職業生活において、少なからずの影響を及ぼしてきたと解釈されていることが明らかとなった。

(8)H の事例

H の事例において第 3 章で抽出された 3 か所の発話のうち、職業行動に関連した話題が確認されたのは H-2、H-3 あった。以下より 2 つの発話箇所に着目し、音楽経験による職業行動への影響について、分析と考察を行なう。

①分析のプロセス

①：前章で抽出した、音楽経験が意味づけられている発話箇所から、職業行動にまつわる語りの有無を確認する。語りの該当部分は、太字斜字で表記、職業行動を端的示す単語は下線。	②：前章にて、同じ発話箇所において導かれた、音楽経験の意味づけの内容を参照し、職業行動への影響がどのように解釈されているかを読みこむ。	③：②から導かれた、音楽経験による職業行動への影響を、簡潔な文章に記述する。
H-2「(大学時代に)ブラックミュージックに開眼しました。ブラックというマイノリティの立場からレゲエミュージックを発信していった、そして世界に立ち向かっていったという姿勢に、感銘というか、共感というか、強いものももらったんです。それからもうずっと、ブラックミュージック一直線。寝ても覚めても音楽漬けの日々が始まってね... 結局、就職も■■■■の会社。 音楽で人間形成をされたといっても過言ではないから...自分にとって近いも遠いも何もなくてはならないもので...(中略)だから、当然、価値観も音楽に多分に影響されていると思いますね」	H-2 音楽によって、価値観が形成された	H-2 音楽経験を通じて価値観が形成され、就職先にも■■■■の会社を選んだ
H-3「特に素晴らしいと感じた音楽に対し、どうしたらこうできるのか、どうしたらこうなるのか、という風に、その背景に好奇心を持ち、研究して、再創造しようとする癖はあるのかなと思いますね。 <u>それは仕事にも、人生にも通じた自分の一貫した姿勢だ</u> と思います。なぜを考えると、なぜなのかが気になることはすごく多い。感動に対するなぜを知りたくなるんです。理由というか仕組みというか...」	H-3 音楽活動において感動の理由や仕組みを知り再創造する癖が、人生に一貫している	H-3 コピーバンド演奏活動において培われた感動の理由を知り再創造する癖は、仕事にも通じている

②結果と考察

H の事例においては、H-2 および H-3、両方において、職業行動への影響が見出されることが確認された。職業行動への影響は、H-2 からは「音楽経験を通じて価値観が形成され、就職先にも■■■■の会社を選んだ」、H-3 からは「コピーバンド演奏活動において培われた感動の理由を知り再創造する癖は、仕事にも通じている」である。

H-2 については、音楽経験の意味づけが生成された発話の展開に着目すると、大学時代に「寝ても覚めても音楽漬けの日々が始まっ」た生活の流れにおいて「結局、就職も■■■■の会

した」、「熱意があるというか、仕事は自分自身もやってる時は集中しているんでしょうけれども、熱意を人に感じさせるとか」と展開されている。これらの語りからは、指揮者の先生の仕事ぶり、自身の普段のそれを鑑み、感動や気づきを見出し、組織をまとめる立場として影響を受けている様子が解釈できよう。もっとも、具体的にどのような形で職業行動に対する影響が及んだかについては語られていないものの、I-2 が生成された発話における一連の展開においては、職業行動に関連した話題として判断した。

(10)J の事例

J の事例において第 3 章で抽出された 3 通りの発話のうち 1 通り、J-1 の発話において、職業行動に関連した話題が確認された。以下より発話箇所に着目し、音楽経験による職業行動への影響について、分析と考察を行なう。

①分析のプロセス

①：前章で抽出した、音楽経験が意味づけられている発話箇所から、職業行動にまつわる語りの有無を確認する。語りの該当部分は、太字斜字で表記、職業行動を端的示す単語は下線。	②：前章にて、同じ発話箇所において導かれた、音楽経験の意味づけの内容を参照し、職業行動への影響がどのように解釈されているかを読みこむ。	③：②から導かれた、音楽経験による職業行動への影響を、簡潔な文章に記述する。
J-1 「ドレドレとか腹筋で鍛えてとかリズム感とか、 <u>それは一生物</u> だと思いました。ちゃんと繰り返しやればできるようになるっていうのは、しみついてる。このフレーズができなかったのを、500 回やったらできるようになるっていう経験は、 <u>他のことにも残るといふか...</u> いつか絶対できるようになる。同じ繰り返しじゃなくて、ゆっくりやったり、早くやったり...っていうバリエーションでね。たとえば語学を身につけるにしても、これだけやるんじゃなくて、こっちからやったり、こうやったりっていう、体動かすことにもそれはどこかに絶対できるようになる方法はあるっていう自信がある。できなかったことができるようになった時気持ちいい、 <u>というのが一生物の感覚、とあります。仕事でもそう思う</u> 」	J-1 中学の吹奏学部での活動や幼少期のピアノ学習で経験した繰り返し練習から、努力すれば必ずできるようになる自信が身についた	J-1 幼少期のピアノ学習と中学の吹奏楽部での活動経験を通じて沁みついた、繰り返しやればできるようになるという感覚は仕事に活かされ、努力すれば絶対にできるという自信をもって取り組んでいける

②結果と考察

J の事例からは、発話 J-1 において、職業行動への影響が見出されていることが確認された。その内容は「幼少期のピアノ学習と中学の吹奏楽部での活動経験を通じてしみついた、繰り返しやればできるようになるという感覚は仕事に活かされ、努力すれば絶対にできるという自信をもって取り組んでいける」であった。

J-1 の発話箇所に着目し、前章でまとめた音楽経験の自己における意味を参照しながら、語りの展開を読みこんでいくと、「ちゃんと繰り返しやればできるようになる」という一生物の感覚が「他のことにも残るといふか...」と語られており、他のことの具体的な領域として「語学」が挙げられた後に、「仕事でもそう思う」という形式で職業行動に関わる領域が

示されている。すなわち、過去の音楽経験を通して育まれた内面的な要素が、職業行動に影響を及ぼすそれとして、結び付けられ、語られているのである。

第3節 総合考察

以上、ここまで、10人の事例においてそれぞれ、音楽経験が意味づけられた発話箇所において、音楽経験による職業行動への影響がどのように解釈されているのかについて、着目してきた。

本節では、10人の事例から確認された、24通りの音楽経験による職業行動への影響(表4-2参照)を、5つの内容に集約し、それぞれにおける影響の見出され方、影響を及ぼした音楽経験に見られる共通性や特徴について着目し、論述していく。以下が5つに集約された、音楽経験による職業行動への影響である。

- ①音楽経験を通じてリーダーシップを学ぶ。
- ②音楽経験で培ったスキルや考え方を応用する。
- ③音楽経験によって成功イメージが描ける。
- ④音楽経験によって、職業が決定づけられる。
- ⑤音楽経験を通じて働き方が変わる。

以降、①から順に、それぞれの指摘に対し、考察を記述する。

【表4-2 24通りの音楽経験による職業行動への影響】

事例	音楽経験による職業行動への影響
A	「A-3 高校時代の吹奏楽部での試練に耐えた自信があったから、起業に挑戦できた」
B	「B-3 大学時代の定期演奏会の成功を通じて、やりたいことをみつけ、それが叶う会社を就職先に決めた」
	「B-4 大学時代の定期演奏会を通じて得た表現のよし悪しは人がどう感じるか次第という気づきを、会議やミーティングの場においても活かしている」
	「B-5 人前での演奏を積み重ねてきた経験によって、仕事関係で人前に出る場合も恐れがなく、むしろ楽しめるようになっている」
C	「C-1 仕事とは別に音楽の時間を確保することで、働き方が改善され、仕事の質も上がる」
	「C-3 出来栄に自信がない状況でも自作の曲を発表し、やる気につながったという経験から、プレゼン資料や文章は、その完成度に関わらず、発表機会の重要性を認識し、アウトプットしている」

	「C-4 オーケストラや吹奏楽部の指揮者の先生やリーダーから、組織の率い方について学んだ」
	「C-5 中学時代に出会った聖飢魔IIやX-JAPANの影響を受け、自身も、限界を決めず、人から何を言われ ても、自分の信じたキャリアを重ねてきた」
	「C-6 チームでの演奏が成功した時に感じる大きな喜びは、仕事も一人ではなく、組織をつくってみんなで 頑張っていこうという気持ちにつながる」
D	「D-2 社会人のリコーダーアンサンブルの活動で、仕事のリフレッシュをする」
	「D-4 演奏を仕上げていく感覚を、新しく発想をする時に応用している」
	「D-5 ピアノで指先の感覚を鍛えたおかげで、パソコン入力の負担が少ない分、人より長く考える時間を取 れる」
E	「E-3 演奏活動を通じて培われた抽象的な事柄をわかりやすく人と共有していくコミュニケーションスキル は、ビジネスシーンでこそ活かされる」
	「E-4 演奏を仕上げてステージで発表するプロセスと、商品開発プロセスは共通しており、仕事をすすめや すい」
F	「F-1 音楽経験を通じて、努力すれば必ずできるようになるという考え方が育まれたことによって、難易度 の高い仕事にもめげずに取り組める」
	「F-4 音楽を追求してきたことによって、ビジネスで発想する力が養われた」
G	「G-1 仕事において、幼少期の強制的な ████████ 練習を通じて身につけた忍耐力と集中力を活かしてい る」
	「G-2 幼少期から積み重ねてきた ████████ の練習経験によって身についた、頑張ればいつかできるよ うになるという考え方をもって、仕事にも取り組める」
	「G-3 音大を目指した経験を通じて、努力で何とかなる目標は達成できる確信があったからこそ、 ████████ ████ になることができた」
H	「H-2 音楽経験を通じて価値観が形成され、就職先にも ████████ の会社を選んだ」
	「H-3 コピーバンドの演奏活動を通して培われた感動の理由を知り再創造する癖は、仕事にも通じている」
I	「I-1 合唱によって、仕事から解放される時間を持てたことで、結果的に業務の質や効率が高まった」
	「I-2 組織を率いるリーダーシップの観点から、合唱指導の指揮者の先生の言動やふるまいに影響を受け る」
J	「J-1 幼少期のピアノ学習と中学の吹奏楽部での活動経験を通じて沁みついた、繰り返しやればできるよう になるという感覚は仕事に活かされ、努力すれば絶対にできるという自信をもって取り組んでいける」

①音楽経験を通じてリーダーシップを学ぶ。

この観点にまとめられた各事例における職業行動への影響は以下である。

①音楽経験を通じてリーダーシップを学ぶ。

「C-4 オーケストラや吹奏楽部の指揮者の先生やリーダーから、組織の率い方について学んだ」

「I-2 組織を率いるリーダーシップの観点から、合唱指導の指揮者の先生の言動やふるまいに影響を受けた」

これらは働く立場の視点において音楽経験からリーダーシップに関する学びや影響を受けたという内容の影響である。

影響の見出され方について着目すると、語り手が、学びを受けた、影響を受けたという解釈に至るプロセスには、職業行動面における具体的な変化については語られていない。すなわち、①に見られる職業行動への影響は、語り手における論理的な解釈に基づいて見出された影響といえる。つまり、音楽経験によって職業行動への影響を受けていることが自覚されたという影響であり、潜在的な段階にあると影響と捉えられる。今後の職業行動において実際に作用することが予測される影響とも解釈できるだろう。

影響を及ぼしたとされる音楽経験に着目すると、そこには明らかに共通する特徴が見出せる。両者とも、演奏活動のシチュエーションが合唱やオーケストラなど団体で行われる音楽活動であり、活動を指揮する指導者の先生から受けた指導やふるまいに着眼しているのである。これらのことから、オーケストラや吹奏楽、合唱といった、指導者のもと、団体での演奏表現を追求していく場が、リーダーシップの観点から学びが得られる場となっていることがうかがえる。

②音楽経験で培ったスキルや考え方を応用する。

具体的に、この観点にまとめられた各事例における職業行動への影響は以下である。

②音楽経験で培ったスキルや考え方を応用する

「B-4 大学時代の定期演奏会を通じて得た表現の良し悪しは人がどう感じるか次第という気づきを、会議やミーティングの場においても活かしている」

「B-5 人前で演奏するという経験を積み重ねてきたことによって、仕事関係で人前に出る場合も恐れがなく、むしろ楽しめるようになっている」

「C-3 出来栄に自信がない状況でも自作の曲を発表し、やる気につながったという経験から、プレゼン資料や文章は、その完成度に関わらず、発表機会の重要性を認識し、アウトプットしている」

「D-4 演奏を仕上げていく感覚を、新しく発想をする時に応用している」

「D-5 ピアノで指先の感覚を鍛えたおかげで、パソコン入力の負担が少ない分、人より長く考える時間が取れる」

「E-3 演奏活動を通じて培われた抽象的な事柄をわかりやすく人と共有していくコミュニケーションスキルは、ビジネスシーンでこそ活かされる」

「E-4 演奏を仕上げてステージで発表するプロセスと、商品開発プロセスは共通しており、仕事をすすめやすい」

「F-4 音楽を追求してきたことによって、ビジネスで発想する力が養われた」

「H-3 コピーバンドの演奏活動において培われた感動の理由を探り再創造する癖は、仕事にも通じている」

②は、音楽経験を通じて得た学びや気づき、獲得したスキルを自身で解釈し、それらが職業行動において活用可能であることの解釈に基づく職業行動への影響である。すなわち、自己変容の解釈に基づく概念的な影響である。

よって影響の見出され方としては、具体的に、音楽経験による内面の変化や変容を自身で認識し、それらが職業行動において有用であることを、語り手自身が論理的に思考し導くという筋道が描かれる。もっとも、音楽経験を通じて得た学びや気づき、獲得したスキルを実際に仕事に活用した結果については、あまり明確には語られておらず「役に立っている」「応用している」「活かしている」といった段階にとどめられている。

また、②において実務に応用できるスキルや考え方としてまとめられた内容は、主に二通りの内容に区分されよう。一つは発想力に関する内容であり、もう一つは人前でのコミュニケーションスキルに関する内容である。なお、前者はD-4、E-4、F-4、H-3、後者はB-4、B-5、C-3、E-3である。D-5のみ、どちらにも区分されなかった。

まず前者についてである。発想力に関するスキルや考え方の形成に影響を及ぼしたとされる音楽経験には共通性が見出された。それは「音楽を追求してきた」「演奏を仕上げてステージで発表する」「コピーバンドの演奏活動において培われた感動の理由を探り再創造する」から読み取れる、理想の演奏を追求してきた取り組みの姿勢である。そして、いずれの場合も活動形態はバンド演奏であった。バンドは、基本的に指導者がいない活動環境である。よって、演奏を仕上げていく過程においては、より自由で主体的な創作活動が

促進されている可能性が見出される。

また、後者である人前でのコミュニケーションに関するスキルや考え方の形成に影響しているとされる音楽経験は基本的に、ライブや演奏会といった人前で演奏する本番を積み重ねてきた経験である。どうしたら伝わるのか、いかに楽しむか、といった観点において「人前で演奏する経験」「定期演奏会」「自信がない状況でも自作の曲を発表」といった音楽経験から受けた影響が認識されている。活動の形態に主だった共通性は見られない一方で、活動時期を確認すると高校大学の時代がメインとなっていることがうかがえる。大人に近づいた年齢で経験する本番での演奏は、自身の楽器演奏それ自体の成功や失敗に対してよりも、むしろ、いかに楽しみ、盛り上げるか、いかに聴かせるかといった点に意識が向けられていることがうかがえる。

また、発想力に関する内容も、コミュニケーションスキルに関する内容も、音楽経験による職業行動への影響が見出される過程においては、音楽経験の記憶が、職業活動に「類推」されていることが見出される。「類推」とは「もとの出来事と類似の状況で想起され、行動や判断を決めるのに役立つ」¹³¹という記憶の特質である。

たとえば、前者の場合、音楽経験と職業行動との間に、理想を形にするプロセスを進めるといふ、類似した状況を見出している。具体的には、新しいビジネスや商品を企画する状況において、曲を仕上げていく過程を想起し、具体的な発想の仕方や改善の取り組みについてアイデアを見出していることがわかるのである。一方、後者の発話においては、音楽経験と職業行動との間に人前で表現するという類似した状況を見出し、プレゼンテーションや会議の場において、演奏会やライブを想起し、ステージ経験で培った視点や観点を役立てていることが読み取れる。

③音楽経験によって仕事の成功イメージが描ける。

具体的に、この観点にまとめられた各事例における職業行動への影響は以下である。

③音楽経験によって仕事の成功イメージが描ける

「A-3 高校時代の吹奏楽部での試練に耐えた自信があったから、起業に挑戦できた」

「F-1 音楽経験を通じて、努力すれば必ずできるようになるという考え方が育まれたことによって、難易度の高い仕事にもめげずに取り組める」

「G-3 音大を目指した経験を通じて、努力で何とかなる目標は達成できる確信があったからこそ、

¹³¹ 佐藤(2014)p.135

■になることができた」

「J-1 幼少期のピアノ学習と中学の吹奏楽部での活動経験を通じて沁みついた、繰り返しやればできるようになるという感覚は仕事に活かされ、絶対にできるという自信をもって取り組んでいける」

「G-1 仕事において、幼少期の強制的な■練習を通じて身につけた忍耐力と集中力を活かしている」

「G-2 幼少期から積み重ねてきた■の練習経験によって身についた、頑張ればいつかできるようになるという考え方をもち、仕事にも取り組める」

③にまとめられた内容は、一定期間、地道に努力を積み重ねて得られた自信によって、ハイレベルなミッションや目標にも成功イメージをもつてのぞめるという、職業行動への影響である。

職業行動の影響が見出されていく筋道は、②と同様である。すなわち音楽経験を通じて得た学びや気づきを自ら解釈し職業行動に活用していくという、自己変容の解釈に基づく概念的な影響である。ただし、③の場合、②とは異なって、音楽経験の影響を裏付けるような職業行動に関するエピソードが伴われる。つまり、音楽経験が職業行動に及ぼす実際の影響への言及がなされている点が、②にはない特徴として指摘できよう。たとえば、A-3やG-3の場合は、難易度の高い目標やミッションに関する具体例として、起業や資格試験への挑戦と成功が語られていた。語り手が、音楽経験による職業行動への影響について、実感をもって捉えていることがうかがえる。

③の冒頭に述べたように、この観点が見出された事例においてはいずれも、繰り返しの練習を続けるという側面に焦点化した音楽経験に対し、職業行動への影響が見出されている。繰り返しの練習経験によって、いつか絶対できるようになるという自信が獲得されたことを、自己に対し意味づけ、それが、仕事での成功イメージを描く力となって、難易度の高い目標やミッションも、挑戦していけるようになったと解釈されているのである。なお、繰り返しの練習経験が見出される音楽活動の形態には2点の特徴が指摘できる。第一に指導者がいる点、第二に比較的若年層における活動であるという点である。また、共通性とまでは言えないまでも、受動的に、あるいは強制的にそれらが行われていた場合も少なからず確認された。

音楽経験において、成功イメージを描けるような自信の獲得にいたる、地道な練習を積み重ねるには、程度の差こそあれ、何かしらの、外的作用が必要であることが示唆される。

④音楽経験によって、職業が決定づけられる。

以下がこの観点にまとめられた各事例における音楽経験による職業行動への影響である。

④音楽経験によって、職業が決定づけられる

「B-3 大学時代の定期演奏会の成功を通じて、やりたいことをみつけ、それが叶う会社を就職先に決めた」

「C-5 中学時代に出会った聖飢魔IIやX-JAPANの影響を受け、自身も、限界を決めず、人から何を言われても、自分の信じたキャリアを重ねてきた」

「C-6 チームでの演奏が成功した時に大きな喜びを感じ、仕事も一人ではなく、組織をつくってみんなで頑張っていこうという気持ちになる」

「H-2 音楽経験を通じて価値観が形成され、就職先にも■■■■の会社を選んだ」

④にまとめられた内容は、音楽経験の影響を受けて形成された価値観や信念が、生き方やキャリアの重ね方を決定づけたというものである。特に象徴的な内容としては、B-3やH-2で確認された、就職への影響を挙げたい。音楽経験が職業の選択や働き方の決断に影響するという視点は、芸術体験の転移効果研究の動向を概観したリッテルマイヤー(2015)が、その著書において重要性を指摘していた内容と重なる。リッテルマイヤーは、人生を方向づけるような体験、自分の在り方に影響を及ぼす「鍵となる体験」が時として芸術体験によって引き起こされること、音楽活動や音楽を聴く体験が個人にとって深い意味を有しているということを解明する糸口が個人の自叙伝や伝記的報告に見出されることを明示し、それへの注目の重要性を指摘しているのである¹³²。

影響の見出され方としては、音楽経験によって実際に引き起こされた職業行動上の出来事、具体的には就職先の決定や働き方の改善に、職業行動への影響が見出されている。すなわち、これらは、実体験としての職業行動に基づく実際的な影響であるといえよう。

また、職業の選択や働き方の決定に影響した音楽経験として想起された内容に着目すると、それらは大きく、聖飢魔IIやX-JAPAN、ボブ・マーリーといったアーティストに夢中になった経験と、演奏会やライブなどのステージで強烈な感動を味わったステージ経験に二分されていることがうかがえた。このことは、リッテルマイヤーによる「鍵となる体験」¹³³の理解に際する示唆につながると考えられる。

¹³² リッテルマイヤー(2015)pp.54-56

¹³³ 「鍵となる体験」については、人生を方向づけるような体験、自分の在り方に影響を及ぼす体験として説明されている。(リッテルマイヤー 2015、p.54)

⑤音楽経験を通じて働き方が変わる。

具体的に、この観点にまとめられた各事例における職業行動への影響は以下である。

⑤音楽経験を通じて働き方が変わる

「C-1 仕事とは別に音楽の時間を確保することで、働き方が改善され、仕事の質も上がる」

「D-2 社会人のリコーダーアンサンブルの活動で、仕事のリフレッシュをする」

「I-1 合唱によって、仕事から解放される時間を持てたことで、結果的に業務の質や効率が高まる」

これらは、音楽活動に伴い働き方に変化が生じたという内容の、職業行動への影響である。具体的に、演奏活動に没頭することによって「仕事の質もあがる」「結果的に業務の質や効率が高まる」といったポジティブな影響が及ぼされているという解釈がなされている。語られた内容はいずれも、余暇活動の重要性や、メンタルヘルスや健康維持における音楽の活用が着目されている¹³⁴。昨今において、注目に値する内容と言えよう。

次に、影響の見出され方としては、実際の経験に基づき、職業行動に対する音楽経験の影響が捉えられている点では、④と同様に、実体験としての職業行動に基づく実際的な影響と言える。

最後に、働き方に影響を及ぼしたと考えられる音楽経験に共通するのは、音楽活動の時期である。いずれも社会人になって以降の音楽経験であり、影響が認識された職業行動と同時に進行されている。そういう意味では、⑤の場合、音楽経験と職業経験が分かちがたく、職業行動の変化を内包した音楽経験としても解釈されよう。

以上、本章では、演奏を続ける MBA コース参加者による音楽経験の意味づけにおいて、音楽経験による職業行動への影響がどのように解釈されているのかに着目し、結果としては、音楽経験による職業行動への影響は5つの内容に集約することができた。

それぞれの内容は、①音楽経験を通じてリーダーシップを学ぶ、②音楽経験で培ったスキルや考え方を応用する、③音楽経験によって成功イメージが描ける、④音楽経験によって、職業が決定づけられる、⑤音楽経験を通じて働き方が変わる、であった。

¹³⁴ このテーマについてはかねてより、多くのビジネス論者、研究者による指摘や主張がなされている。たとえば北穰・安達(2017)『最高のビジネスパフォーマンスを実現する101の習慣』で、通勤中に音楽を聴く習慣が、 α 波を高めリラックス効果をもたらすことで、仕事のパフォーマンスを高める β 派を適正値に保たせる効用を指摘している。

さらに、それぞれにおいてどのように職業行動への影響が見出されているのか、その筋道に着目したところ、①は影響を受けているという気づきに基づいて、②と③は音楽経験を通じた自己変容の認識に基づいて、④と⑤は実際に経験された職業行動の変化に基づいて、それぞれ見出されていることが明らかとなった。ここからは、影響の見出され方が、影響における段階的な質を決定づけていることがうかがえよう。すなわち①は今後の作用が予測される影響、②と③は理論的に解釈された段階の影響、④と⑤は実際に起きた影響である。

一方、職業行動に影響を及ぼしたとされる音楽経験には、①から⑤、それぞれにおいて特定の共通性が見出された。①は指導者のいる団体での演奏活動である点、②は演奏活動を通じた特定の取り組みに着目されている点、③は地道な練習を長期的に継続している点、④は強い感動が見出された出来事に関する点、⑤は演奏活動の時期が社会人以降である点、であった。

これらの考察結果からは、音楽経験が意味づけられた発話箇所に着目し、職業行動にまつわる語りの流れを丁寧に読み込んでいくことで、音楽経験による職業行動への影響について、理論的且つ具体的に理解を深めていけることが確認された。すなわち「音楽経験が仕事に役立つ」といった感覚的な意味合いではなく、具体的にどのような音楽経験が、どういった職業行動への影響へと繋がっているのかということについて、具体的に導出していくことが可能である。

音楽経験による職業行動への影響について具体化できた本研究の結果は、職業行動に限らず、音楽と直接関わりのない生活領域における活動や行動に対する音楽経験の影響を具体的に解釈する際における応用が可能であろう。すなわち音楽にまつわる経験的語りを介することで、語り手において、音楽と直接関わりのない人生の側面、生活領域において担われる役割や立場の活動に対する音楽経験の影響に関する認識を具体的に導くことができるからである。たとえば、家事、育児、介護、闘病に代表される様々な生活領域に対して、音楽経験がどのように影響にしているかといった考察が可能となると考えられる。

もっとも、その際には、語り手の自己が多元化される、語りの場づくりが、重要であろう。具体的には以下の三点について留意すべきである。第一に、語り手自身が、影響を捉えたい生活の領域に関わった活動を行っていること、第二には、聞き手である調査者は、影響を捉えたい生活の領域における活動についての一定の理解を有し、できれば語り手と共有できる具体的な経験や環境があること、そして第三には、語り手と聞き手において、ラポールで説明できる関係が育まれていること、である。

結論

(1)各章の結論

本研究は、演奏を続ける MBA コース参加者による経験的な語りを通して、音楽経験の自己における意味づけと、音楽経験の自己における意味づけに見る職業行動への影響を明らかにすることを目的とし、研究をすすめてきた。以下より、各章ごとの結論について総括した上で、本研究全体としての結論を述べる。

第1章では、語りを通じて、語り手における経験の意味づけを、どのように捉えていけばよいかという問いを基軸とし、分析に際する理論的な枠組みについて検討した。

具体的には、インタビューにおいて収集された語りをどのような質的研究法の立場から捉えるのか、そして、語り手における経験の意味づけをトランスクリプトからどのように読み解いていくのか、さらに、経験の意味づけについての内容分析をどのように進めるのかという三点から、分析の枠組みを論述していった。その結果、結論として以下の内容を導いた。

経験的な語りの語り手は、インタビューの場を介することで、その自己は多元化され、二重の自己となる。二重の自己とは、語る私と語られる私の存在である。

語り手における経験の意味づけは、トランスクリプト上の語る私、すなわち<ストーリー領域>における<いま・ここ>の自己の視点から、語られる私、すなわち<物語世界>における<あのととき・あそこ>の自己に対する評価によって、現在の自己と過去の経験との間に意味が見出され、文脈としてつながりが発生している発話箇所を確認される。よって、語り手における経験の意味づけを分析するにあたっては<ストーリー領域>における<いま・ここ>の自己と、<物語世界>における<あのととき・あそこ>の自己が経験した出来事とのつながりの部分の発話箇所を分析対象とする。

具体的に意味づけの内容を解釈していく際には、意味づけが語り手の個別性に基づく文脈として表れることを考慮する必要がある。よって意味づけについて語られた文脈が失われる、切片化やコード化を分析の手順に組み込まない、事例中心の分析方法をとることが推奨される。

以上を、経験の意味づけを分析する際の理論的な枠組みとしたうえで、第2章以降を展開していった。

第2章では、第3章および第4章の研究に共通する調査方法と、インタビュー協力者である、演奏を続けるMBAコース参加者10人の語り手のプロフィールについて記述した。調査方法については、前章において研究の枠組みとして導いたライフストーリー論の視点に基づいた先行研究を参考に決定している。また、語り手のプロフィールは、インタビューによって語られた内容を通じて、音楽経験のストーリーラインを尊重し作成した。特に語り手の固有性が感じられると判断されたくだりについては、トランスクリプトから具体的なエピソードを伴う発話を引用参照し、語り手がどのように演奏経験を積み重ねてきたのかについての解釈がぶれないように工夫した。

第3章では、第1章および第2章の内容をふまえ、演奏を続けるMBAコース参加者に見る、音楽経験の意味づけについて、明らかにすることを目的とした。具体的には、第2章でプロフィールを記述した演奏を続けるMBAコース参加者による語り手が手掛かりに、各事例において、語り手が音楽経験を意味づけている発話箇所について着目し、音楽経験がどのように意味づけられているのかについて考察を行なった。結論としての総合考察においては、10人の事例分析を通して導かれる音楽経験の意味づけに対する指摘を以下4点にまとめた。

- ①音楽経験の意味づけられる自己の側面は、4通りに集約される。
- ②音楽経験の意味づけには、演奏者としての自己規定を促す機能がある。
- ③音楽経験の影響は、音楽に直接関わりのない人生の側面においても見出される。
- ④夢や目標の達成に重要な内面性の形成に、音楽経験が意味づけられている。

さらに、以上の指摘を統合して解釈した結果、演奏を続けるMBAコース参加者における音楽経験の意味づけとは、演奏者としての自己規定をすすめ、人生における様々な領域の営みに対する音楽経験の影響を見出し、人生の原動力につながる内面性が音楽経験を通じて育まれてきたことを捉える、肯定的な思考行為であることが導かれた。

たとえば、演奏表現を追求することと職業行動を改善すること、両者を社会的な活動として客観的に捉えた場合、それらは明らかに別の生活領域に属する活動である。それぞれが独立した活動として完結しており、両者における質的な繋がりや相互作用を捉えることは難しい。しかしながら本研究のように、両者を経験した個人の意味づけに着目すると、音楽をする自己と仕事をする自己とを明確に隔てるものではなく、むしろ、それぞれの側面

は有機的な繋がりを有していることが見えてくるのである。すなわち、客観的には別の領域に属する活動経験と判断されることも、個人においては、決して隔たれない関係にあると導ける。特に、そういった個人の多様な自己の側面が引き出されるインタビューの場においては、経験と個人とのつながりを積極的にあぶりだせることが明らかにされた。

第4章では、第3章での分析結果から得られた示唆を掘り下げ、演奏を続ける MBA コース参加者による音楽経験の意味づけにおいて、職業行動への影響がどう解釈されているのかについて考察した。具体的には、職業行動との関連に着目しながら、音楽経験が意味づけられていく語りを分析することで、語り手が職業行動に対する音楽経験の影響をどのように解釈しているのかを明らかにした。総合考察においては、音楽経験による職業行動への影響を5つの内容に集約し、それぞれにおいて、影響の見出され方と、影響を及ぼした音楽経験に見られる共通性や特徴についてまとめた。以下が、5つに集約された音楽経験による職業行動への影響である。

- ①音楽経験を通じてリーダーシップを学ぶ。
- ②音楽経験で培ったスキルや考え方を応用する。
- ③音楽経験によって成功イメージが描ける。
- ④音楽経験によって、職業が決定づけられる。
- ⑤音楽経験を通じて働き方が変わる。

影響の見出され方については、①は影響を受けているという気づきに基づいて、②と③は音楽経験を通じた自己変容の認識に基づいて、④と⑤は実際に経験された職業行動の変化に基づいて、それぞれの影響が見出されていることが明らかとなった。

また、職業行動に影響を及ぼしたとされる音楽経験については、①から⑤、それぞれにおいて明確な共通性が見出された。①の音楽経験は指導者のいる団体での演奏活動である点、②の音楽経験は演奏活動を通じた特定の取り組みに着目されている点、③の音楽経験は地道な練習が長期的に継続されている点、④の音楽経験は強い感動が見出された出来事に関連している点、⑤の音楽経験は演奏活動の時期が社会人以降である点、がそれぞれ共通する特徴として導かれた。

これらの結果からは、音楽経験が意味づけられた発話箇所に着目し、職業行動と関連した語りの流れを丁寧に読み込んでいくことで、音楽経験による職業行動への影響につい

て、理論的且つ具体的に理解を深めていけることが明らかである。すなわち本研究を通じては「音楽経験が仕事に役立つ」といった感覚的な意味合いではなく、具体的にどのような音楽経験が、どういった職業行動への影響へと繋がっているのかについて、導出できたといえる。

音楽経験による職業行動への影響について具体化できた本研究の結果は、職業行動に限らず、音楽と直接関わりのない生活領域における活動や行動に対する、音楽経験の影響を具体的に解釈するにあたっての応用が可能となる分析方法を提示できよう。すなわち音楽に関する経験的語りを介し、語り手による経験の意味づけを解釈することで、音楽と直接関わりのない人生の側面、生活領域において担われる役割や立場の活動に対する音楽経験の影響に関する認識を導くことができるからである。たとえば、家事、育児、介護、闘病に代表される様々な生活領域に対して、音楽経験がどのように影響にしているかといった考察が可能と考えられる。

もっとも、その際には、語りの場づくりについて重要となる具体的な条件として以下の三点が提示される。第一に、語り手自身が、影響を捉えたい生活の領域に関わった活動を行っていること、第二に、聞き手である調査者は、影響を捉えたい生活の領域における活動についての一定の理解を有し、できれば語り手と共有できる具体的な経験や環境があること、そして第三には、語り手と聞き手において、ラポールで説明できる関係が育まれていること、ある。

(2)本研究の結論

本研究の結論は以下のようにまとめられる。

演奏を続ける MBA コース参加者における音楽経験の意味づけに着目したことで、音楽経験が及ぼす職業行動への影響について、論理的且つ具体的な理解を導くことができた。

この結果は、語りの場づくりに留意し、音楽経験の意味づけに着目することで、音楽とは直接関係のない人生の側面や生活の領域に対する音楽経験の影響を捉えることが可能であることを提示するものである。

(3)今後の課題

本研究の課題には、以下の2点があげられる。

第一に、音楽経験の意味づけに際し想起される音楽経験の具体的な内容について、深く言及することができていない点である。よって本研究においては全体的に、音楽経験に対する

解釈が曖昧であり「演奏を続けてきた経験」以上に言及できていない。

たとえば、自己における意味づけに際し想起される音楽経験には、それが一定期間継続された活動をさす場合と特定の出来事をさす場合、あるいは、生涯に渡る音楽との関わり全体が想定されている場合などがあつた。このことから、積み重ねられた音楽経験の中から、個人は、その都度、基準と観点を変えながら、一単位としての音楽経験を想起し、語ることがうかがえる。音楽経験の意味づけに際し、音楽経験は自由に編集され、一つの音楽経験として捉えられているのである。

想起される音楽経験についての論理的な整理は、人にとって音楽経験とは何かという本質的な問いと向き合っていくにあたり不可欠な議論であると考ええる。今後は意味づけの際に、どういった音楽経験が想起されるのかについて理論的な整理を進めながら、多様に想起される音楽経験と向き合い、人が音楽を経験することの意味とその後の影響について、さらに深い知見を導いていきたい。

第二に、様々な自己の側面における音楽経験の意味づけが、どのように相互作用を果たしているのかという問題に着目できていない。すなわち、音楽経験が意味づけられた複数の側面の自己を内包する全体としての自己像、つまりは自己概念の解釈にまで議論を展開できなかった点である。第3章においては、語りにおいて確認された側面の自己の位置づけを示した概念図を提示した。しかしながら、そこに示された自己が、どのように内的に作用しあい、全体を構成しているのかという段階にまで議論を深められていない状況にある。

語りで確認された<いま・ここ>の自己の側面は、あくまで認識された自己の一側面であり、語り手個人としての自己それ自体をあらわすものではないのである。よって、語り手個人および個人の人生に対して、音楽経験がどのような影響をもたらすのかについての探究は、音楽経験を様々な意味づけた自己の側面がどのように統合され全体的な自己像をなしているのか、ひいてはそれがどのような自己概念へとつながっていくのかという観点に着目した議論をもって、初めて形をなすと考えられる。今後は、第3章で導いた、音楽経験の自己における意味づけの結果をふまえ、さらなる議論の発展を目指したい。

引用・参考文献一覧

【事典項目】

新村出編(2008)『広辞苑 第六版』岩波書店

オンライン辞典『デジタル大辞泉』小学館

<http://www.daijisen.jp/digital/> accessed August 5, 2017

【単行本】

Haberlandt K.(1999)*Human memory*. Boston, MA: Allyn and Bacon.

Pillemer, D. B.(1998). *Momentous events, vivid memories*. Cambridge, MA: Harvard University Press

Stephanie Pitts.(2010)*Valuing Musical Participation*. Ashgate Publishing Limited

Stephanie Pitts.(2012)*Chances and Choices: Exploring the Impact of Music Education*, Oxford University Press.

William Labov.(1972)*Language in the Inner City*, Univ of Pennsylvania Press,

Young, K. Galloway.(1987)*Taleworlds and Storyrealms : The Phenomenology of Narrative*, Nijhoff

秋田喜代美、能智正博 監修(2007)『初めての質的研究法 教育・学習編』東京図書

アルフレッド・シュッツ(1980)『現象学的社会学』(Alfred Schütz, *Der sinnhafte Aufbau der sozialen Welt*, Wien, 1932) 佐藤嘉一訳、紀伊國屋書店

池内慈朗(2014)『ハーバード・プロジェクト・ゼロの芸術認知理論とその実践—内なる知性とクリエイティビティを育むハワード・ガードナーの教育戦略』東信堂

石黒広昭・佐伯胖・佐藤学・宮崎清孝(2013)『新装版 心理学と教育実践の間で』東京大学出版会

市村直久・早川操・松浦良充・広石英記(2003)『経験の意味世界をひらく—教育にとっての経験とは何か—』東信堂

岩崎久美子・下村英雄・柳澤文敬・伊藤素江・村田維沙・堀一輝(2016)『経験資本と学習—首都大学生 949 人の大規模調査結果』明石書店

江藤さおり(2003)『研究のすすめ方 テーマ設定から論文執筆・学会発表までの総合スキル』阪急コミュニケーションズ

榎本博明(1998)『「自己」の心理学—自分探しへの誘い—』サイエンス社

遠藤由美(2005)「自己概念についての概念整理」の項、中島義明・繁柁算男・箱田裕司編『新・

- 心理学の基礎知識』有斐閣ブックス、pp.201-202
- 大久保孝治(2008)『ライフストーリー分析—質的調査入門』学文社
- 岡田昌毅(2013)『働くひとの心理学：働くこと、キャリアを発達させること、そして生涯発達すること』ナカニシヤ出版
- 香川正弘・鈴木眞理・佐々木秀和編(2012)『よくわかる生涯学習』ミネルヴァ書房
- 柏木仁(2016)『キャリア論研究』文眞堂
- 加藤一郎(2004)『語りとしてのキャリア：メタファーを通じたキャリアの構成』白桃書房
- 川喜田二郎(1986)『KJ法——渾沌をして語らしめる』中央公論社
- 木下康仁(2003)『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』弘文堂
- 木下康仁(2007)『ライブ講義M-G-T-A 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂
- 北澤毅／古賀正義 編(2008)『質的調査法を学ぶ人のために』世界思想社
- 佐伯胖(1975)『学びの構造』東洋館出版社
- キャサリン・コーラー・リースマン(2014)『人間科学のためのナラティブ研究法』(Catherine Kohler Riessman. *Narrative Methods for the Human Sciences*. SAGE Publications, 2008)大久保功子・宮坂道夫 監訳、クオリティケア
- C・リッテルマイヤー(2015)『芸術体験の転移効果』(Christian Rittelmeyer. *Warum und wozu ästhetische Bildung? : über Transferwirkungen künstlerischer Tätigkeiten ; ein Forschungsüberblick*. ATHENA-Verlag, 2012)遠藤孝夫訳、東信堂
- ジェームス・L・マーセル(1967)『音楽教育と人間形成』(James L Mursell, *Human Values in Music Education*, Burdett and Company, 1934)美田節子訳、音楽之友社
- トリシャ・グリーンハル(2008)『グリーンハル教授の物語医療学講座』三輪書店
- 経済産業省 経済産業政策局 新規産業室(2015)『“生きる力”を育む起業家教育のススメ—小学校・中学校・高等学校における実践的な教育の導入例』
- 経済産業省 中部経済産業局(2007)『起業家教育・導入実践の手引き』
- 桜井厚(2002)『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房
- 桜井厚・小林多寿子(2005)『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』せりか書房
- 桜井厚(2012)『ライフストーリー論』東京：弘文堂
- 桜井厚・石川良子(2015)『ライフストーリー研究に何ができるか：対話的構築主義の批判的継承』東京：新曜社

- 佐藤郁哉(2002)『フィールドワークの技法』新曜社
- 佐藤郁哉(2008)『実践 質的データ分析入門』新曜社
- 佐藤浩一・下島 裕美・越智 啓太(2008)『自伝的記憶の心理学』北王子書房
- J・ブルーナー(1999)『意味の復権 フォークサイコロジーに向けて』(Bruner Jerome, *Acts of Meaning*, Harvard University Press, 1990)岡本夏木、仲渡一美、吉村啓子訳、ナカニシヤ出版
- ジョン・デューイ(2004)『経験と教育』(John Dewey, *Experience and Education*, New York:Macmillan, 1938)市村尚久訳、大文字版
- 鈴木眞理・永井健夫・梨本雄太郎(2011)『生涯学習の基礎』学分社
- 全米キャリア発達学会著(2013)『D・E・スーパーの生涯と理論——キャリアガイダンス・カウンセリングの世界的泰斗のすべて——』(The Career Development Association. *From Vocational Guidance to Career Counseling: Essays to Honor Donald E. Super*.1993)仙崎武・下村英雄編著、図書文化
- 相良陽一郎(2000)『日常記憶—記憶研究の最前線』大田信夫・多鹿秀継編、北大路書房
- 高橋勝(2007)『経験のメタモルフォーゼ<自己変成の人間学>』勁草書房
- 高松里(2014)『ライフストーリー・レビュー入門:過去に光を当てる、ナラティブ・アプローチの新しい方法』創元社
- 詫摩 武俊(1978)『心理学の基礎知識』有斐閣ブックス
- 田坂宏志(2003)『これから働き方はどう変わるのか すべての人々が“社会起業家”となる時代』ダイヤモンド社
- 立田慶裕・岩槻知也(2007)『家庭・学校・社会で育む発達資産』北大路書房
- 中西信男(1995)『ライフ・キャリアの心理学:自己実現と成人期』ナカニシヤ出版
- 中村香・三輪健二(2012)『生涯学習社会の展開』玉川大学出版部
- 能智正博編(2006)『<語り>と出会う——質的研究の新たな展開に向けて——』ミネルヴァ書房
- ピーター・F・ドラッカー(1985)『イノベーションと企業家精神—実践と原理』(P.F.Drucker. *Innovation and Entrepreneurship*. Butterworth- Heinemann, 1985)上田惇生・佐々木実智男(翻訳)、ダイヤモンド社
- ピエール・ブルデュー(1990)『ディスタンクシオン I, II』(Bourdieu, Pierre . *La Distinction: Critique Sociale du jugement*, Paris: Éditions de Minuit, 1979)石井洋二郎訳、白揚舎
- 樋口耕一(2014)『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—』

ナカニシヤ出版

福井一(2010)『音楽の感動を科学する』化学同人

ベンチャー創造協議会(経済産業省事務局・文部科学省作成協力)(2015)『指導事例集『生きる力』を育む起業家教育のススメ～小学校・中学校・高等学校における実践的な教育の導入例～』

北條元治・安達純子(2017)『最高のビジネスパフォーマンスを実現する 101 の習慣』秀和システム

本多佐保美(2004)『音楽教育史研究における制度・教師・学習者の関係性の探求—国民学校時代の音楽教育体験者の聞き取り調査に基づいて—』株式会社正文社

マーク・L・サビカス著(2015)『サビカスカリヤ・カウンセリング理論：「自己構成」によるライフデザインアプローチ』(Mark L. Savickas, *Career Counseling (Theories of Psychotherapy)*, Amer Psychological Assn, 2011)乙須敏紀訳、東京：福村出版

増渕幸男(1994)『教育的価値論の研究』玉川出版部

森下高治(1983)『職業行動の心理学』ナカニシヤ出版

文部科学省・国立教育政策研究所(2014)『キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関する調査研究報告書—もう一歩先へ、キャリア教育を究める—』実業之日本社

安田裕子(2012)『不妊治療者の人生選択—ライフストーリーを捉えるナラティブ・アプローチ』新曜社

山田富秋編著(2005)『ライフストーリーの社会学』北樹出版

やまだようこ・無藤隆編(1995)『生涯発達心理学とは何か 理論と方法』金子書房

やまだようこ編著(2000)『人生を物語る』ミネルヴァ書房

やまだようこ(2007a)『質的心理学の方法—語りをきく—』新曜社

やまだようこ(2007b)『喪失の語り—生成のライフストーリー—』新曜社

やまだようこ(2008)『人生と病いの語り (質的心理学講座)』東京大学出版会

やまだようこ・麻生武・サトウタツヤ・能智正博・秋田喜代美・矢守克也編(2013)『質的心理学ハンドブック』新曜社

弓野憲一(2005)『世界の創造性教育』ナカニシヤ出版

ルードルフ・E.ラドシー、J.デーヴィッド・ボイル(1985)『音楽行動の心理学』(Rudolf E. Radocy, J. David Boyle, *Psychological Foundations of Musical Behavior*, Charles C Thomas Pub Ltd, 1979)徳丸義彦、藤田芙美子、北川純子訳、音楽之友社

ロバート・アトキンソン(2006)『私たちの中にある物語 人生のストーリーを書く意義と

方法』 (Robert G. Atkinson. *The Life Story Interview (Qualitative Research Methods)*).

SAGE Publications, 1998)塚田守訳、ミネルヴァ書房

渡辺三枝子編著(2007)『キャリアの心理学——キャリア支援への発達のアプローチ』京都：
ナカニシヤ出版

【論文および雑誌記事】

Bluck, S.(2003)“Autobiographical memory:Exploring its unctions in everyday life.” In *Memory, 11*,
pp.113-123

Conway , M.A. & Rubin, D.C(1993)“The structure of autobiographical memory. ” In A.F. Collins, S.
E. Grathercole, M. A. Conway, & P. E. Morris(Eds.), *Theories of memory*, Hove, UK : Lawrence
Wrbaum Associates. pp.103-137

Creswell, J.W. (2007) “Deseigning a Qualitative Study. ” In *Qualitative inquiry and research design:
Choosing among five approaches (2nd ed.)*. Thousand Oaks,

Fieker Wermer.(2005)“Is early music education necessary in order to reach a professional
level? ” In *ERASMUS THEMATIC NETWORK FOR MUSIC*. pp.2-87

Habermas, T., & Bluck, S(2000)Getting a life : The emergence of life story in adolescence. *Psychological
Bulletin*126, pp.748-769

Habermas,T.(2011) Autobiographical reasoning: Arguing and narrating from a biographical perspective.
New Directions for Child and Adolescent Development, 131, pp.1-17

Jane W. Davidson, Michael J. A. Howe, Derek G. Moore and John A. Sloboda.(1996)

“The Role of family influences in the development of musical performance.” In *British Journal
of Developmental Psychology*, Volume 14, Issue 4, pp.399–412

MacLearn, K. C., & Fourier, M. A,(2008) The content and processes of autobiographical reasoning
in narrative identity. *Journal of Research in Personality* 42、 pp.527-545

Martin A. Conway & David C. Rubin. (1993) “The structure of autobiographical memory. ”In
Theories of Memory . pp. 103-137

Maria Manturzewsk.(1990) “A Biographic Study of Life-Span Development of Professional
Musicians” In *Psychology of Music*, pp.112-139

Pillemer, D. B.(2003)Directive functions of autobiographical memory: The guiding power of the
specific episode. *Memory, 11*, pp.103-202

Stephanie Pitts.(2005)“What makes an audience? Investigating the roles and experiences of listeners

- at a chamber music festival.” In *Music and Letters* - Volume 86, Number 2, Oxford University Press
- Stephanie Pitts.(2008)“Extra-curricular Music in UK schools: Investigating the Aimes, Experiences and Impact of Adolescent Musical Participation.” In *International Journal of Education & the Arts*, 9(10)
- Stephanie Pitts.(2009) “Roots and routes in adult musical participation: investigating the impact of home and school on lifelong musical interest and involvement.” In *British Journal of Music Education*, 26(3): pp.241-256.
- Stephanie Pitts, Polly Ives.(2010) “Getting Giddy about Music: secrets of success for engaging young children and their families in live music.” In *Research commissioned by Music in the Round and Sheffield City Council*
- 浅野信彦(2004)「教師教育研究におけるライフストーリー分析の視点—学校の組織的文脈に焦点をあてて—」『文教大学教育学部紀要』38、pp.83-93
- 吾田富士子(1998)「経験の体験化—森有正とボルノアの経験概念—」『北海道女子大学短期大学部研究紀』第35号、pp.235-246
- 天沼英雄(2013)「ピエール・ブルデュー 教育社会学論——階級・権力・不平等の観点——」、『山梨学院大学現代ビジネス研究』第6号、pp.3-21
- 荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ(2012)「複線経路・等至性モデルのTEM図の描き方の一例」『立命館人間科学研究』第25号、pp.95-107
- 飯野令子(2009)「日本語教師のライフストーリーを語る場における経験の意味生成—語り手と聞き手の相互作用の分析から—」『言語文化教育研究』9、pp.17-41
- 石垣健二(2008)「道徳教育としての体育—序説—道徳教育(論)」『批判および身体的経験の必要性—体育・スポーツ哲学研究』31(1)、pp.27-45
- 石川麻衣・宮崎美砂子(2008)「高齢者のライフストーリーから捉えた健康づくりの構造—独居女性高齢者の健康づくりの意味付けを通して—」『千葉看会誌』Vol.14 No.2, pp.10-19
- 池内慈朗(2000)「芸術教育における認知的研究の成果と『理解のための教授法』の関連性—ハーバード・プロジェクト・ゼロによる『志向と理解への新しいアプローチ』における教育実践の諸相—」『福井大学教育実践研究』第25号、pp.83-97
- 池内慈朗(2004)「芸術教育における転移とメタファーの認知的研究—ハーバード・プロジェクト・ゼロの芸術的思考の探求—」『美術科教育学会誌(25)』, pp.13-25

- 池内慈朗(2007)「PISA 調査で測れない美術教育で育まれるキー・コンピテンシー —美術科教員養成におけるスタンダードの基礎として—」『福井大学教育学部実践研究』第 32 号, pp.1-6
- 池内慈朗(2008)「プロジェクト REAP : 芸術教育が他教科に及ぼす影響に関する研究—プロジェクト・ゼロの「学習転移」と芸術教育の見直し—」『美術科教育学会誌(29)』, pp.37-47
- 井中あけみ(2010)「音楽教育における合奏の効果的指導の考察—キー・コンピテンシー、ESD の視点から—」『豊橋創造大学短期大学部研究紀要』第 27 号、pp.19-38
- 稲葉光行・抱井尚子(2011)「質的データ分析におけるグランデッドなテキストマイニング・アプローチの提案—がん告知の可否をめぐるフォーカスグループでの議論の分析か図表から—」『政策科学』18-3, Mar,2011、pp.255-276
- 梅本堯夫(1999)『子どもと音楽』東京大学出版会
- 大谷尚(2007)「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案——着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き——」『名古屋大学大学院教育発達化学研究科紀要(教育科学)』第 54 巻第 2 号、pp.27-44
- 岡本信一(2001)「音楽科における思考力育成カリキュラムの展開—R.Marzano の “Dimensions of Thinking” を中心に—」『カリキュラム研究』第 10 号、pp.125-143
- 片岡栄美(1997)「家族の再生産戦略としての文化資本の相続」、『家族社会学研究』、日本家族社会学会、pp.23-28
- 片岡栄美(1998)「音楽愛好者の特徴と音楽ジャンルの親近性—音楽の好みと学歴・職業—」、『関東学院大学人文科学研究報 (22)』、pp.147-162
- 片岡栄美(2001)「教育達成過程における家族の教育戦略—文化資本効果と学校外教育投資効果のジェンダー差を中心に—」、『教育学研究 68(3)』、日本教育学会、pp.259-273
- 片岡栄美(2013a)「芸術文化消費と象徴資本の社会学——ブルデュー理論からみた日本文化の構造と象徴——」、『文化経済学』6(1)、pp.13-25、文化経済学会
- 片岡栄美(2013b)「団塊世代の音楽受容にみる階層性 —— 音楽体験の変遷を中心とした分析から ——」、『技術マネジメント研究 』(13)、pp.57-60、横浜国立大学技術マネジメント研究学会
- 亀崎美沙子(2010)「ライフヒストリーとライフストーリーの相違 : 桜井厚の議論を手がかりに」『東京家政大学博物館紀要』15、pp.11-23
- 川上義明(2010)「企業生成・発展の変動要因としての企業家(VII)——企業家、企業家精

- 神, イノベーター——」『福岡大学商学論叢』54/2・3・4、pp.153-189
- 川名和美(2014)「我が国の起業家教育の意義と課題—『起業教育』と『起業家学習』のための『地域つながりづくり』—」『日本政策金融公庫論集 (25)』、pp.59-80
- 佐藤浩一・越智啓太・神谷俊次・上原泉・川口潤・大田信夫(2005)「自伝的記憶研究の理論と方法」『日本認知科学会』 pp.2-21
- 佐藤浩一 (2006)「自伝的記憶の構造と機能」新潟大学大学院現代社会文化研究科博士論文
- 佐藤浩一・清水寛之(2012)「中学校時代の教師に関する自伝的記憶：日常的な出来事に対する自伝的推論の検討」『認知心理学研究』第10巻第1号、pp.13-27
- 佐藤浩一(2014)「自伝的推論—概念ならびに評価方法の整理と包括的な枠組みの提案—」『群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編』第63巻、pp.129-148
- 佐藤浩一(2015)「教師の思い出、家族の思い出に対する自伝的推論—教職志望、世代との関連—」『群馬大学紀要 人文・社会科学編』第64巻、pp.145-156
- 佐藤浩一(2017)「成功体験と失敗体験に対する自伝的推論とアイデンティティ発達適応との関連」『認知心理学研究』第14巻第2号、pp.69-72
- 島崎篤子(2007)「音楽教育における学力」『教育学部紀要』文教大学教育学部、第41集、pp.31-41
- 菅原いづみ(1999)「音楽教育における知識・創造性支援」『コンピュータ&エデュケーション』Vol.6
- 杉浦健(2001)「生涯発達における転機の語りの役割について」『近畿大学教育論叢』第12巻第2号
- 杉江淑子(1990)「現代青年の音楽表現行動形成過程—ケース・スタディによる音楽歴分析を中心として—」、『滋賀大学教育学部紀要』第40号、pp.169-182
- 杉江淑子(1995)「成人のアマチュア音楽活動に関する調査」、文部省科学研究費補助金研究成果報告書
- 杉江淑子(2001)「音楽的趣味・嗜好にみられる男女間の相違と形成要因——音楽の稽古事経験および家庭の音楽的環境の影響に焦点を合わせて——」『滋賀大学教育学部紀要』No.51、pp.107-118
- 杉江淑子(2004)「10代半ばの年齢層の音楽空間と音楽的趣味・嗜好の形成—社会的・文化的パースペクティブに基づく実証的研究—」文部科学省科学研究費補助金基盤研究C2研究成果報告書
- 杉江淑子(2006)「ポピュラー音楽活動者のインフォーマルな音楽学習——アマチュア・バン

- 下のケース・スタディ——」『関西楽理研究』 Vol.23, pp.69-87
- 杉江淑子(2009)「10年間の研究動向：生涯学習社会における音楽教育研究」、『音楽教育の未来：日本音楽教育学会設立40周年記念論文集』日本音楽教育学会編、音楽之友社
- 杉山昂平(2016)「音楽と思考の以外な結びつき——『芸術体験の転移効果』紹介」ピティナ・リサーチ・アソシエイトより引用
- http://www.piano.or.jp/report/04ess/research/2016/03/03_20943.html
accessed March 4, 2016
- 砂賀道子・二渡玉江(2008)「乳がん体験者の自己概念の変化と乳房再建の意味づけ」『北関東医学会』 58, pp.377-386
- 須永浩子(2008)「創造的技能領域の熟達化における独自性欲求の影響：準熟達者を中心として」国際基督教大学 教養学部 教育学科 心理学専攻 卒業論文
- 田垣正普(2002)「『障害受容』における生涯発達とライフストーリー観点の意義——日本の中途肢体障害者研究を中心に——」『京都大学大学院教育学研究科紀要』 48, pp.342-352
- 田垣正普(2004)「中途重度肢体障害者は障害をどのように意味づけるか：脊髄損傷者のライフストーリーより」『社会心理学研究』 第19巻第3号、pp.159-174
- 田上恭子(2009)「青年期と成人期における自伝的記憶の方向づけ機能に関する予備的研究」『弘前大学教育学部紀要』 101号、pp.151-156
- 高須一(2015)「これからの学校音楽教育が子どもに培うべき学力とは何か——21世紀型スキルを視点にした創造性の育成——」『音楽教育実践ジャーナル』 Vol.13 no.1、pp.6-17
- 高橋徹(2011)「スポーツの経験的価値についての検討——プラグマティズム思想における経験概念の議論から——」『体育・スポーツ哲学研究』 33-2、pp.91-105
- 高橋雅延(2000)「記憶と自己」『記憶研究の最前線』 pp.229-246 北大路書房
- 高橋雅延・清水寛之(2002)「記憶特性質問紙による自伝的記憶の研究——日本語版記憶特性質問紙の作成——」『日本心理学会第66回大会発表論文集』 747
- 高橋勅徳・松嶋登(2009)「企業家語りに潜むビッグ・ストーリー：方法としてのナラティブ・アプローチ」『国民経済雑誌』 200(3)、pp.47-69
- 塚田守(2008)「ライフストーリー・インタビューの可能性」『椋山女学園大学研究論集』 第39号、pp.1-13
- 寺下貴美(2011)「第7回 質的研究方法論～質的データを科学的に分析するために～」『日本放射線技術学会雑誌』 第67巻、第4号

- 豊田則成・松田保(2003)「元トップアスリートの転機についての語り」『びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要』創刊号、pp.117-131
- 中川恵里子(2009)「ライフストーリー・インタビューの世代間学習としての可能性」『生涯学習基盤経営研究』第34号、pp.99
- 中澤潤・中道圭人・朝比奈美佳・古賀彩(2008)「芸術活動の熟達者と非熟達者の幼少期の環境の違い」『千葉大学教育学部研究紀要 第56巻』pp.125-130
- 中野千野(2014)「言語教育におけるライフストーリー研究の意義とは何か 複数言語環境で成長する子どもを巡る『まなざし』に着目して」『リテラシー図』14、pp.85-101
- 中村雅也(2015)「視覚障害教師の障害の経験と意味づけ—生徒とのかかわりを中心に—」『立命館人間科学研究』第32号、pp.3-18
- 西島央(2003)「誰がクラシックコンサートに行くのか—東京・新潟・鹿児島のコンサート会場におけるアンケート調査をもとに—」、『東京大学大学院教育学研究科紀要 第43巻』、pp.57-76
- 法岡淑子、有馬昌宏、折橋徹彦、松田芳郎(2011)「現代学生の主体的芸術活動経歴と芸術の需要形成」『文化経済学論文集』第2号、pp.121-129
- 長谷川倫子(2009)「音楽愛好者の語りにみる学校教育での音楽学習 —音楽愛好へとどのように繋がっていったか—」『音楽学習研究』5、pp. 11-19.
- 長谷川倫子(2013)「団塊世代の音楽受容にみる階層性—音楽体験の変遷を中心とした分析から—」横浜国立大学 環境情報研究院・環境情報学府、博士論文
- 畠澤朗・宮原真紀・味園美和(2006)「日本と海外における音楽教育の比較研究：よりよい音楽のあり方をめざして」、『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 Vol.16』、pp.1-18
- 原憲一郎(2002)「アントレプレナーシップの概念試論」『龍谷大学経営学論集』第42巻第2号、pp.44-57
- ふじえみつる(2007)「美術教育のための「能力観」の研究」『Art Education(28)』、pp.335-346
- 藤谷智子(2001)「児童期における自己概念の形成とメタ認知」『武庫川女子大紀要(人文・社会科学)49』、pp.21-30
- 藤原正仁(2013)「ゲーム産業における女性開発者のキャリア発達—創造的専門家のライフストーリーからの展望—」『東京大学大学院情報学環紀要情報学研究』85、pp.45-95
- 船越理恵(2016)「音楽体験の転移効果研究におけるライフストーリー活用の有効性—C・リッテルマイヤー(2015)『芸術体験の転移効果』の批判的検討を通して—」『音楽教育研究

ジャーナル』第45号、pp.1-13

古山典子(2010)「音楽科教育における「創造性」—小学校教諭へのインタビューから—

『就実論叢』第39巻、pp.191-203

堀田涼子(2016)「成人期にある脊髄損傷者の自己に対する意味づけ」茨城県立医療大学大学院、博士論文

本間千尋(2012)「日本におけるピアノ文化の普及—高度経済成長期の大衆化を中心として—」、『慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 第74号』、pp.33-54

山田智之(2007)「中学生の進路関連自己効力感に影響を与える美術科の取り組みに関する研究」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要』No.8、pp.347-356

山本真理子・松井豊・山坂由紀子(1982)「認知された自己の諸側面の構造」『教育心理学研究』30、pp.64-68

李ソニョン(2014)「非認知能力が労働市場の成果に与える影響について」『日本労働研究雑誌』No.650、pp.30-43

初出一覧

本論文は、以下に掲載した論文、学会発表等を経て執筆した。

- a...船越理恵(2014)「『音楽を楽しむ習慣』の形成に関する質的分析」東京藝術大学大学院音楽研究科研究生論文
- b...船越理恵(2016)「音楽体験の転移効果研究におけるライフストーリー活用の有効性—C・リッテルマイヤー(2015)『芸術体験の転移効果』の批判的検討を通して—」『音楽教育研究ジャーナル』第45号、pp.1-13
- c...船越理恵(2016)「ライフストーリーから捉える音楽体験の転移効果における特徴」日本音楽教育学会第47回口頭発表

a は主に第2章における調査方法の検討において、b は主に序論における本研究の視点において、c は主に序論における先行研究の検討において、それぞれの内容を反映し記述した。

謝辞

本論文を提出するにあたり、これまでお世話になった方々に対する感謝の気持ちを、述べたいと思います。

本研究は、X 大学大学院の音楽同好会に所属されている皆様からの多大な協力と理解のもとに成り立っています。およそ 5 年前に初めて同コミュニティのみなさんに対しインタビューのエントリーをして以来、これまで実に多くの方が、協力の手をさしのべてくださいました。その人数は、このたびの博士論文において実際に語りを使用させていただいた 10 名の方々をはじめ、30 名を上回ります。どの方も、お忙しい中、快く、そして丁寧に、インタビューに応じてくださったことが心に残っております。出勤前の早朝の喫茶店にて、お昼休みにオフィスにおじゃまする形で、さらには出張に発つ直前の空き時間や海外滞在先のホテルにインターネット通話でアクセスさせてもらうなど、お一人おひとりが、スケジュールを工面して時間を捻出してくださったことには感謝しかありません。本当にありがとうございました。そしてこれからも、音楽する場を介して、そのような同行会のみなさんと繋がっていただけることに、喜びを感じます。

本論文の執筆にあたり、ご指導をいただきました佐野靖先生、山下薫子先生、毛利嘉孝先生、岡田猛先生、茂呂雄二先生、新藤浩伸先生に深く御礼を申し上げます。特に、主任指導教官の佐野先生には、2013 年の音楽教育研究室在籍時より、大変お世話になりました。先生のあたたかく、きめ細やかなご指導のもとに、本研究の完成にまでいたることができました。また、音楽教育研究室の皆様にも、研究の過程においては様々なアドバイスをいただきました。心から感謝いたします。

博士論文を手がける過程においては、たとえその研究がどれほどささいなものであったとしても、多くの方々のお力添えなくしては到底成し得ないことを、幾度となく痛感いたしました。最後に、私の研究活動をいつも理解し応援してくれる夫、息子、両親、妹、義母に、心からの感謝の気持ちを伝えたいと思います。

2017 年 10 月

船越理恵